

14  
1807  
2

270  
74  
2

幼稚園初步卷二



人形

飯島半十郎 著



此の業の、人形を駢列し、家倫の道を知らむるもの  
みして、即修身學の一端あり、凡父母を慕ひ、兄弟を親  
しむり、幼稚自然の性あり、其の性ももろづき、保育をか  
し、あまを擴充せり、家倫の道、おのづかの明あるべし、  
幼稚の嗜みて人形を翫ぶものあり、故に今五等親の  
人形を示せりと、左の如し、

一等親 父母 養父母 夫 子 養子

幼稚園初步 卷二

早稲田大學 圖書館  
藏 27.3.12 文 書

二等親 祖父母 繼母 伯叔父姑 夫の父母 兄弟

姊妹 妻 姪 孫 子の婦 嫡母 妾

三等親 曾祖父母 伯叔父の婦 夫の姪 從父兄弟

姊妹 異父兄弟姊妹 夫の祖父母 夫の伯叔父姑

庶子 姪の婦 繼父 夫の兄弟姊妹

四等親 高祖父母 從祖伯叔父姑 夫の兄弟姊妹

兄弟の妻 再從兄弟姊妹 外祖父母 舅姨 前夫

の子 兄弟の孫 從父兄弟の子 外甥 曾孫 孫

の婦 妻の父母 姑の子 玄孫 外孫 女婿

保母の五等親の人形を駢列し、おまの父母あり、おま

の兄弟あり、是の一等親あり、是の二等親ありと、詳細に

解説して幼稚は示し、幼稚稍其の等級順序を知るに至

らば、更又一等親より駢列し、種々の問をおまの幼稚を

と答をおまのむべし、今其の問答の例をあぐ、

保母 問て曰く、五等親中の最尊敬すべきもの、誰ある

や、 答て曰く、五等親中第一の、父上あり、母上あり、父母

の、我身を生み給ふ、父母を孝まへ、我身おまきあり、さ

れば其の恩の、天地は同くと、古人も申されき、

保母 答て曰く、是の如く、父母の恩は、天地と同じく是の如く、勉

めて孝道を盡し、其の恩は報ゆべし、

幼稚 問て曰く、孝道といふ、如何なる道あるや、

保母 答て曰く、孝道は、さまざまあるも、畢竟はよく父母

の心を安んじ、よく父母の身を養ふの二あり、

幼稚 問て曰く、養父母は事ふるは、父母は事ふると同く

くして宜しきや、

保母 答て曰く、固より然る、養父母は事ふるは、生この父

母は事ふるより、更に孝道を盡すべし、

保母 問て曰く、祖父母は、何等親あるや、

幼稚 答て曰く、祖父母は、即父母の父母なりとて、二等親中

にあらず、

保母 曰く、さきば父母とおあはれく、おを尊重すべし、

幼稚 問て曰く、繼母は事ふる道は、如何、

保母 答て曰く、繼母は、實母のあとへ、父の再び迎へ給ひ

し、母上あり、生この母よりも、更に孝道を盡すべし、

免角繼母繼子の間、睦まじく、かゝぬをのたれば、よ

く注意すべし、

保母 問て曰く、伯叔父姑は、父の何にあたるや、

幼稚 答て曰く、父の兄を指して伯父といひ、父の弟を指

して叔父といひ、父の姉妹を指して姑といふあり、  
父の兄弟姉妹あまば、何れも尊敬すべきあり、

幼稚

問て曰く、兄弟姉妹の道は、如何、

保母

答て曰く、兄弟は、同根より出でたる數幹おちのこぎのおとく  
同幹より出たる數枝のおとく、さきの初學訓とい  
へる書は、兄弟は同胞どうどうの親しく、父母は次ぎたる天  
倫あり、三親の内、父子夫婦よりも交まじり久くきり兄  
弟ありと云へり、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ふ、是  
兄弟の道あり、

幼稚

問て曰く、姉妹の道は、如何、

二巻中

保母

答て曰く、姉妹と兄弟といひ、男女の性あまば、其の所  
為わざこそ少く異あまども、其情實まことは至りては、同  
一あり、

保母

問て曰く、曾祖父母は、何等親あるや、

幼稚

答て曰く、三等親あり、

保母

問て曰く、曾祖父母は、父の何にあたるや、

幼稚

答て曰く、曾祖父母は、祖父の父母あまば、即父の祖  
父母にあたるあり、

保母

問て曰く、舅姨は、何等親あるや、

幼稚

答て曰く、四等親あり、

保母 問て曰く妻の父母ハ、何等親あるや、  
幼稚 答て曰く、五等親あり、

此の如く保母、幼稚、相問ひ相答へて、互に家倫の道を講  
明せべし、

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

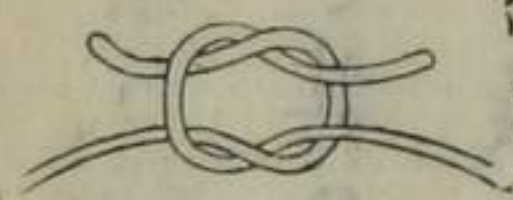
結法

此の業ハ、指掌中の一術あり、諸工業の階梯とて、中  
に就き其の日用欠くべし、ざる結法の如きは、最注  
意して教ふべし、

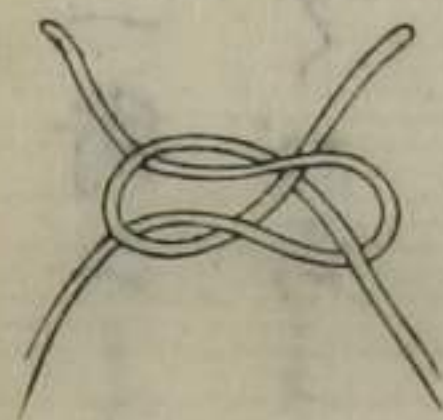
保母先ツ二條の紐子を取、幼稚に示して曰く、此の紐  
子を結ぶは、種々の法あり、此の如くあり、かく結ぶは、  
去れハ、去ま結ひあり、細大の糸、紐繩等、何にかまらをも用  
ふる法あり、かくして引きて結ぶハ、去まハ、機結び  
あり、機糸を結ぶ法あり、故に、名づく、去まハ、縫糸などの  
細き糸を結ぶは用ふる法あり、去まハ、去ま結ひあり、

一とまりあけといふ、まづて諸物をくくりさげかどま  
るみ用ゐる法あり、あまの、相引結ひあり、糸、繩、細大と  
つづき、用ゐる法あり、あまのいぶ結ひあり、荷物又ハ  
垣根かど結ぶと用ゐる法あり、おれハ水引の結ひあり、  
諸進物とあけて結ぶと用ゐる法あり、其の結法ハ、大略  
左圖の如し、

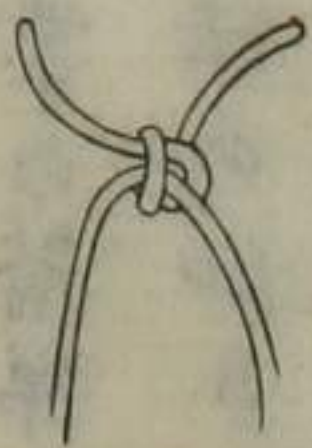
こま結び



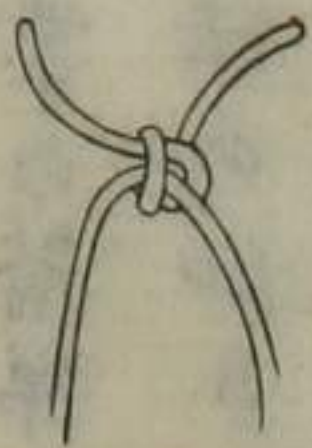
機結び



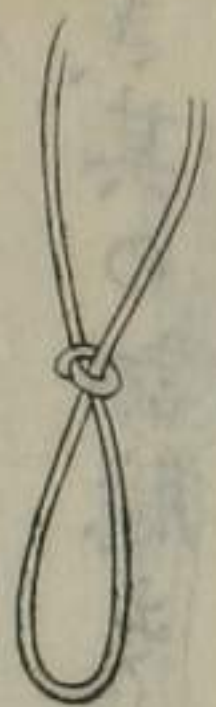
甲



乙



くまむまび

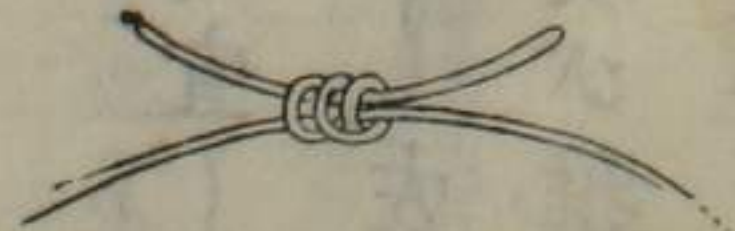


相引結

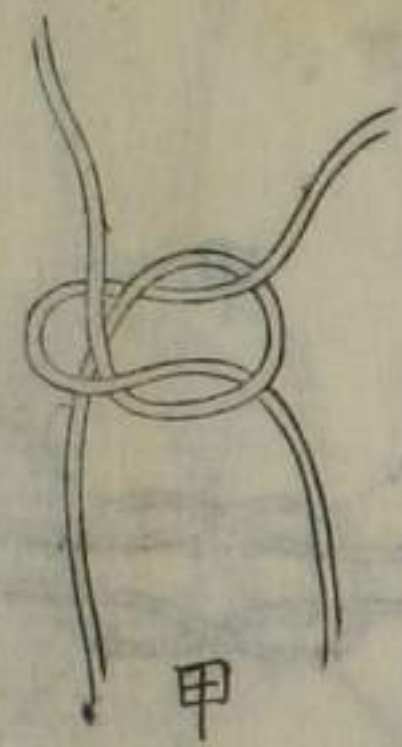
甲



乙

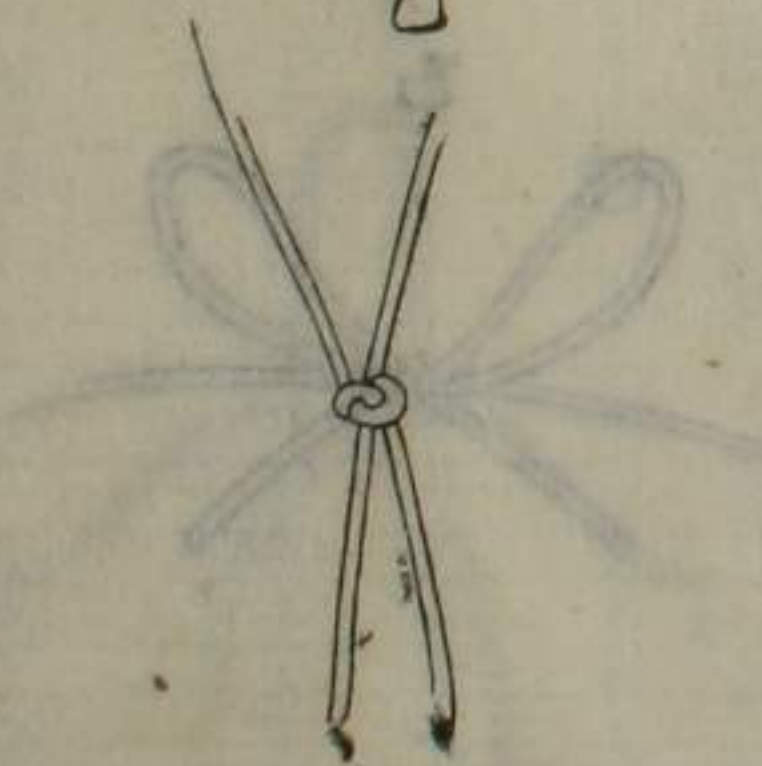


いぶ結ひ

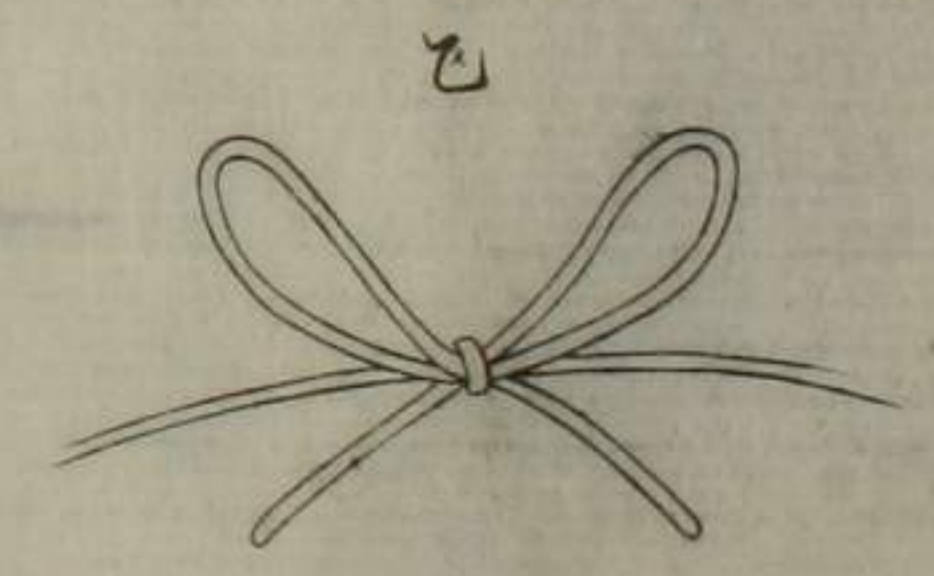
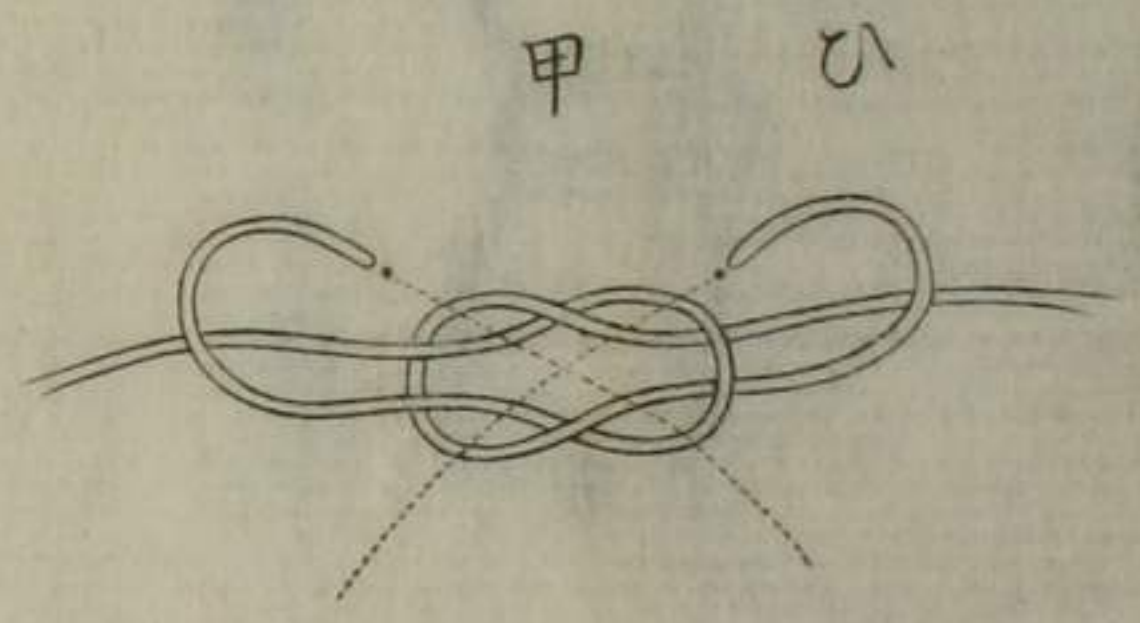


甲

乙



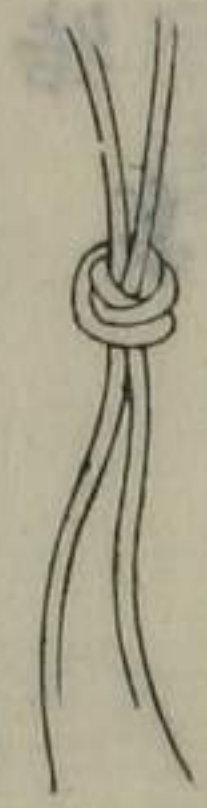
水引結ひ



此の他日常もちゐる所の結法猶多く保母宜く實地  
よ就き其の記憶も所の諸結法を示さへ左に載せ  
る諸圖ハ古人の嘗て蒐集せし結ひの記及び雅遊漫録  
よと拔翠せしものあり今寫して保母の教料とせ

相生結あひまひむす

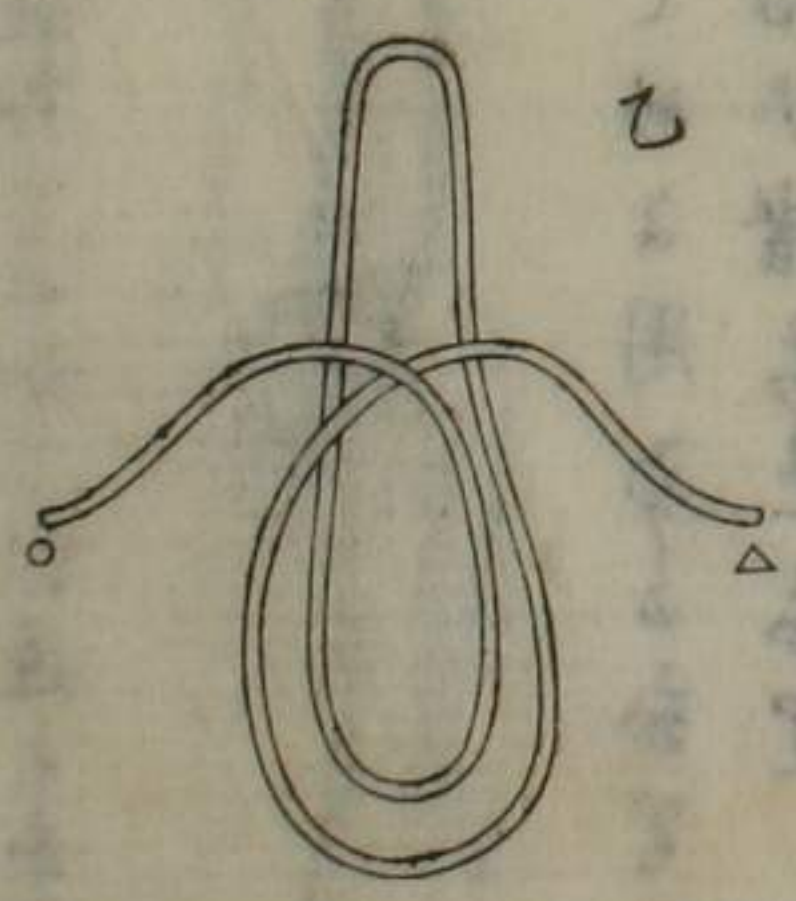
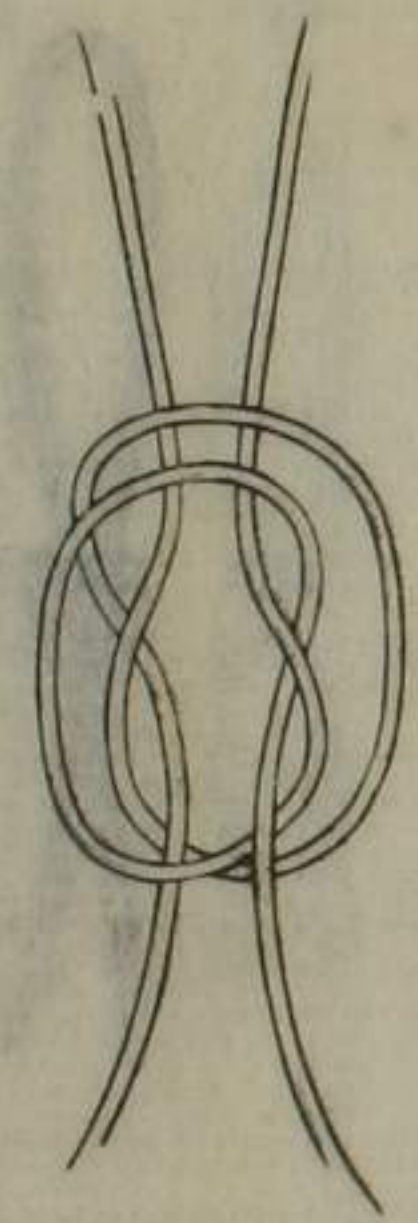
表



裏



結ひの手段左の如く



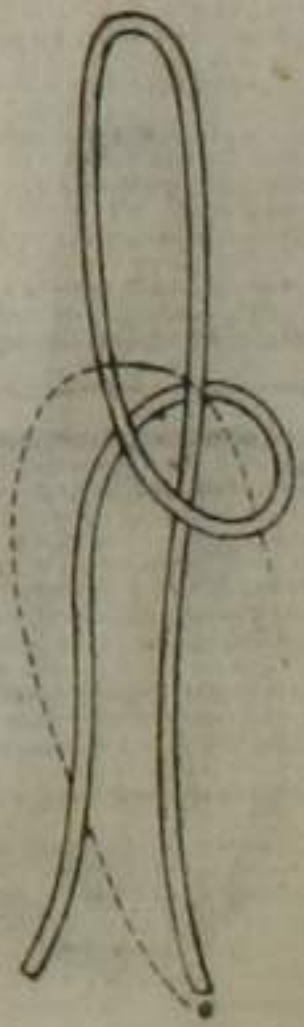
△此を裏へたる中の穴へ通し  
下へ引去むるあり  
○裏より前へ通せあり



諸結ひ



此印の如く引通せり



此の結ひのまへて長緒類のとめ用ゐるあり即  
まいこんふたつれの袖下の結ひ緒とあり

表



左片結

裏



此の結ひのまへて短緒の留用ゐるあり  
右片結

表



裏

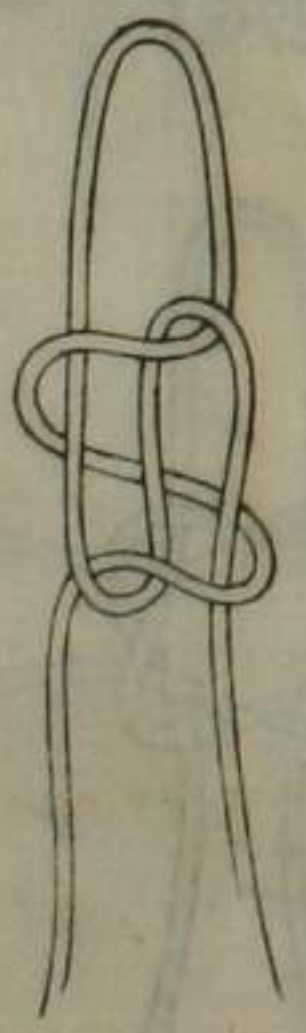


叶結

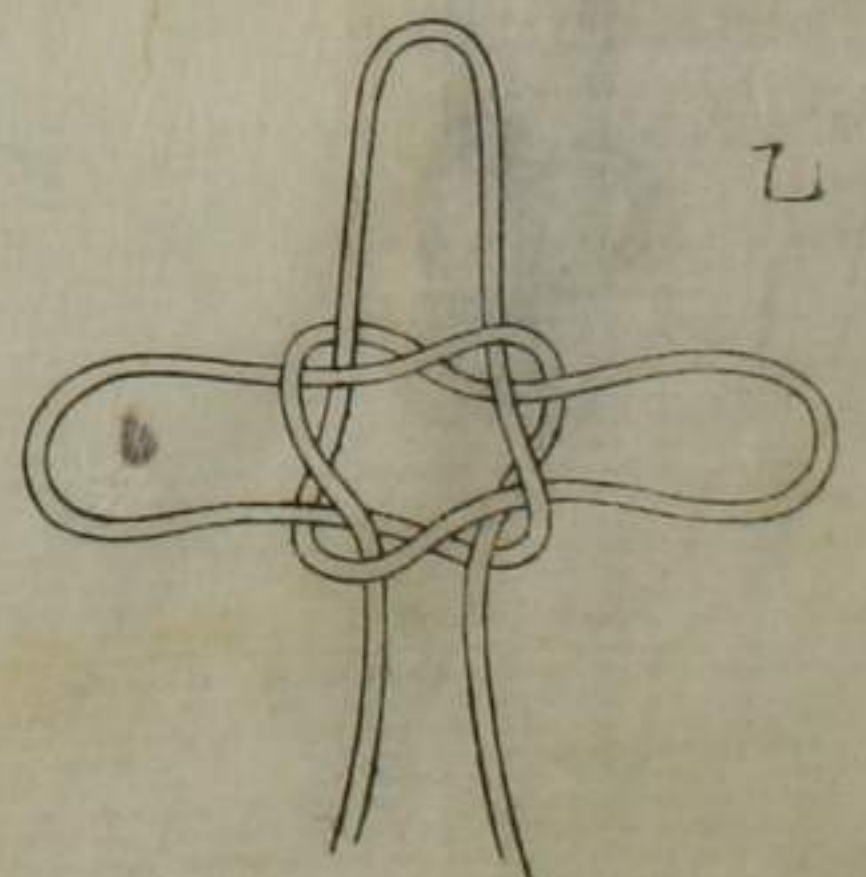
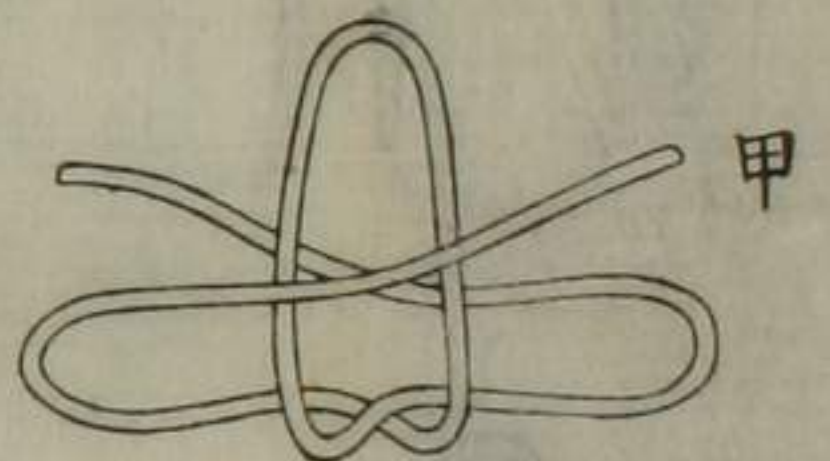
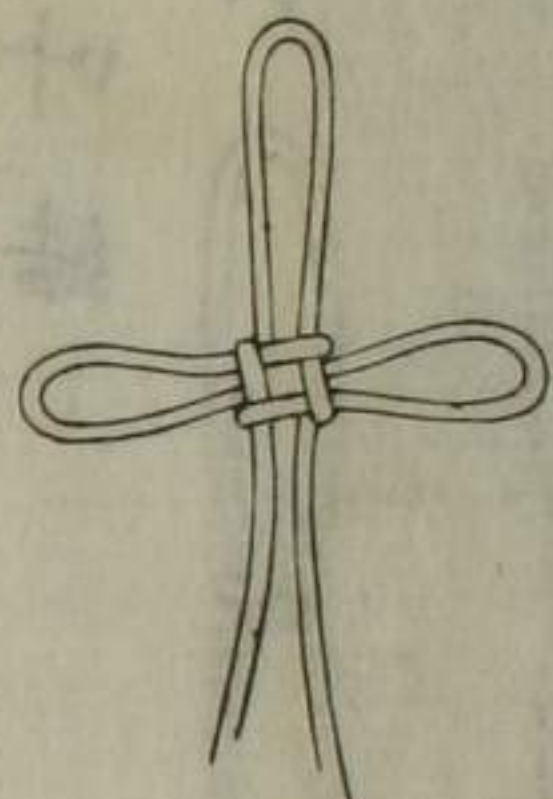
表



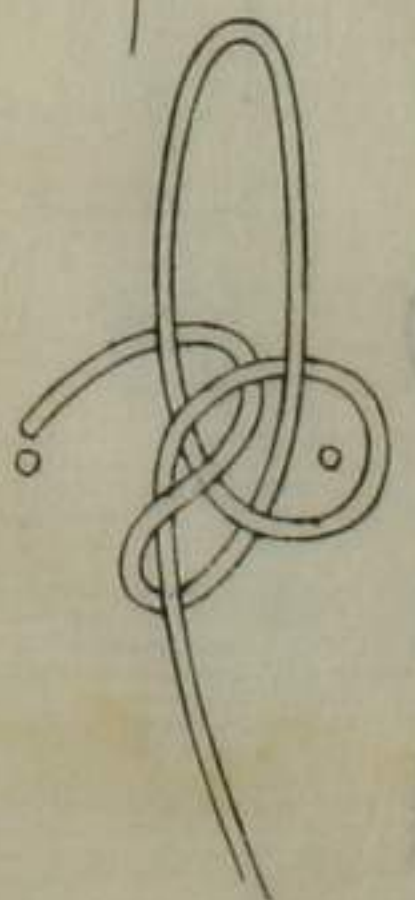
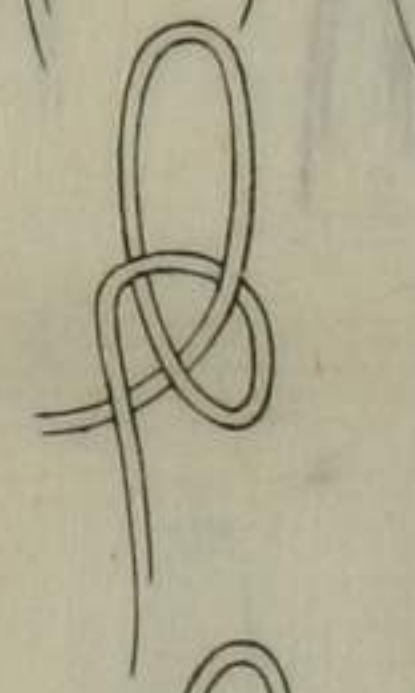
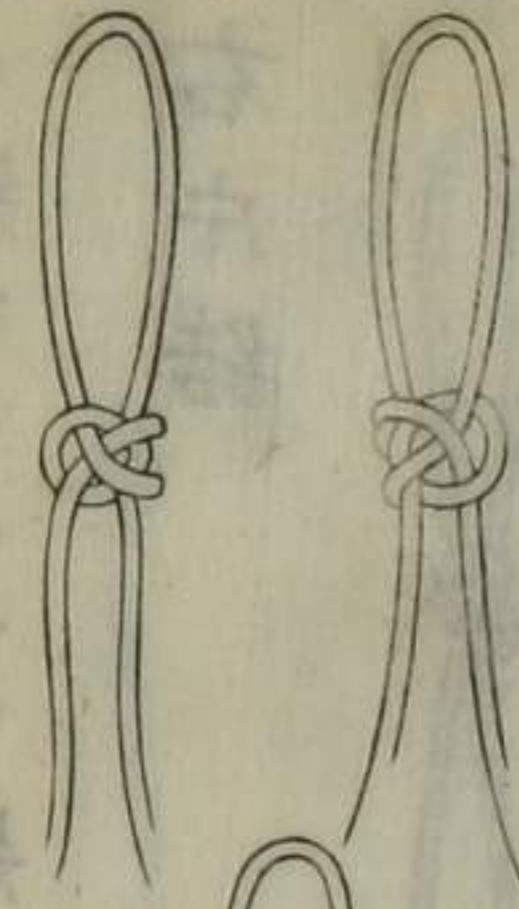
裏



上巻結 あひまき

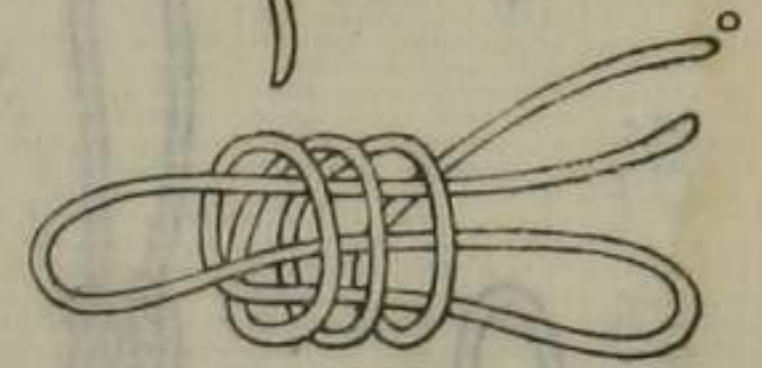
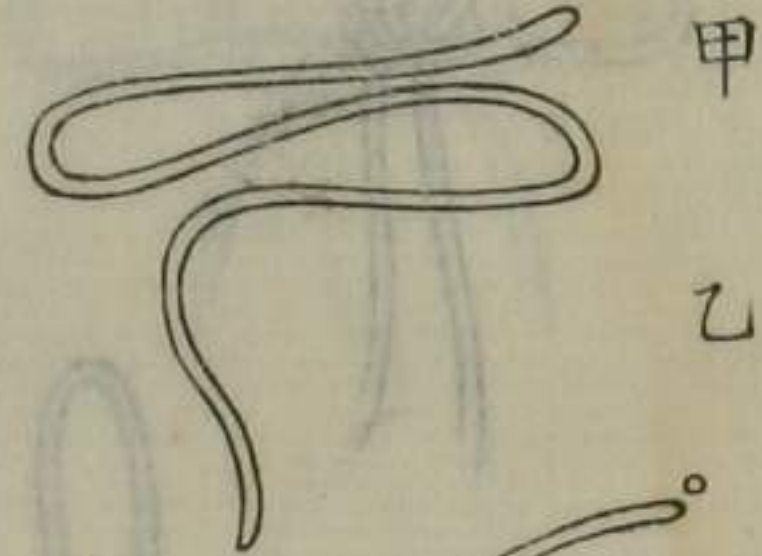
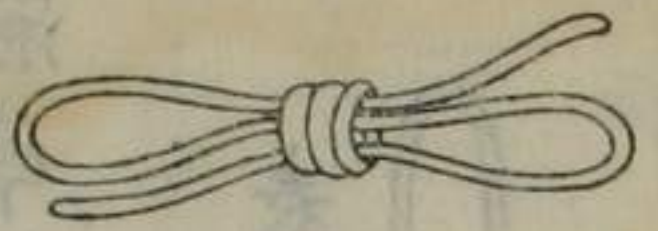


免頭結 めんがしら



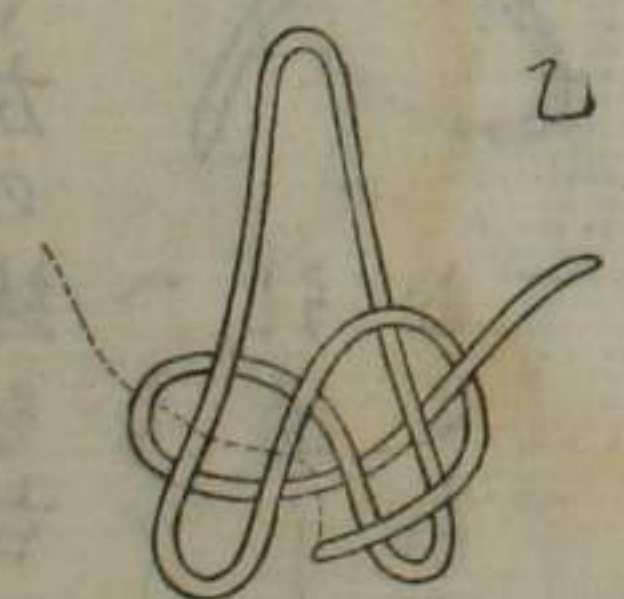
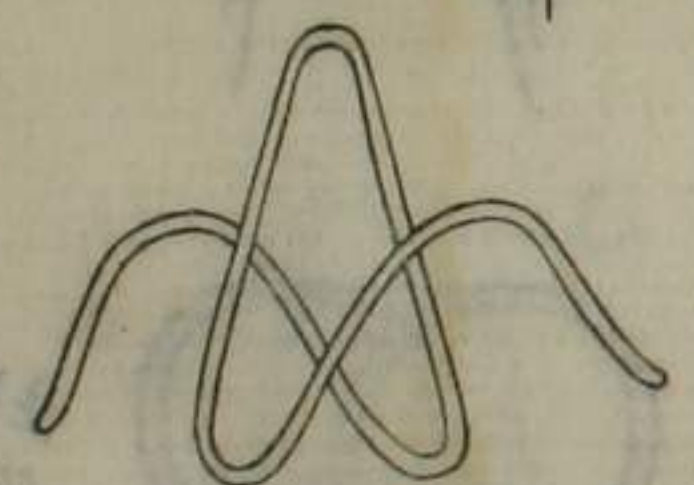
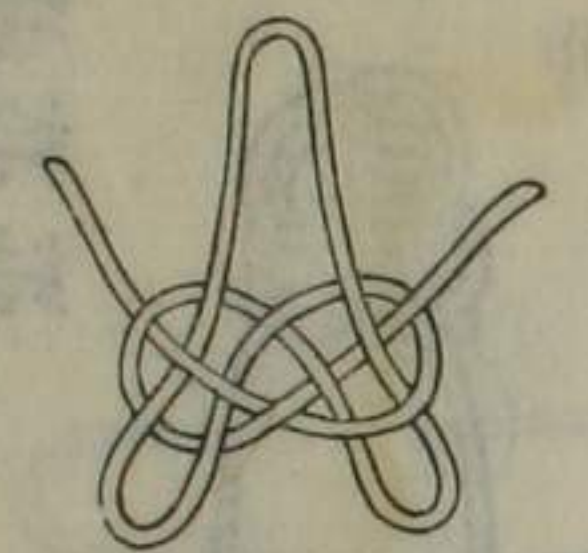
○此のちを右の穴へ前より  
向へ通し結ぶるなり

東結 あづまむすび



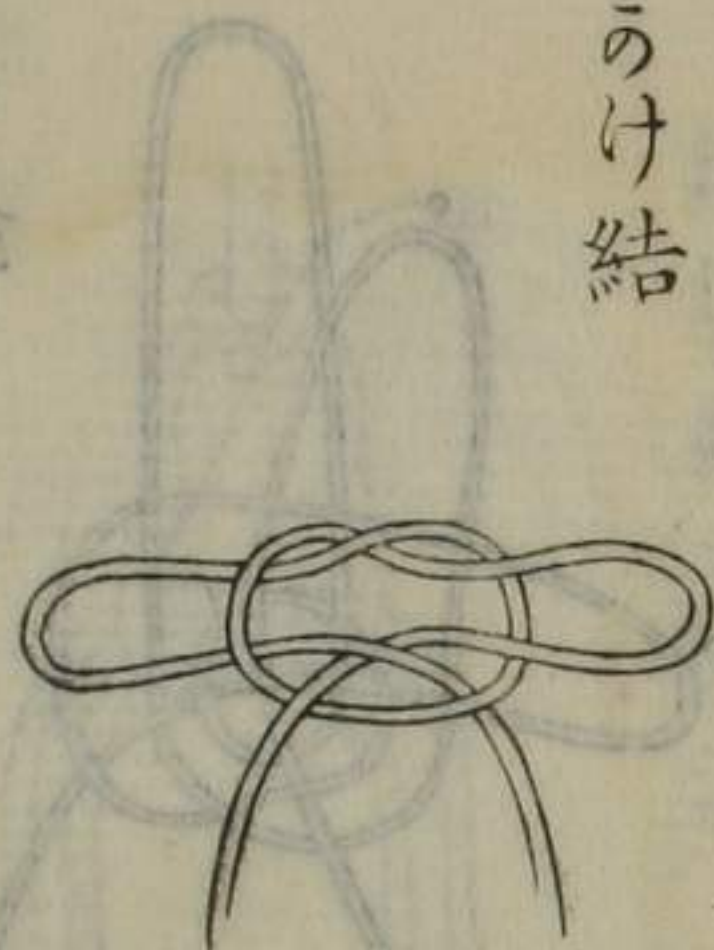
○此の印のあるちを  
三ツかざかりし  
かの中へ通し左へ引  
出し口をくろよせ  
結ぶるなり

四ツ手結

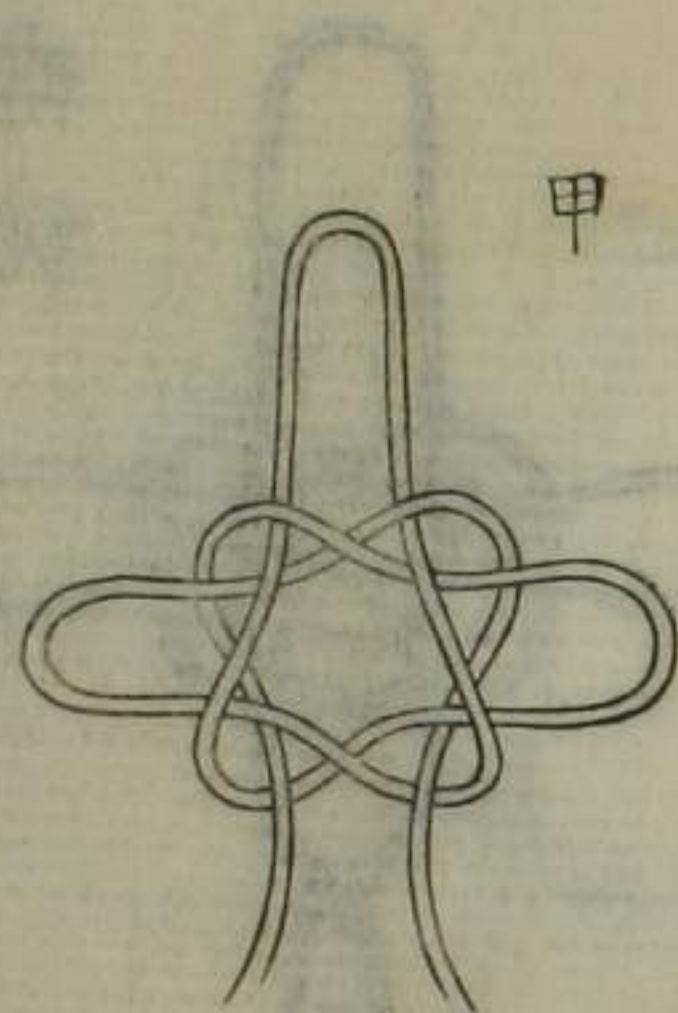


此の結ひハ几帳の釣糸とに用ゐるなり

のけ結

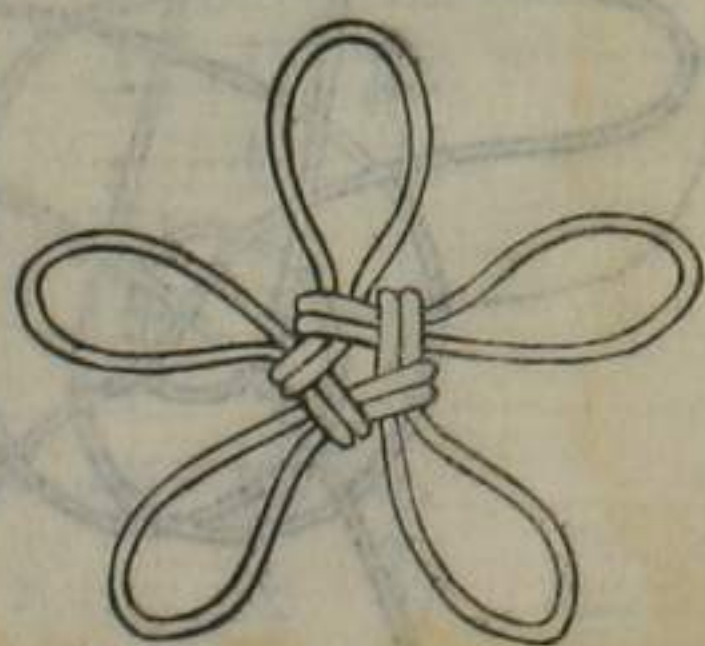


のけ帯結

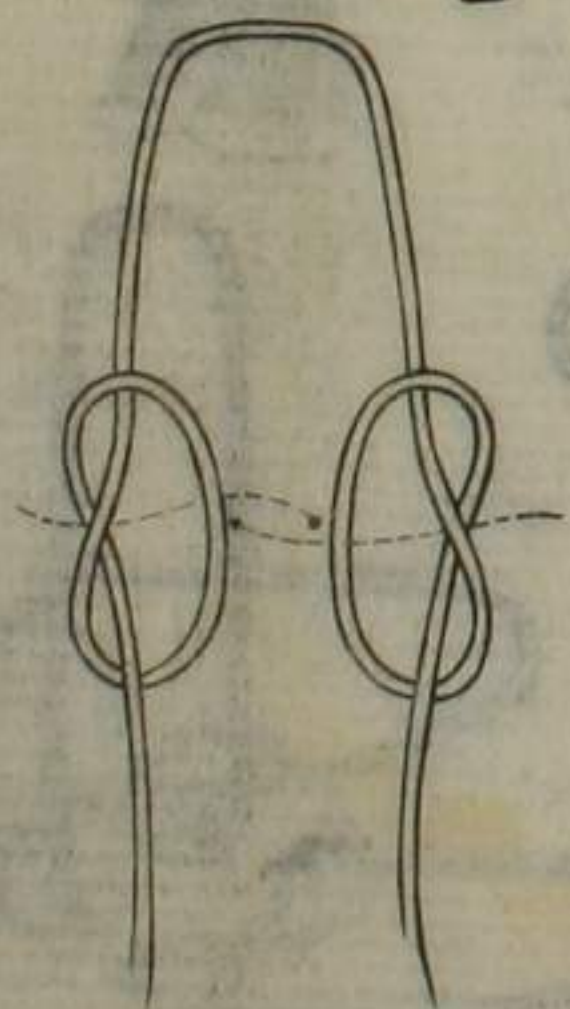


甲

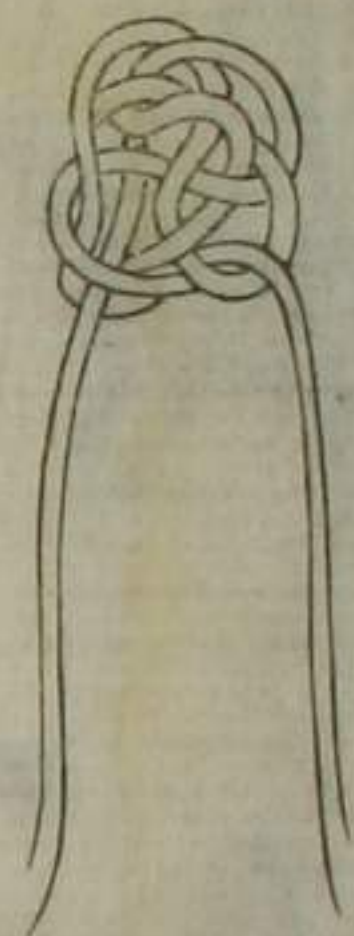
花結



乙



蜻蛉結

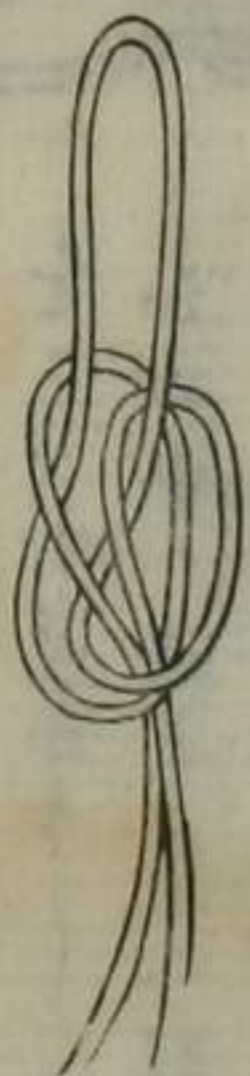


麻苧結



表

裏



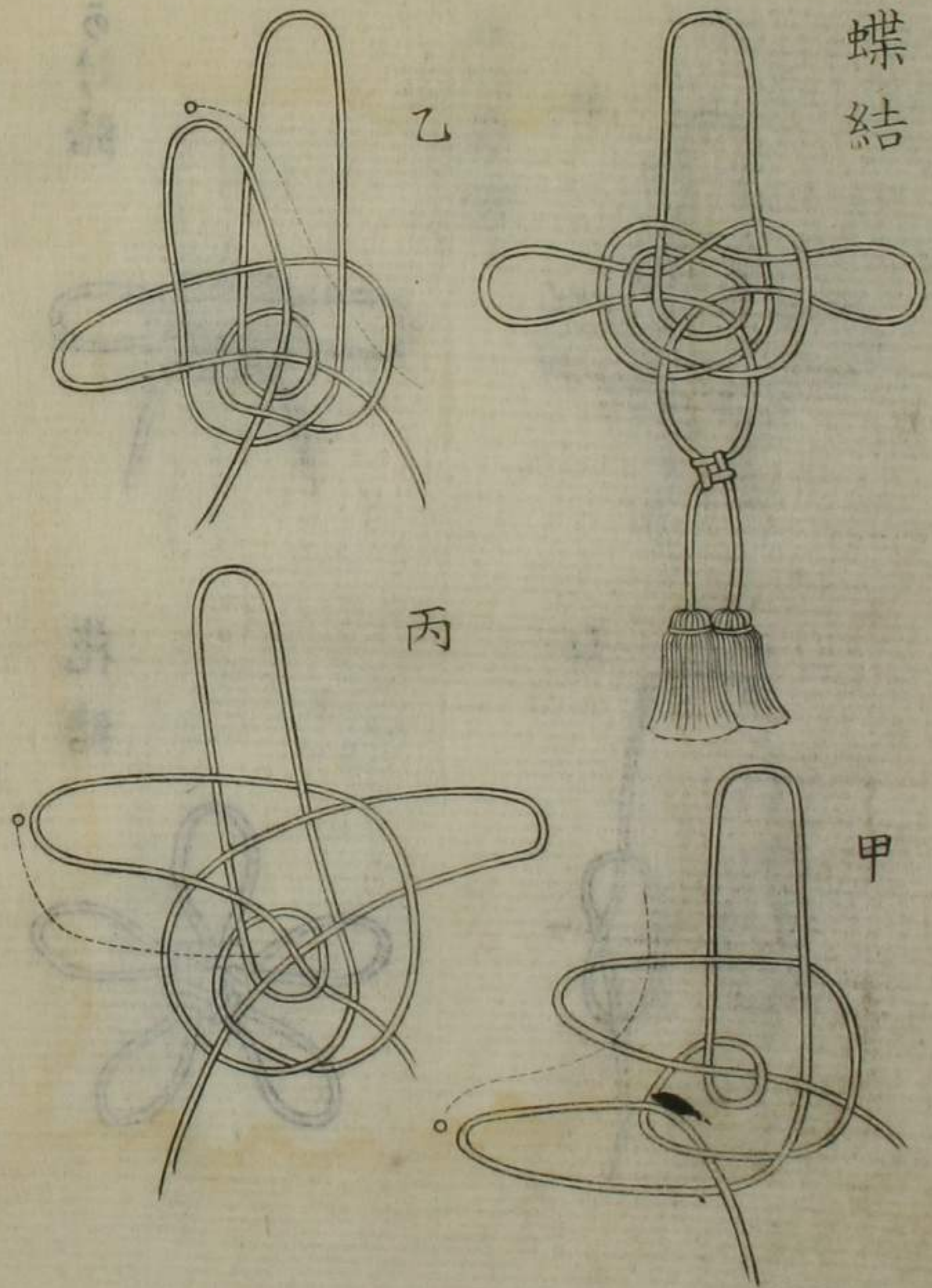
此の如く左の緒を右の口へ

へ下より上へ

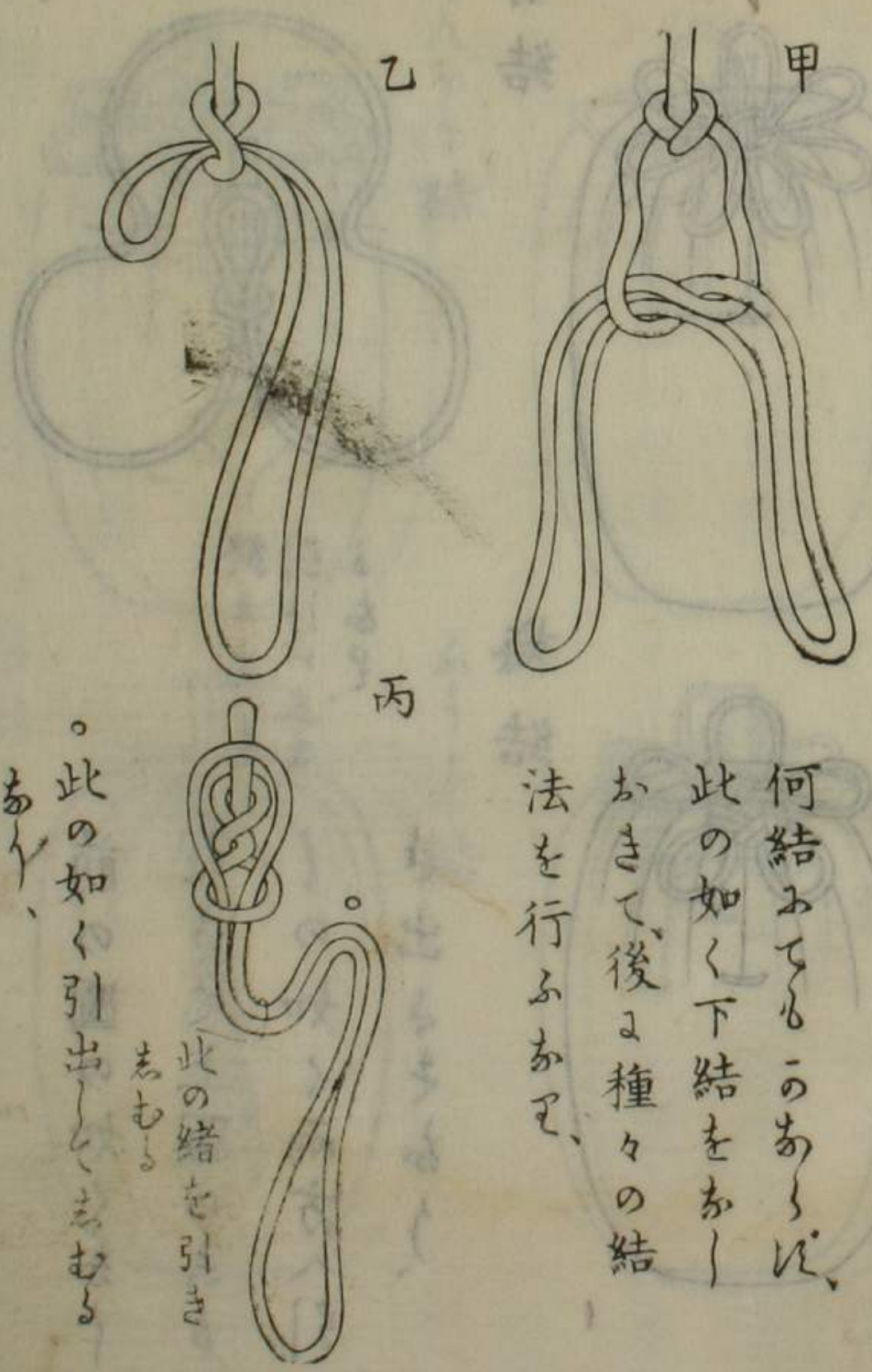
引通して志

むるなり

蝶結



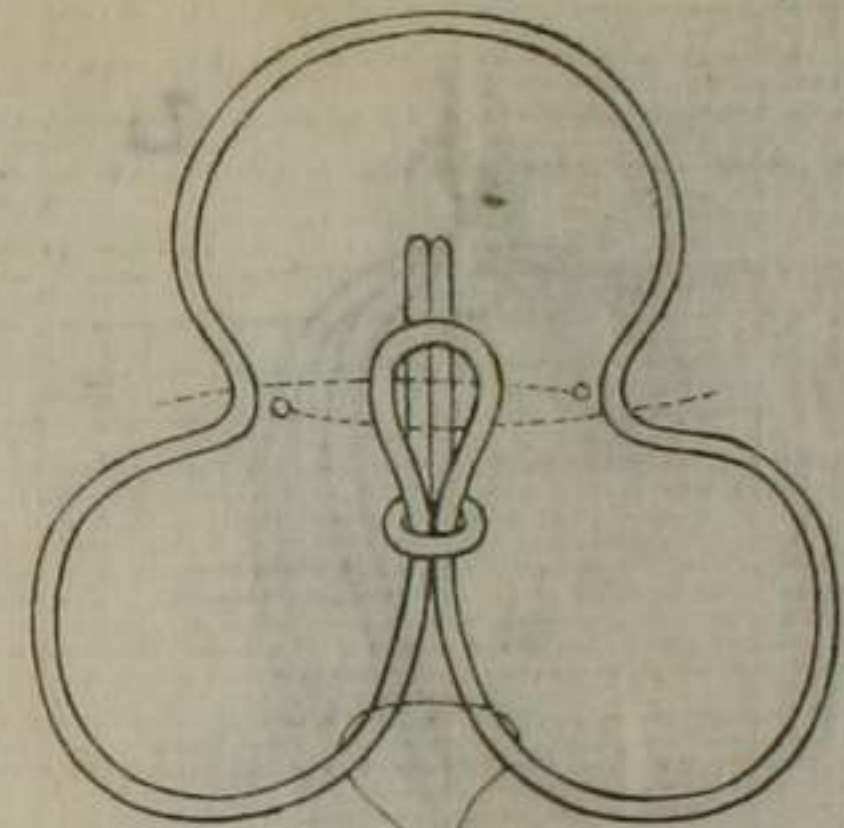
諸袋類の結法



何結ぶてもあるが、  
此の如く下結をか  
かきて、後々種々の結  
法を行ふか、

此の緒を引き  
まわす。  
此の如く引出し、まわす  
あり、

丁

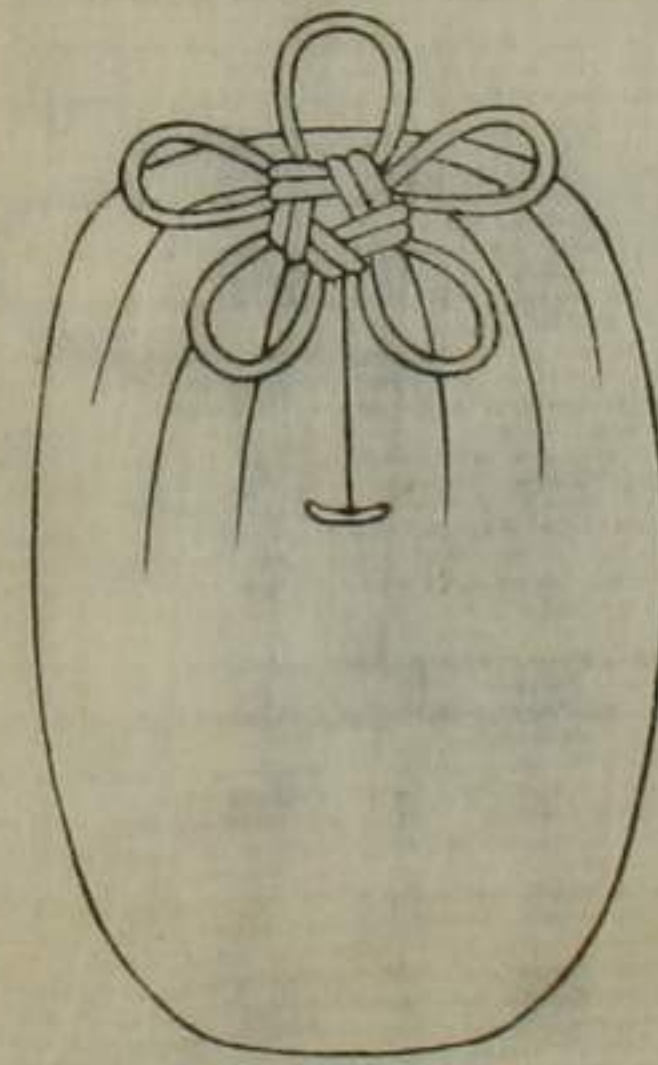
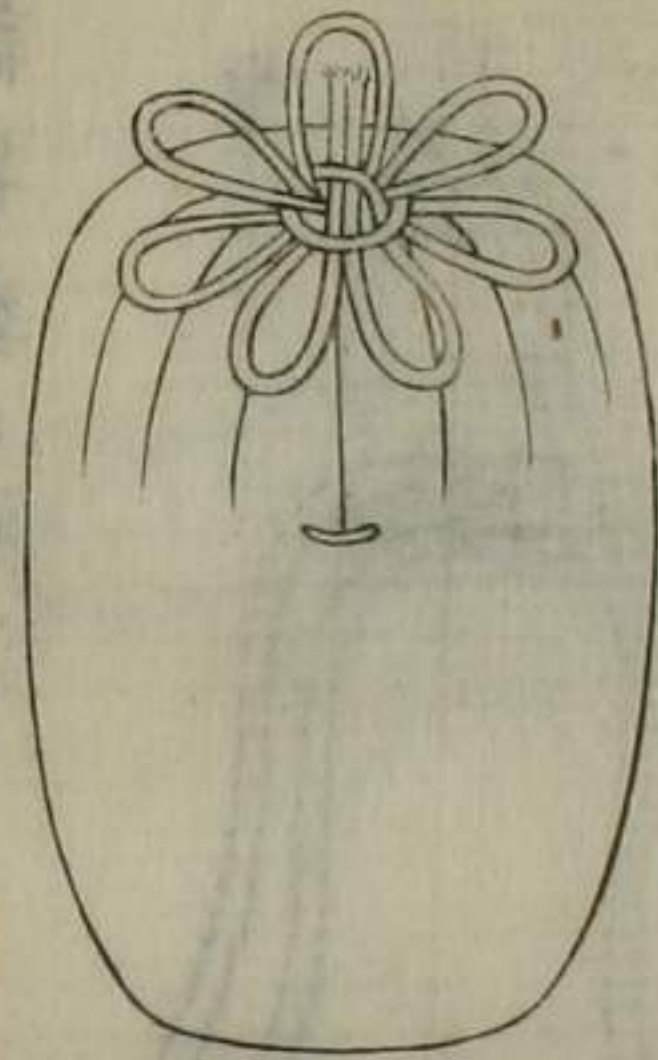


菊結

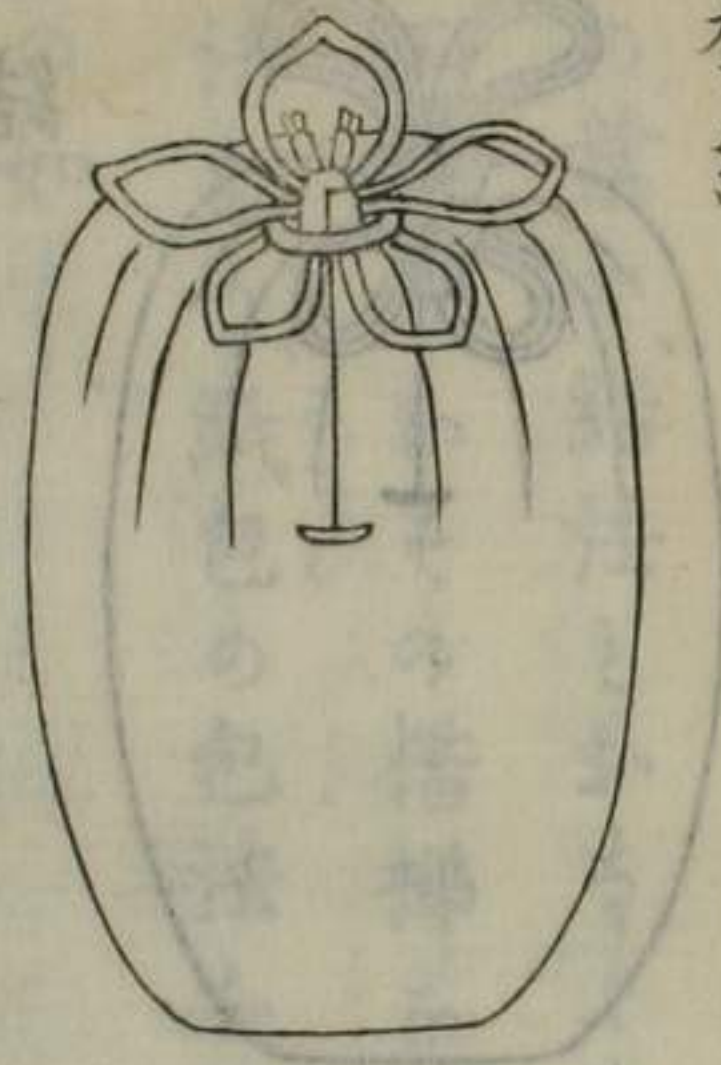
終はあを  
引けあま  
るあま

前の圖の如くあ  
たまて上圖のあ  
の如く兩方へ引  
き出さるあ

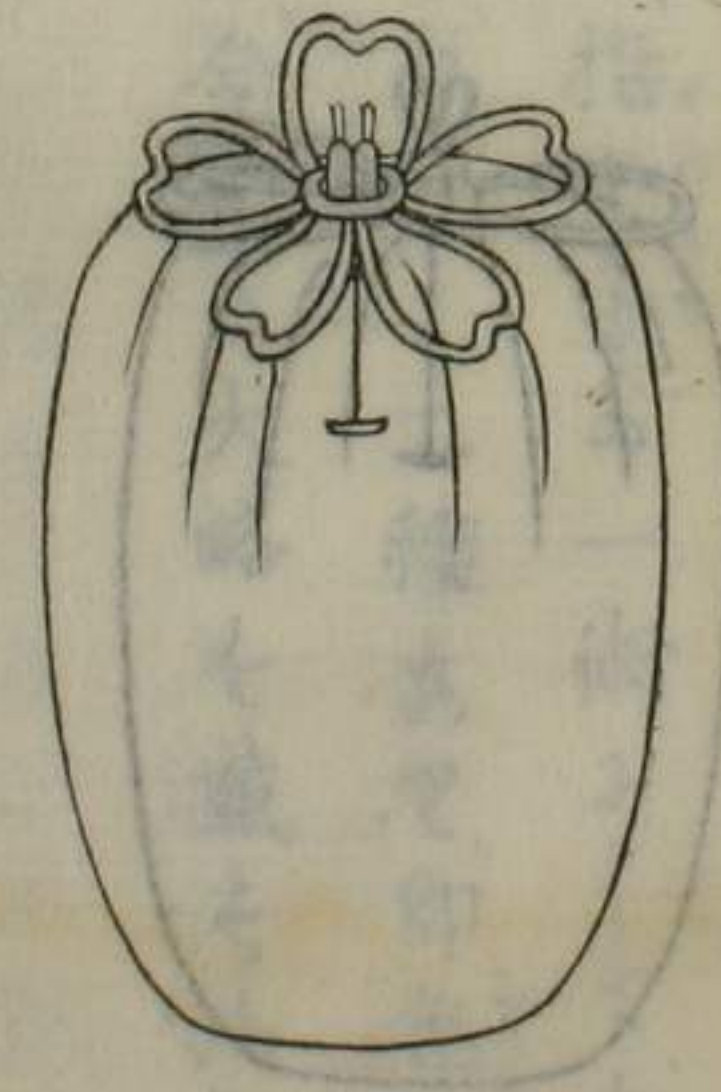
梅結



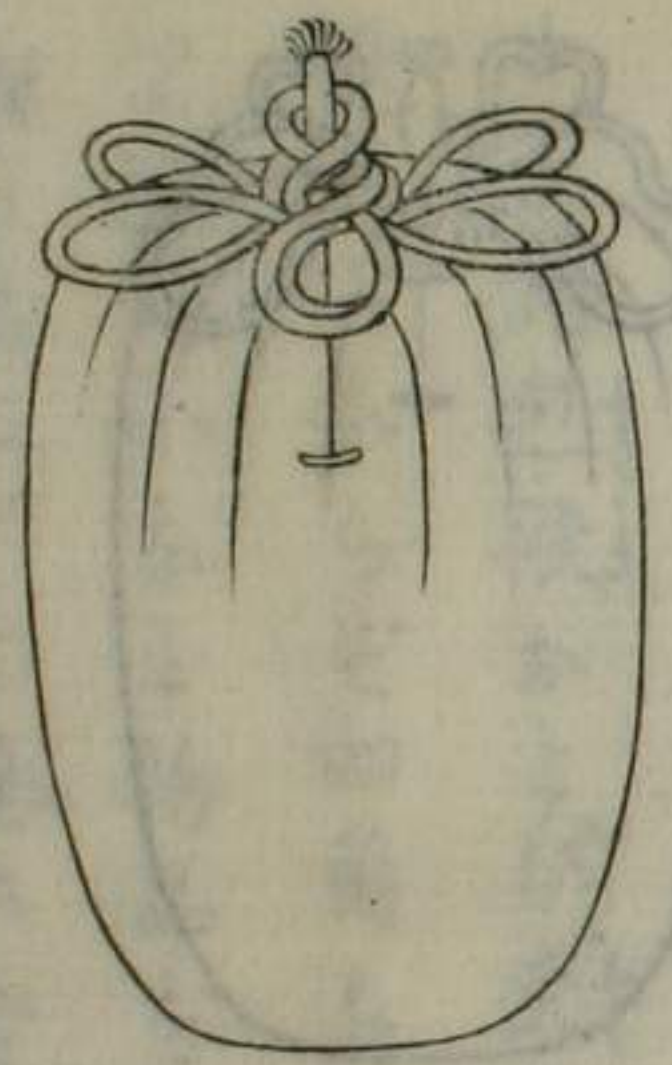
桔梗結



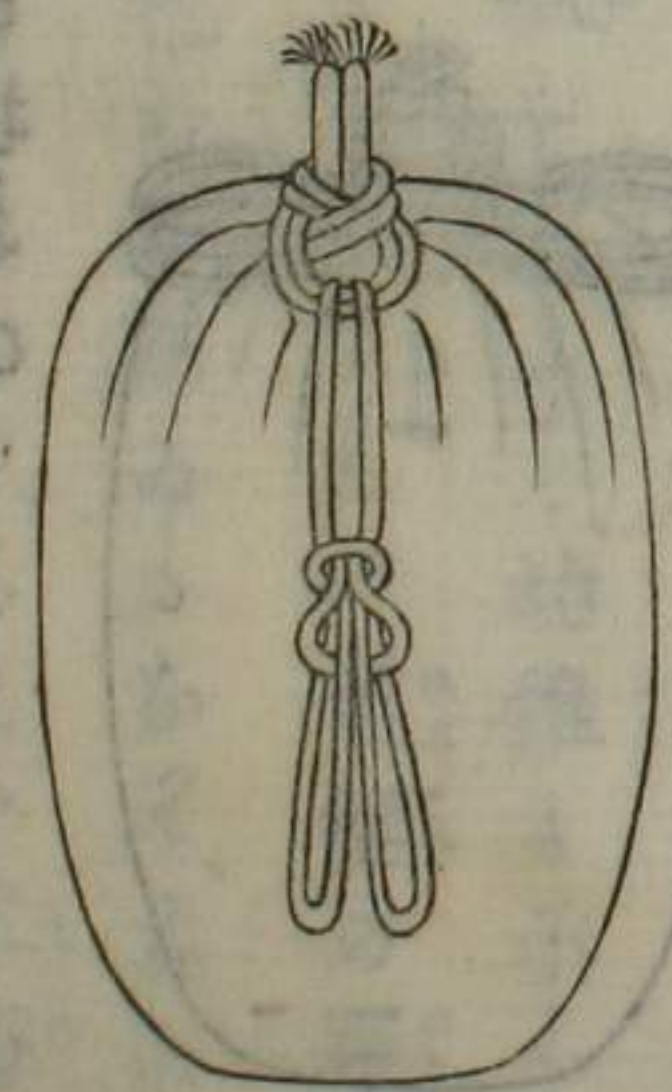
きんぎょ結



やんざり結



あまの結

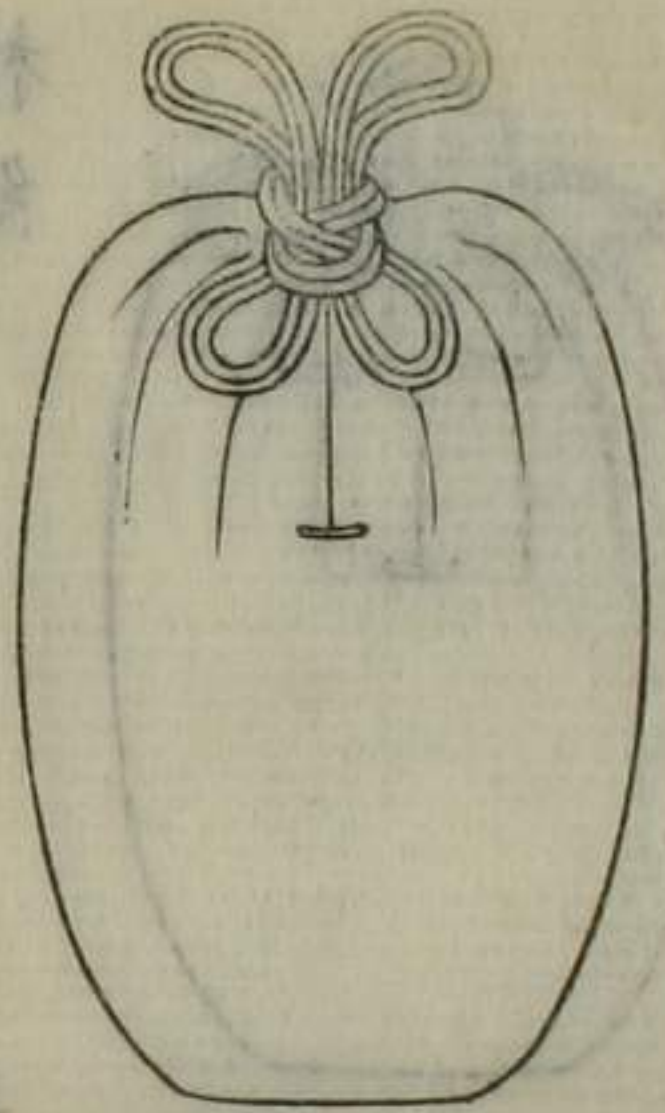


蝶結

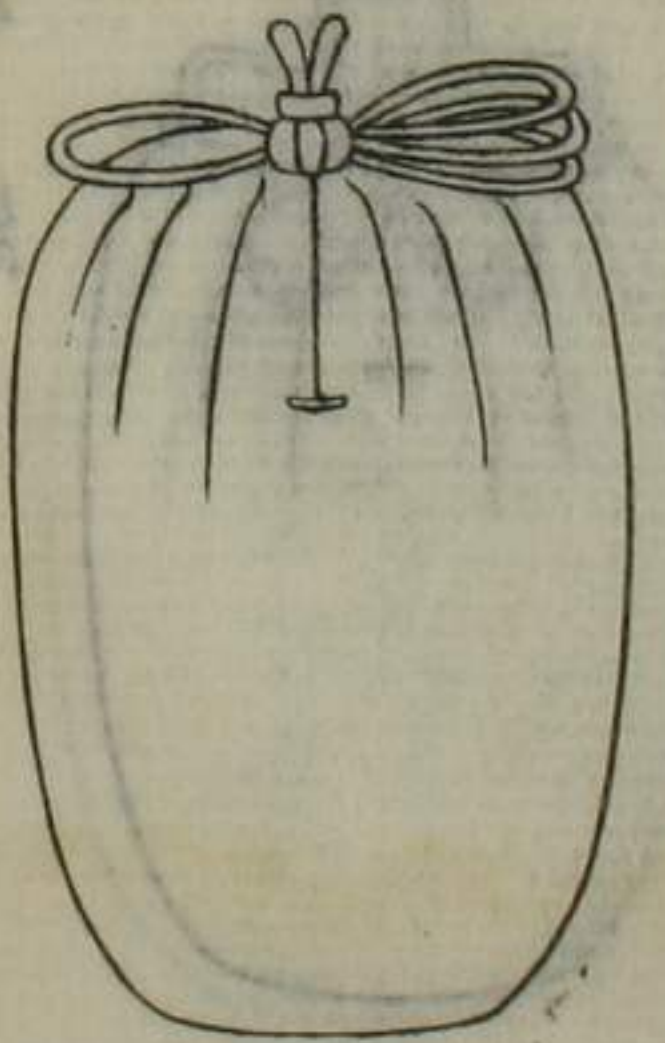


こむまび

翁結



林野結



こむまび

包法

此の業の結法とあるは、指掌中の一術ふして、ちこ  
諸工業をおもひの楷梯あり、包法は二種あり、即包袱の  
包法あり、紙包の包法あり、今其の大略を載せんと  
左の如し、

包袱包

保母先ッ諸包袱おとび、夾袱を出し、幼稚は示して曰  
く、包袱のあらむ四角あるべし、おとびの布幅の單の包  
袱あり、諸の小なる物品を包むは用あるあり、おれハ二  
布あり、布幅二ツを縫ひ合せしむるの、おとびハ三布四布

五布あり、漸次大あるは従ひ、諸物品の大あるものを包むに用ゐるあり、又あれは洋布の包袱あり、大小隨意に洋布を断ちきりて用ゐ、その布幅とおおしく二幅三幅を縫ひ合せて用ゐるあり、その他縮緬麻布等をりて製するも適宜あり、又此は夾袱あり、包袱を重ねて縫ひるをいふ、大抵縮布、縮緬等をりて製するあり、もや諸物を拭ひおとす諸物を覆ふりのあたとり、又諸物を包むに用ゐるあり、茶人用ゐる所の夾袱は、寸法あり、今畧す、あれ亦大小適宜あり、包袱の解説、大略此の如し、

保母より更は諸の大小の物品、或は長きもの、或は短き

物、或は平あるもの、或はかさきたる物等を出さず、示して曰く、此の長きもの、此の包袱ありて、如何にして包むや、おの平あるもの、如何にして包むが宜しきや、先づ此の箱を包みて示さべしと、りひ、適宜の包袱をひろす、左の第一圖の如く箱を包みて示さべし、次ぎは第二圖



第一圖

第二圖

本?

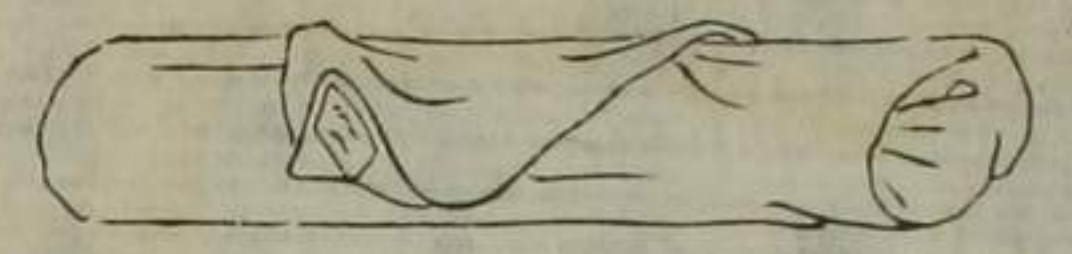
の如く書籍を包みて示し、次ぎは第三圖の如く徳利を包みて示し、漸次は諸物を包みて示し、後より小袱あり

第三圖

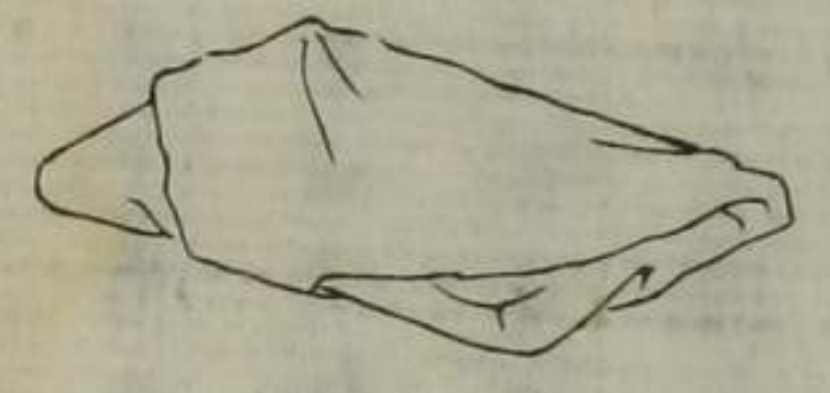


大ある物品を包こ、大袂おほひとして小ある物品を包こ、あどして示さべし。

第四圖



第五圖



第六圖



第七圖

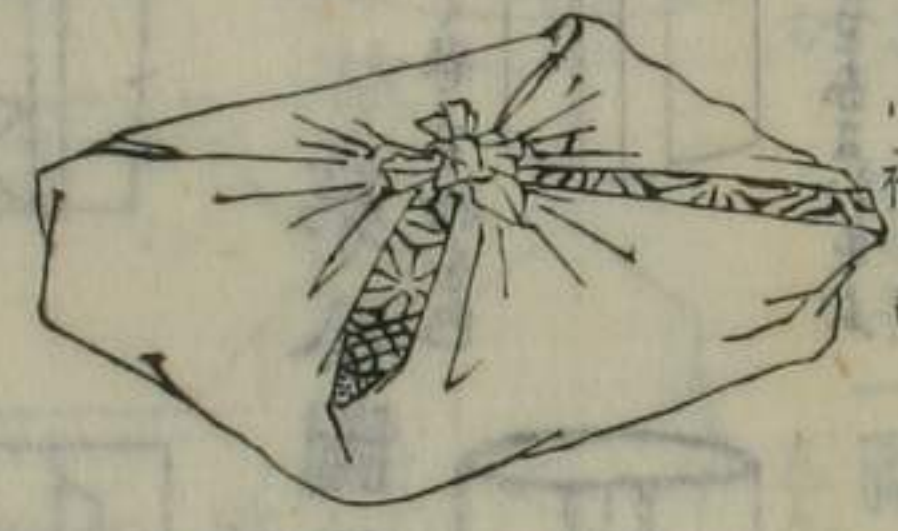


藥籠すりかご

第八圖



第九圖



紙包

うしろゆひ大袂おほひと包む 小袂こほひと包む

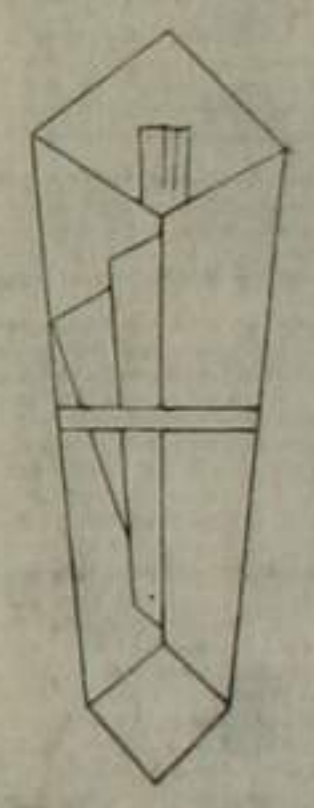
かく諸物品を包こて後、幼稚をして各自おのづかに包まむべし、その他包袱ふくの包法、猶多し、保母實地ほむじつちに就き、適宜おほに包法を教ふべし。

保母紙類の中うちに就き、最厚おほまりの即西の内奉書うちまがきの類を出だせ、左圖の如く諸物品を包こて示さべし、右の如く後、幼稚をして各自おのづかに包まむるを要し、實地じつちに包む時、大抵奉書糊入等うちまがきを用ふるを要す。



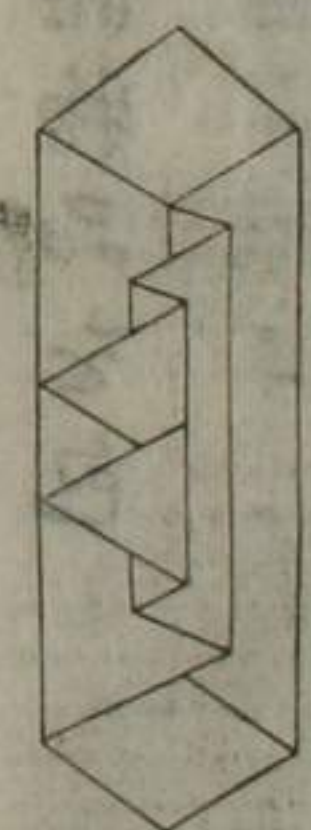
第一圖

のしづみ



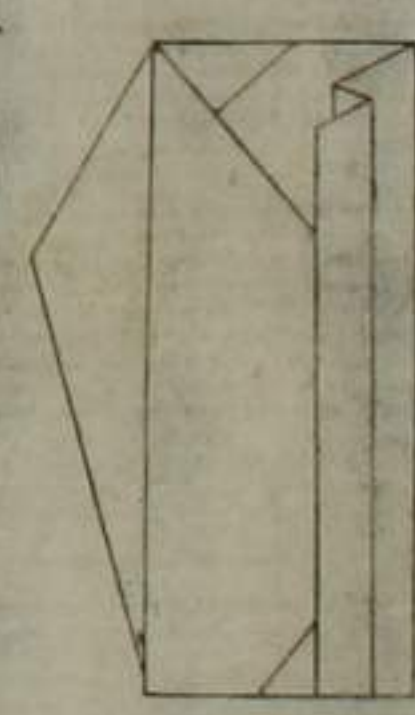
第二圖

れしづみ



第三圖

筆さみの包



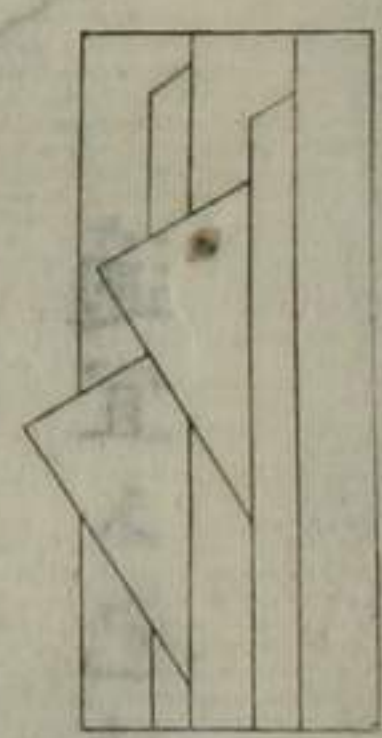
第四圖

扇のつみ



第五圖

このけう包



第六圖

手拭包



第七圖

金らんとんどの類をて丸く巻る物を包



水引のしづみ

第八圖

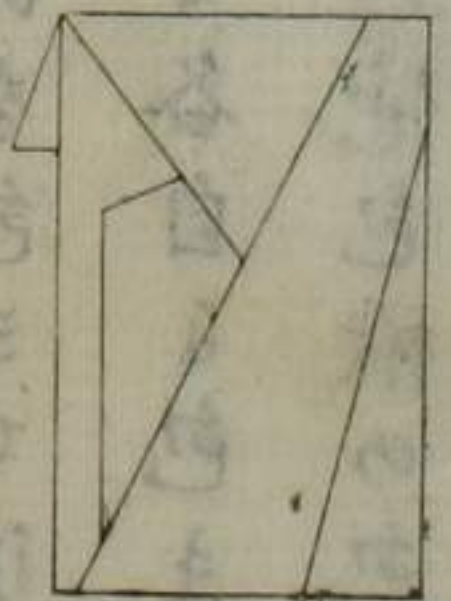
板の物を包



水引のしづみ

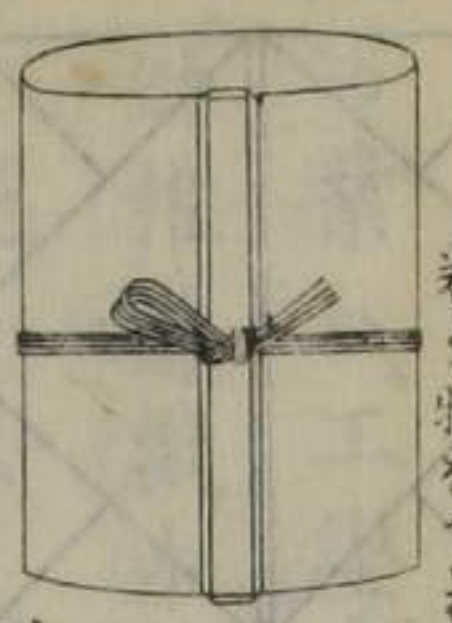
第九圖

あかひ  
おくら



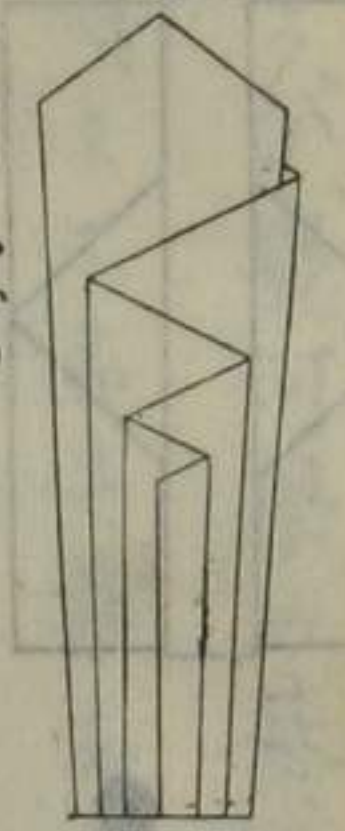
第十圖

紗綾ちりめん類  
の中は綿を入れて  
巻る物をつむ



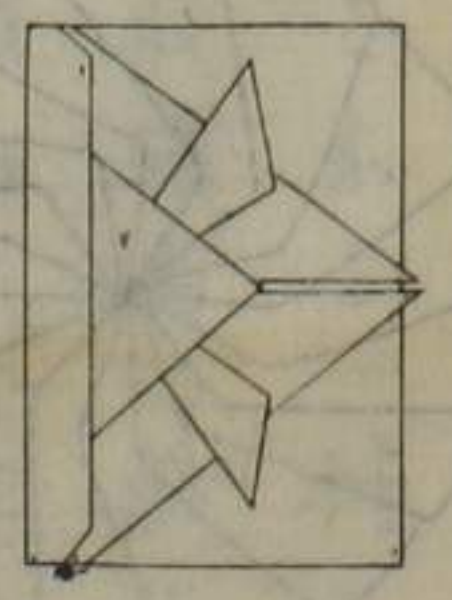
第十一圖

あんのしづみ



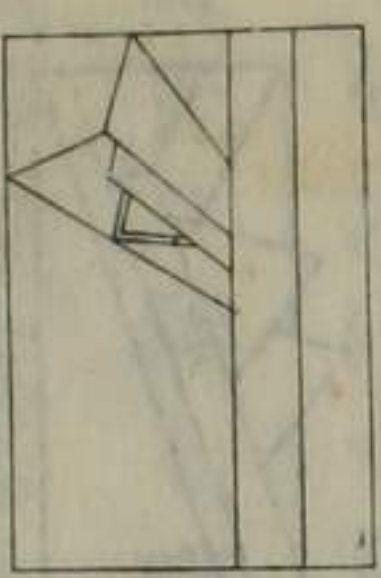
第十二圖

端午の  
あかひ



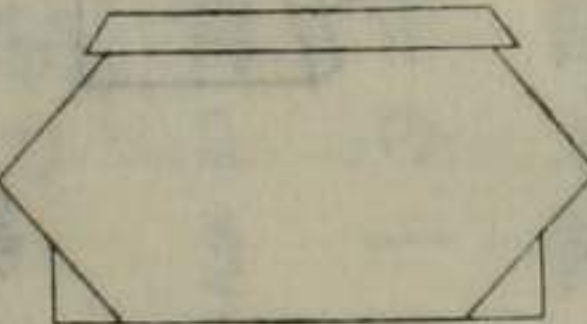
第十三圖

あかひ  
包



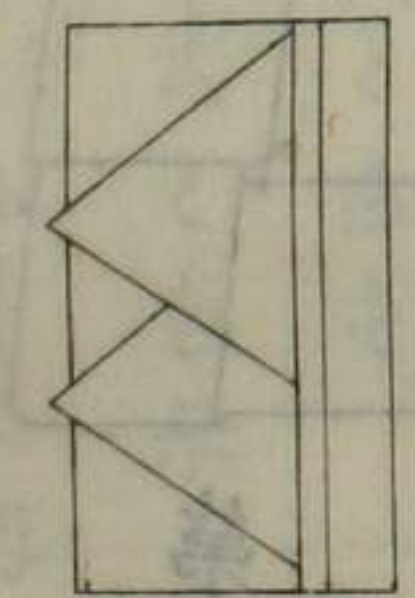
第十四圖

あかひ  
中包



第十五圖

あかひ  
包



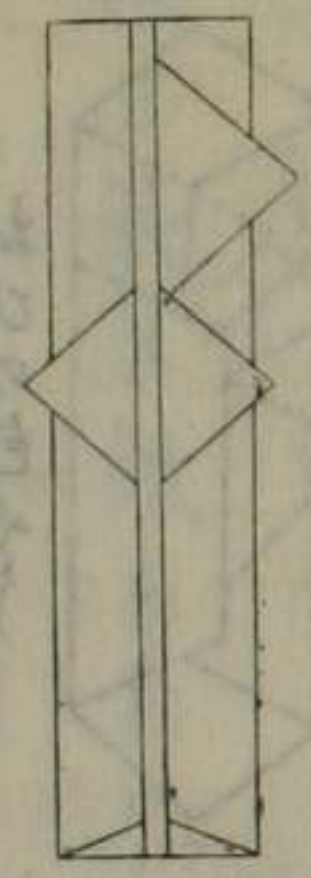
第十六圖

あかひ  
まん包



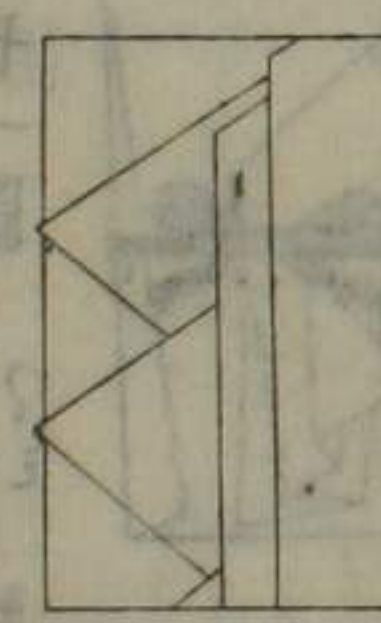
第十七圖

あかひ  
物つみ



第十八圖

あかひ  
包



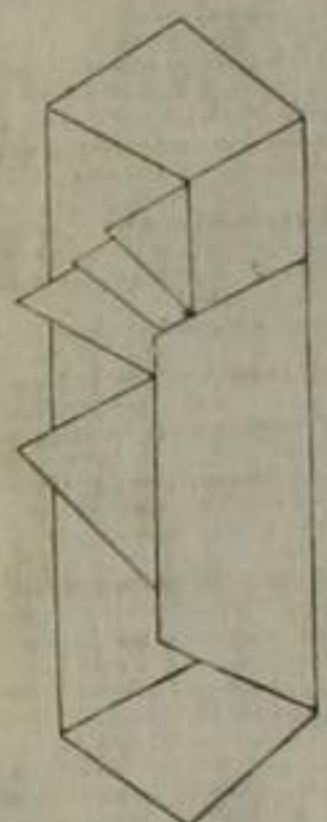
第十九圖

あかひ  
包



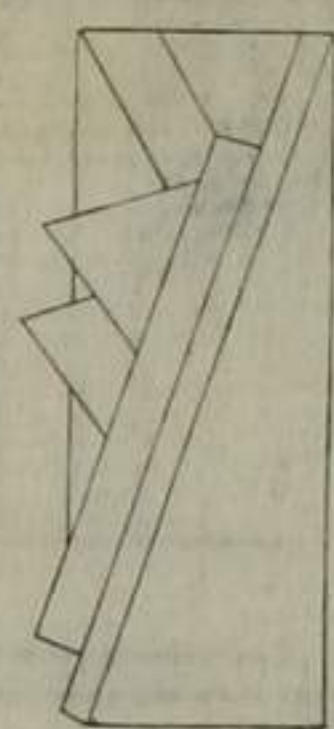
第二十圖

あびの包やう



第廿四圖

きやう包



第廿一圖

まじり

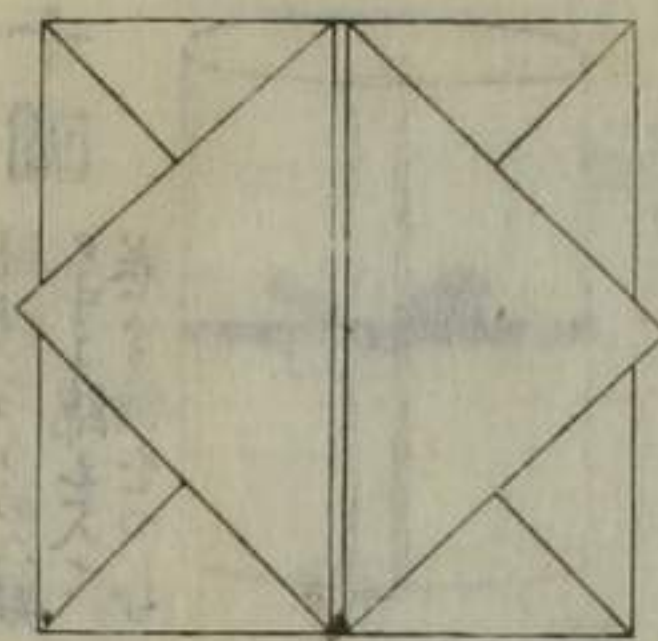


第廿五圖

香つみ

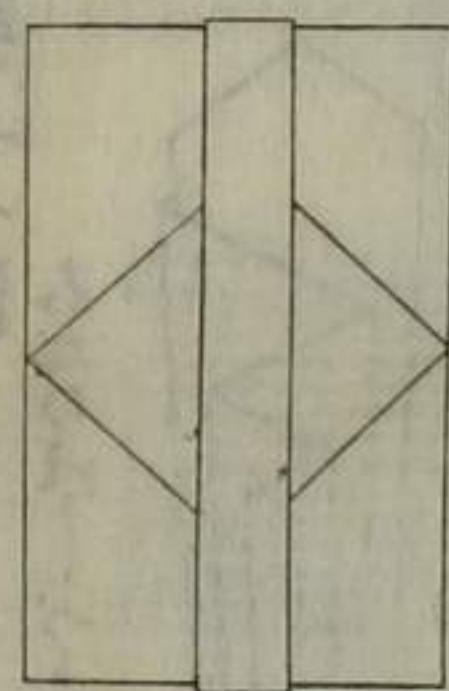
第廿六圖

同

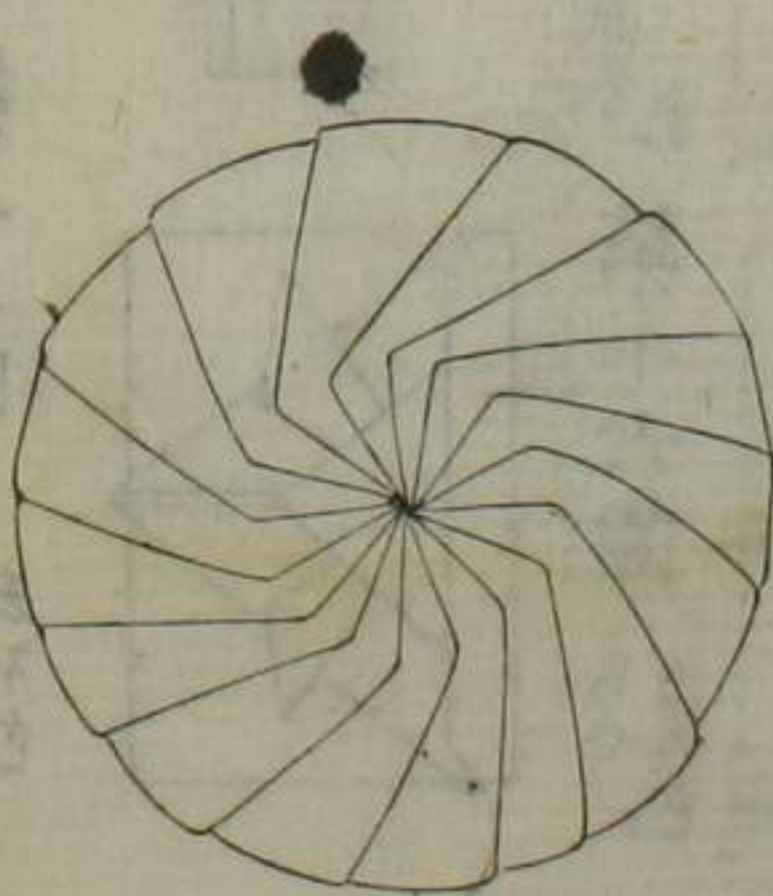


第廿七圖

同

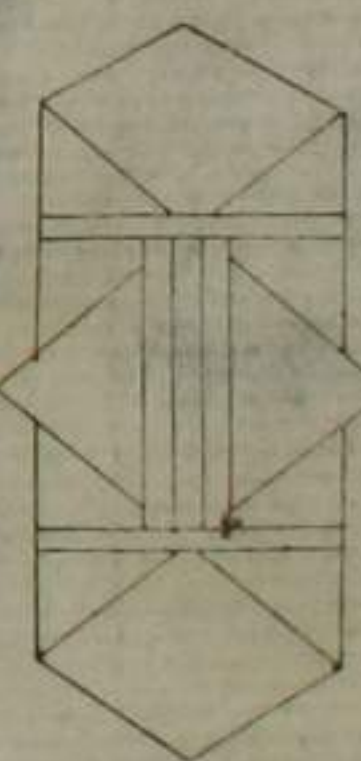


第廿八圖



第廿三圖

色紙つみ



切抜

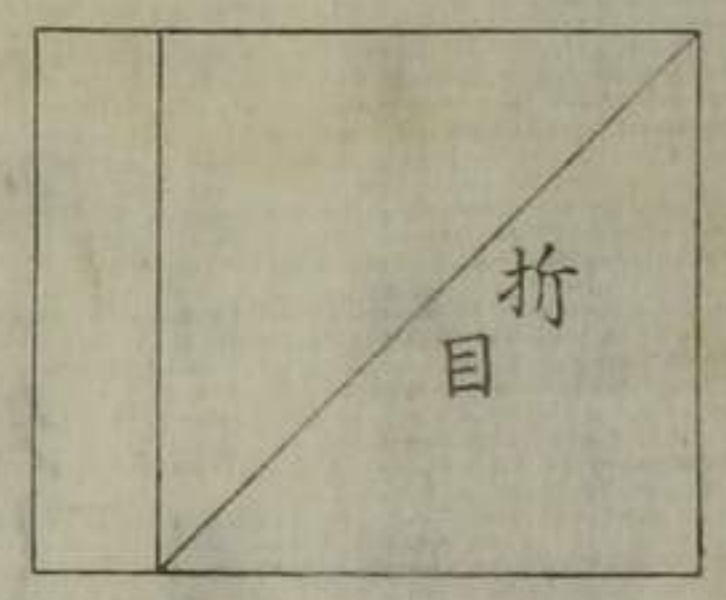
此の業ハ、工學および幾何學の基礎とある一科ニシテ、幼稚遊戯中最嗜ミてある業あり、我國古の戯あると既久シ、歐米諸國も亦古の戯あり、今其の大略をあけて園中の一具とあせ、

保母先ツ紙を四角ニまきるとを示せば、紙ハ半紙、美濃紙等適宜あり、鋏刀ハ、小形にして刃止あるものよろし、さて紙を四角ニまきるとハ、横ニ長き紙あるハ、先ツ下に載せる第一圖の折目

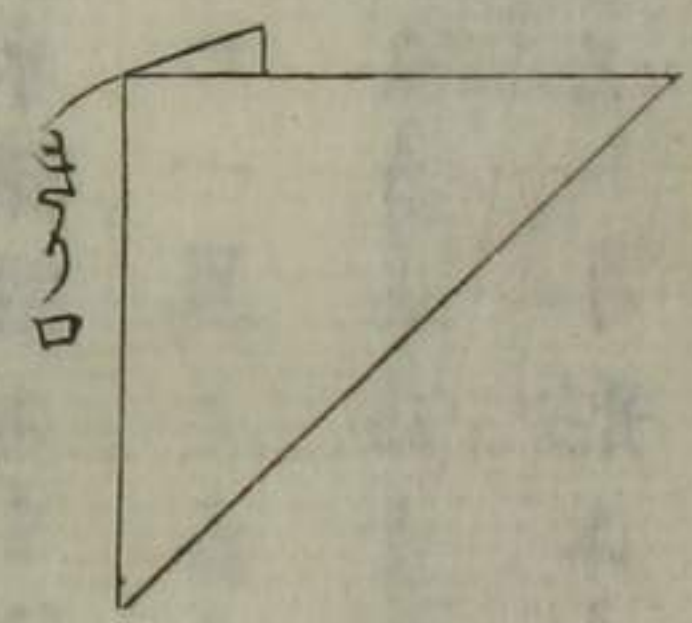


の如くをまて第二圖の如く、まて第三圖の如く  
またまて、細長き紙、および三角の紙をまて、四角  
また法、第四卷算術の條に載まべし、

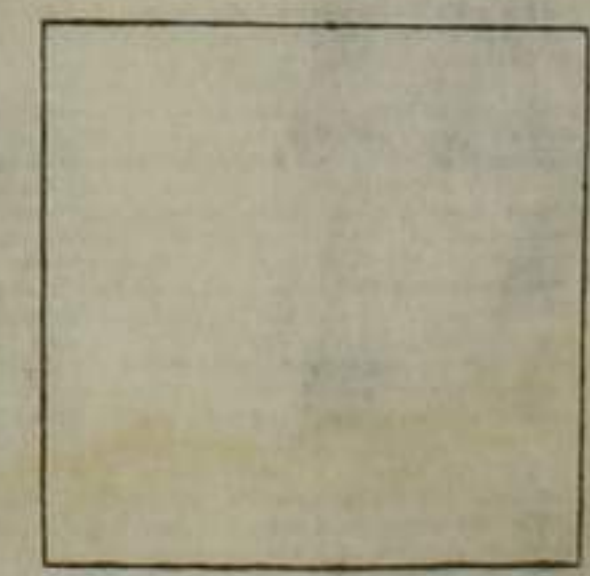
第一圖



第二圖



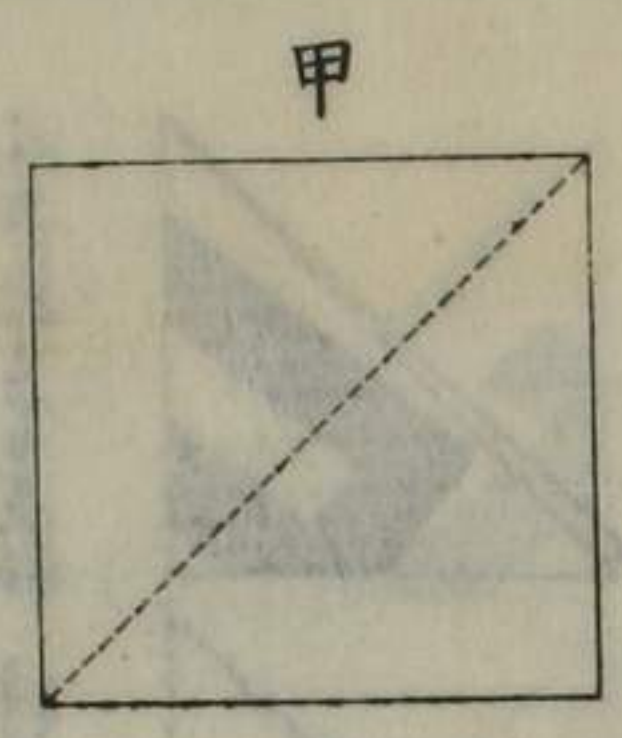
第三圖



志るして切抜きたる諸の花形ねよび紋所等を示し、お  
の紋所を切抜き抜くみ、二ツ折或ハ三ツ折あり又おの  
花形の五ツ四ツ折あり、折まて切抜きたる、かくあるあり

今其の折方を載せ、又切形の大略を載せ、おと左の如く、

一ツ折

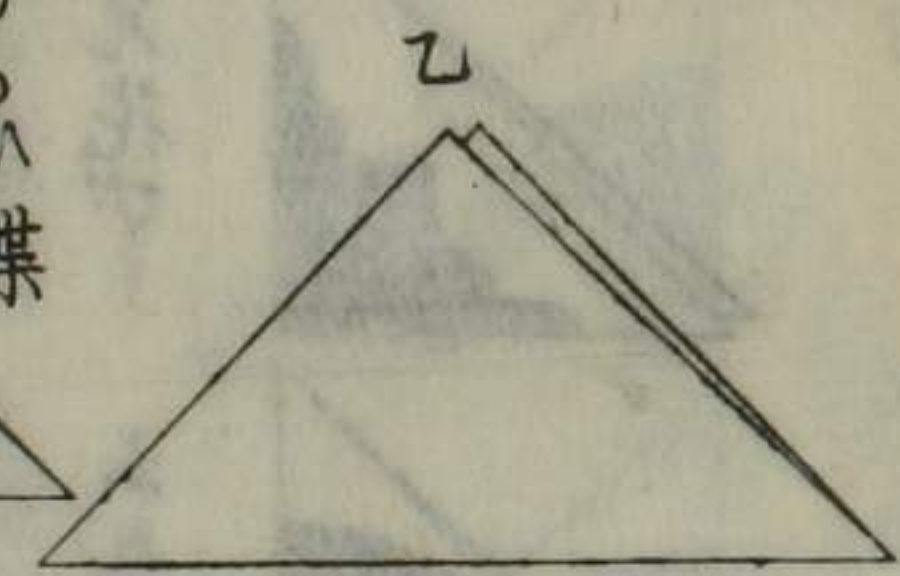


甲

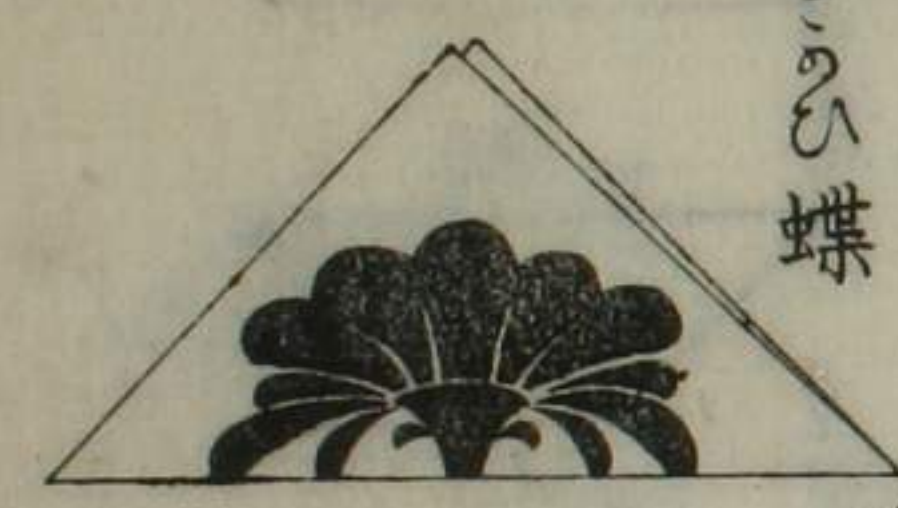
さくせんごう



むらひ蝶

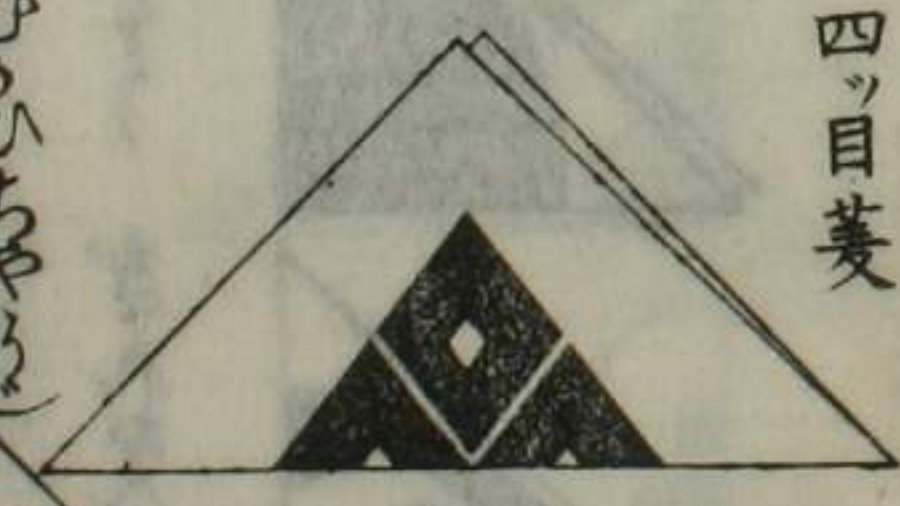


乙



四ツ目菱

むらちやば

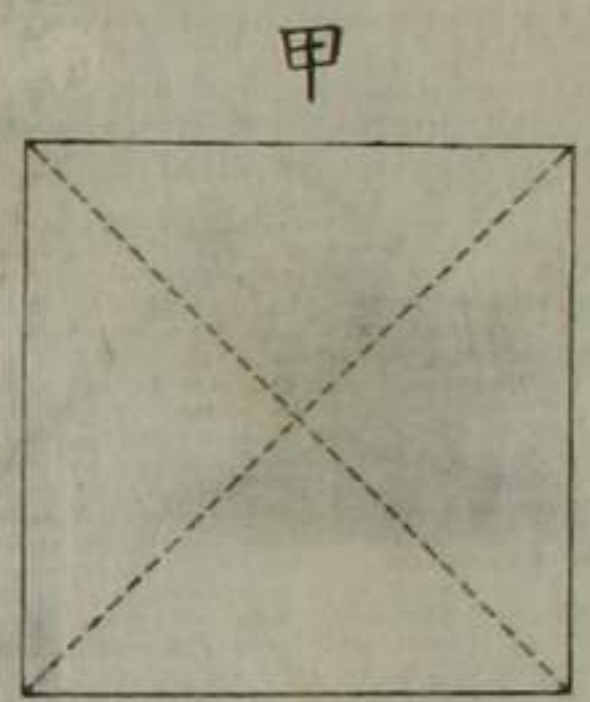


おあつた

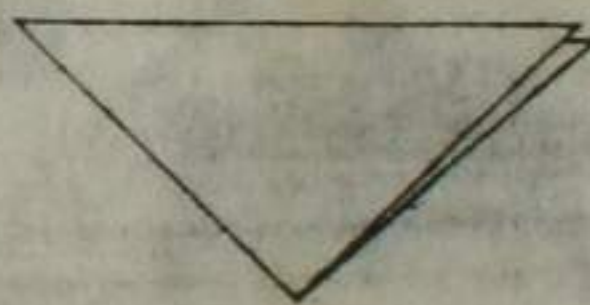
かまのぬ



ニツ折



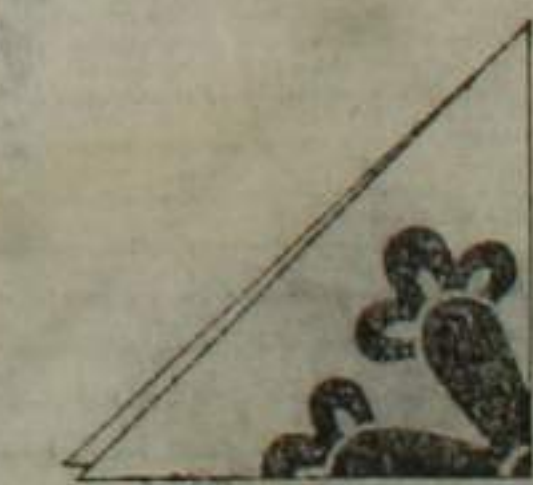
乙



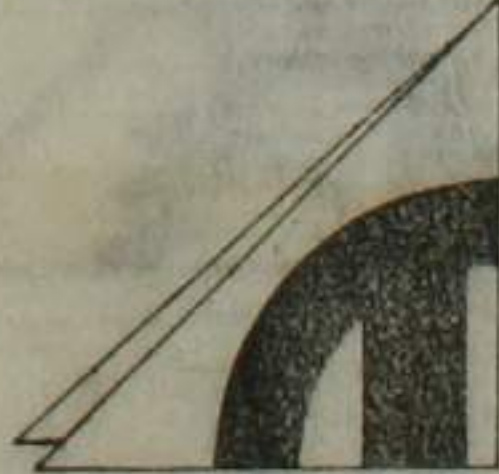
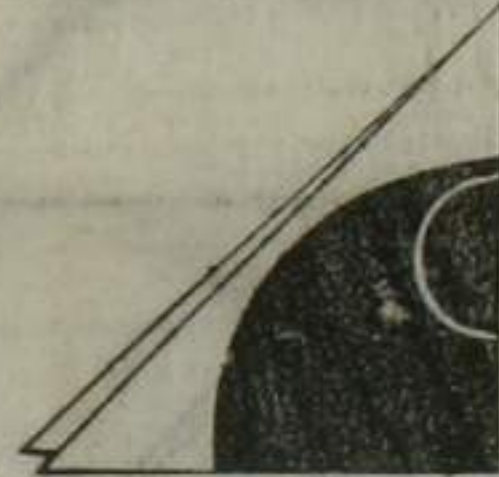
かゝるま



ちやうじ車

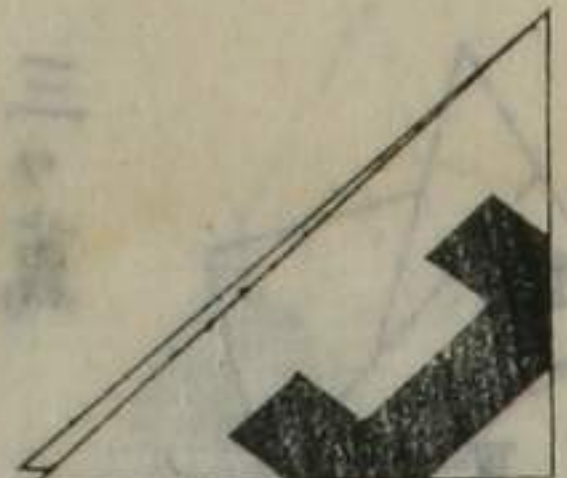


くぎぬまゝの福 けん花びら ふんどし ぎんあんまきり 丸ニツ引



ひらゐづ 二ツ巴

丸松のこびり 花びら かゝるま

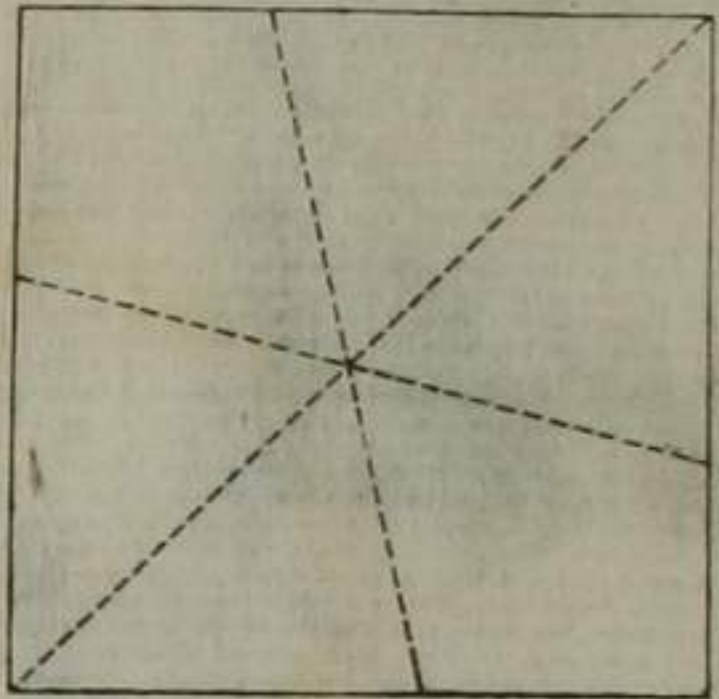


丸のひらゐづ 東の字

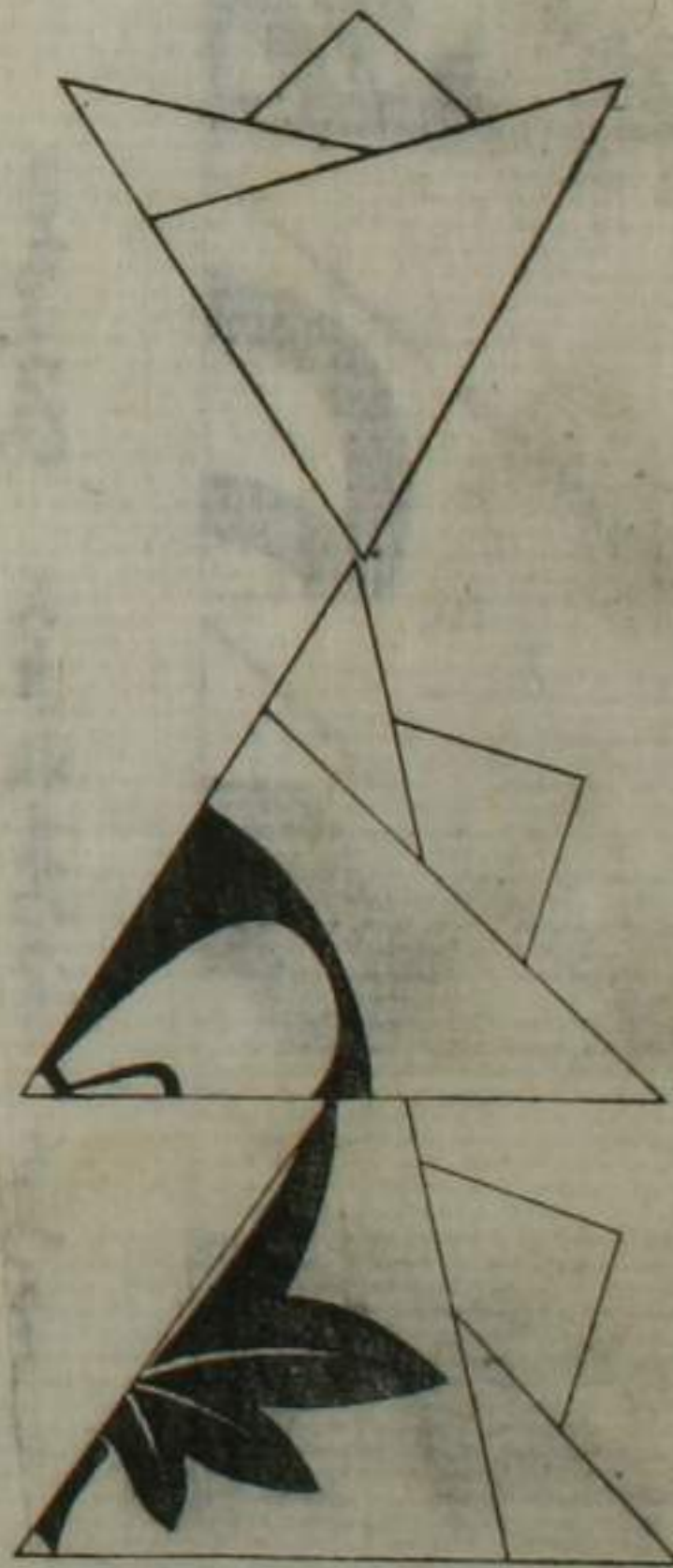
ひらゐづのこびり 丸のぬまゝの福 丸のこびり



三ツ折 甲

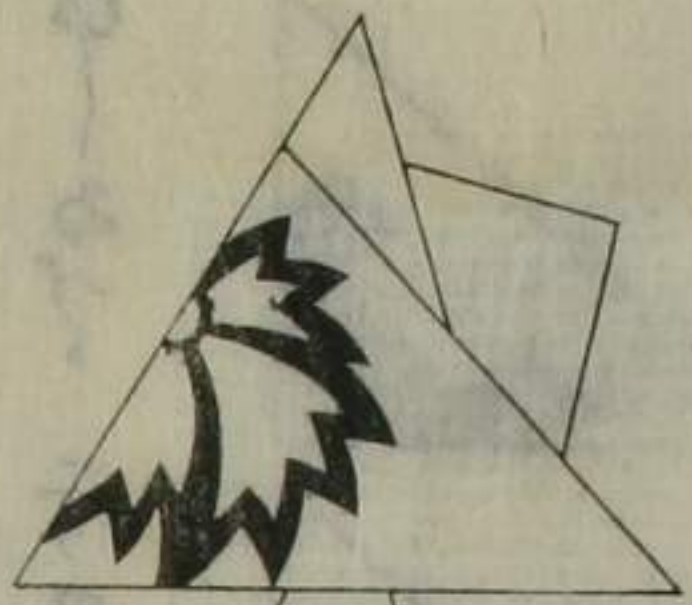


乙



三ツ折のかわらぬと 三ツせみぢ

三ツ葛



三ツうめぢぢ



三ツかぶら



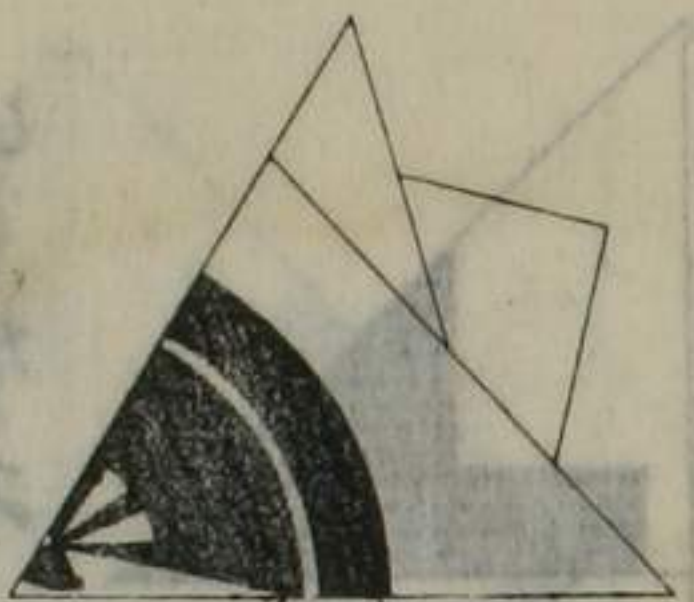
三ツぶら花びら



三ツはなぢぢ



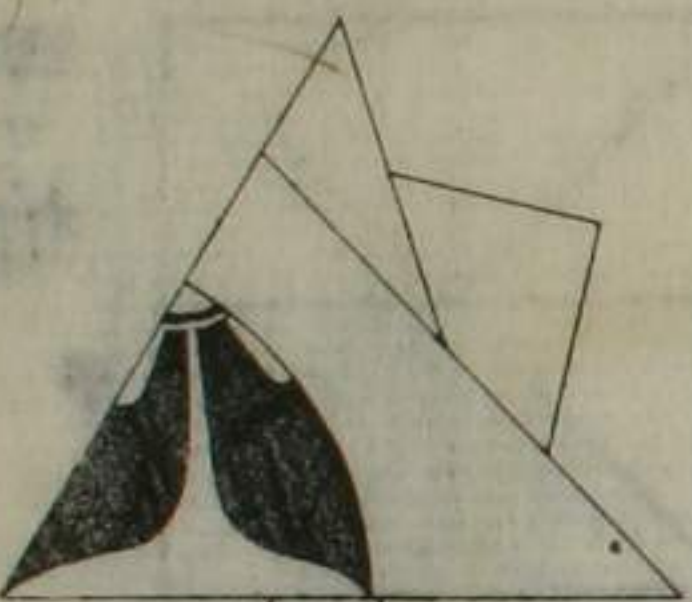
三ツあふぎ



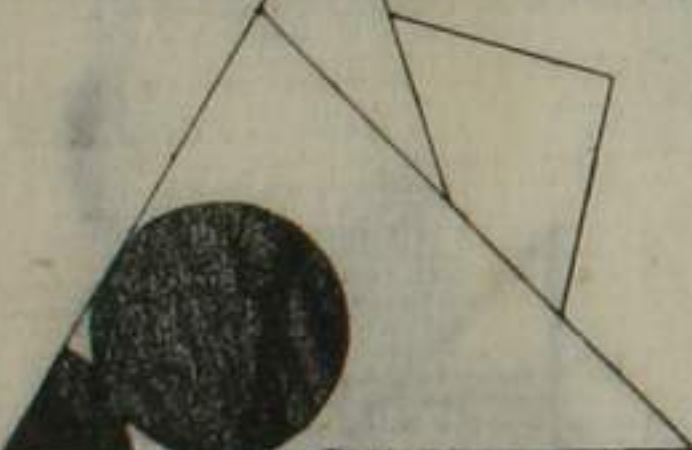
三ツのたむと まろろうと花びら 三ツかぶら 三ツ拍



三ツあふぎやう



三ツえう



三ツもろ



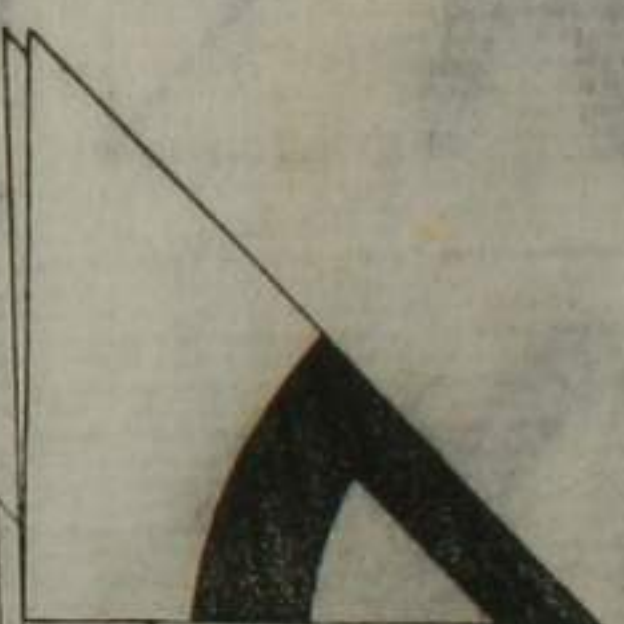
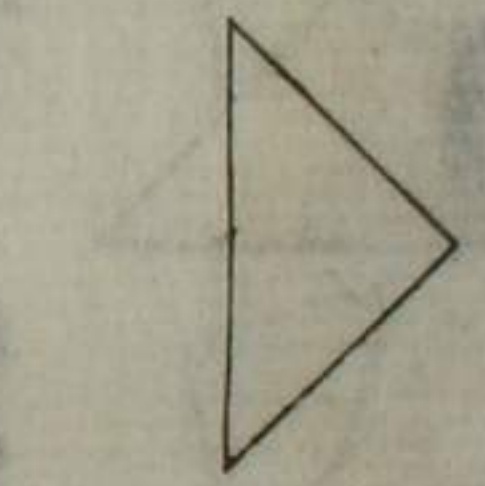
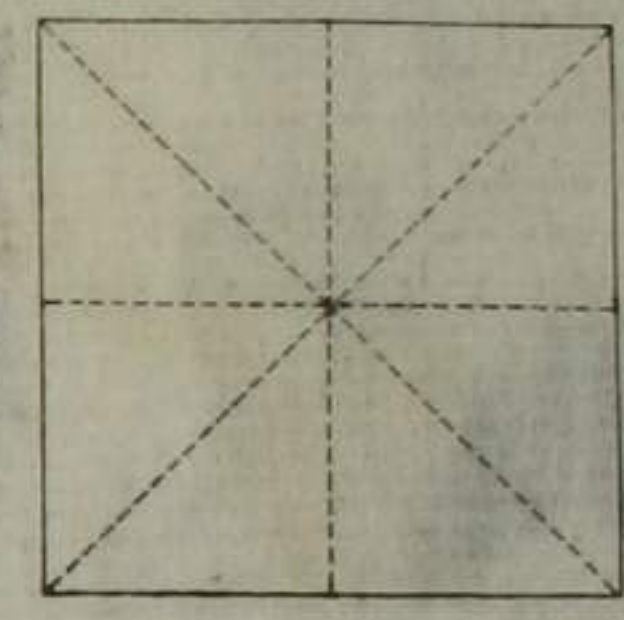
三ツろあ



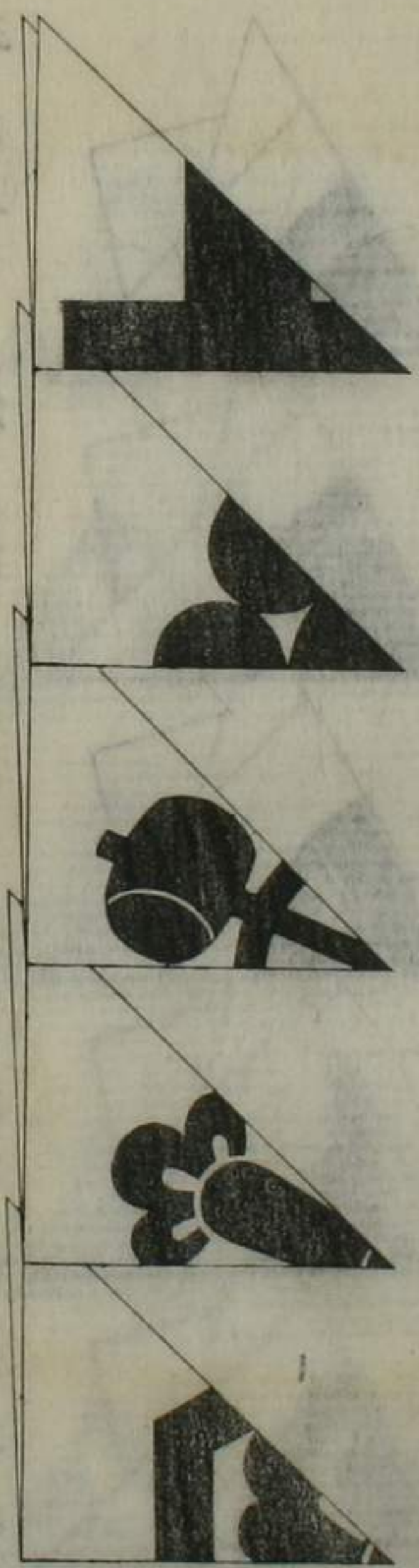
三ツ花さ



四ッ折 甲 乙 丙 丁 矢分るま



いくだみ 九よう 水ぐるま ちやん車 ますのうら ちあび



三ッ折

四ッ折 ちぢび 丸井げ 中の字ぐるま 四ッ花び もつこう

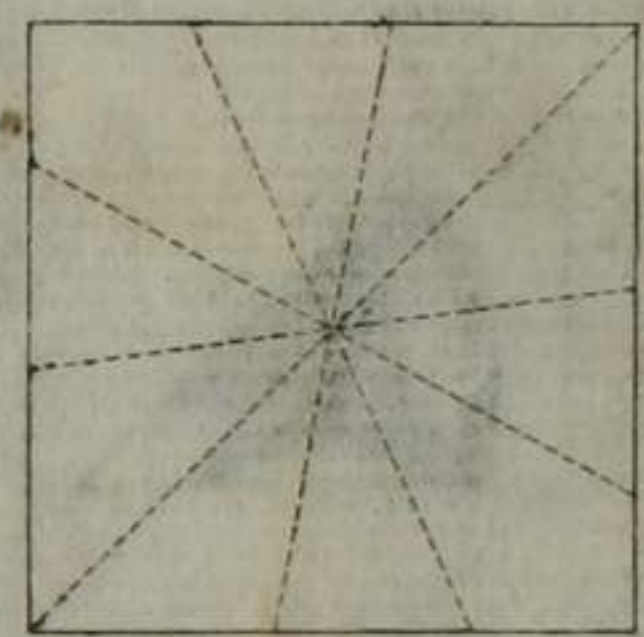


ちぢび花び ますやう ちぢの九よう げん車 三ませ

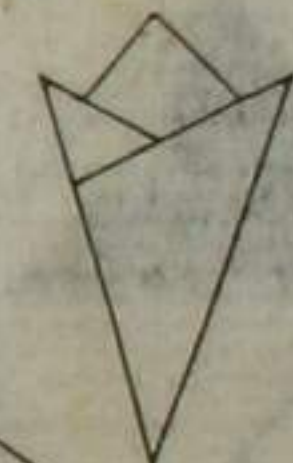


五ツ折

甲



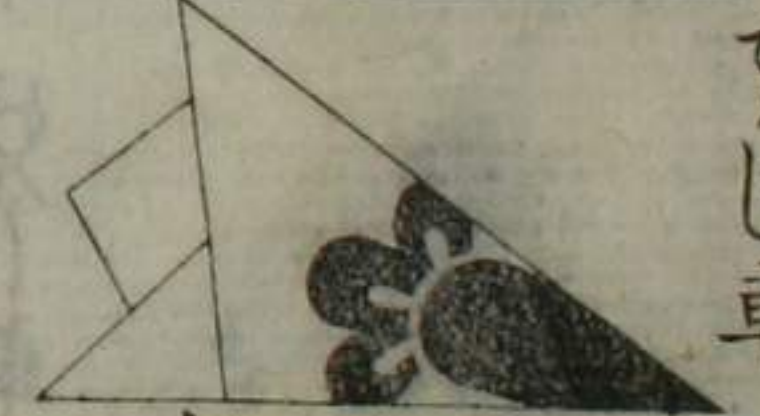
乙



うめの花



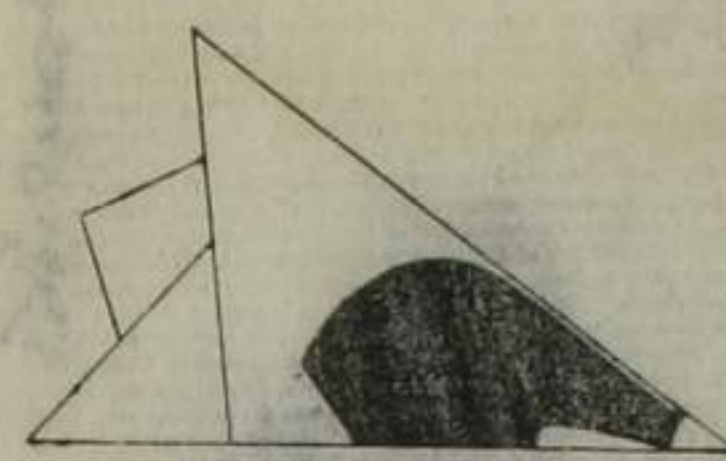
てうじ車



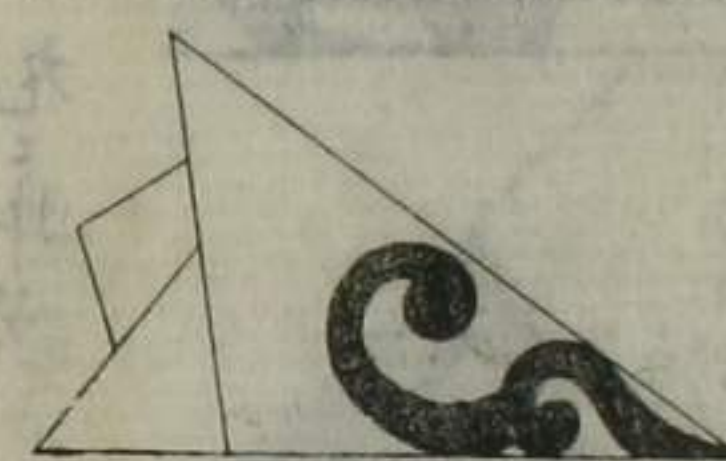
このげの  
けんうめをち



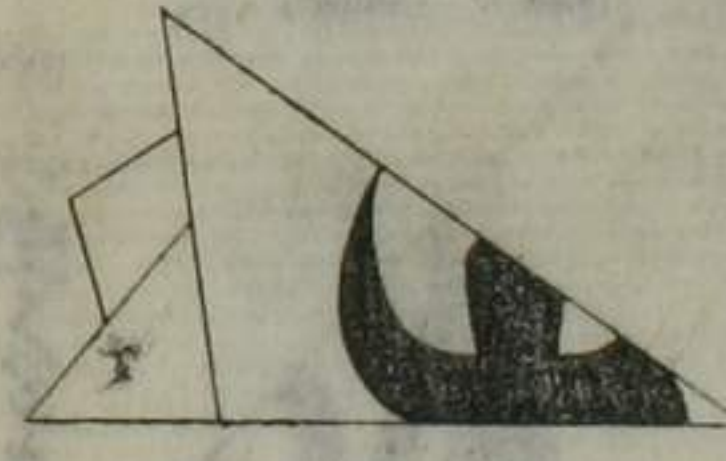
さらさら



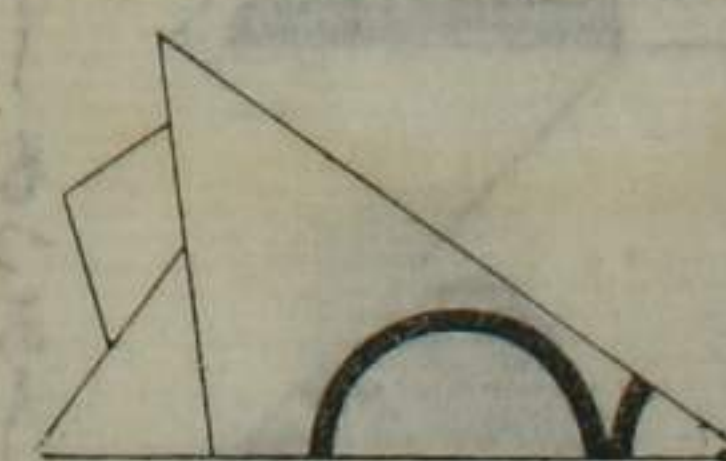
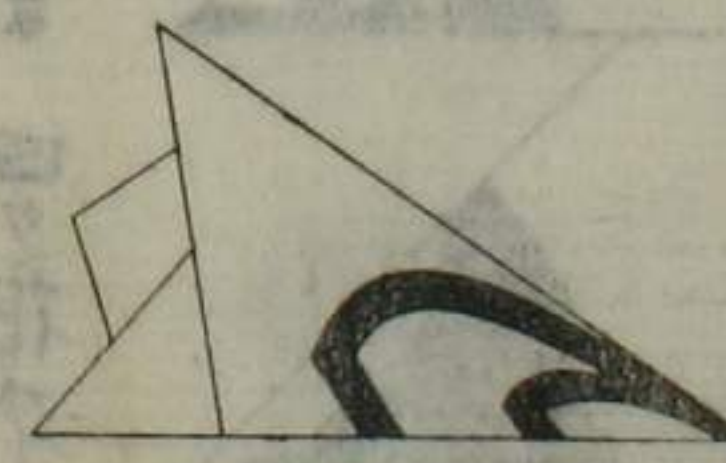
つる車



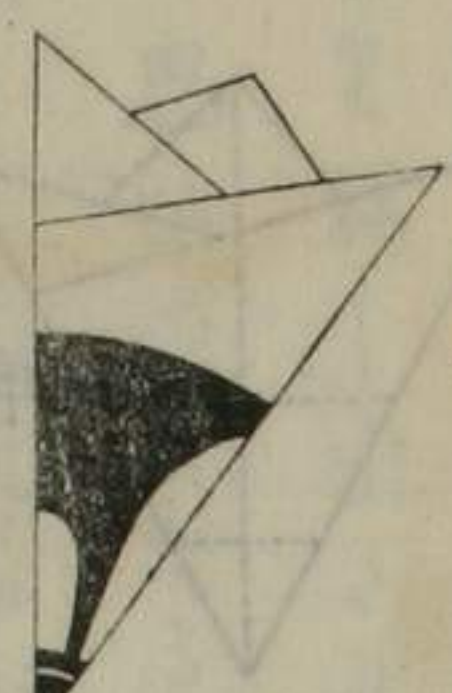
大の字くづり  
かげのさら



このげ  
梅をち



あしの切うち



くこの内こうをこの花



このをち



やあのをち



けんうめをち



このをち



このげのあご



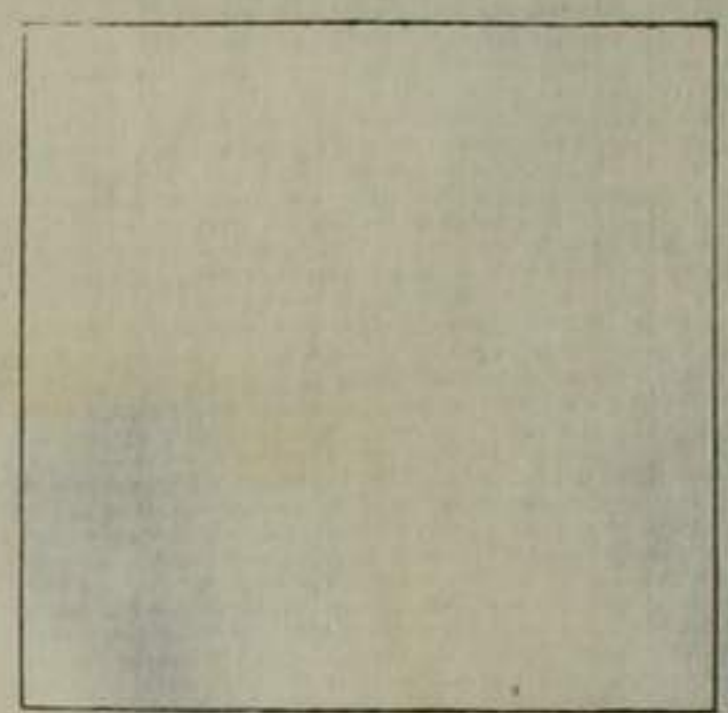
このげの



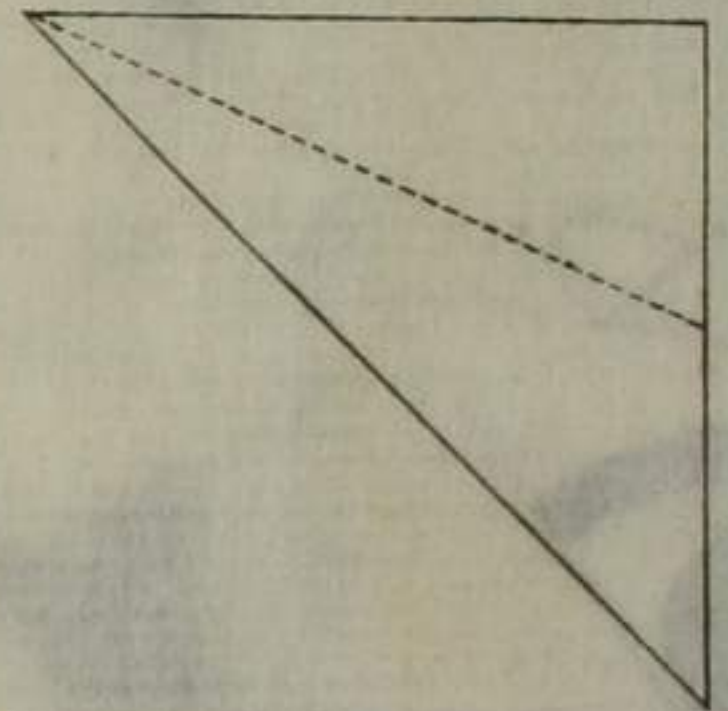
このをち



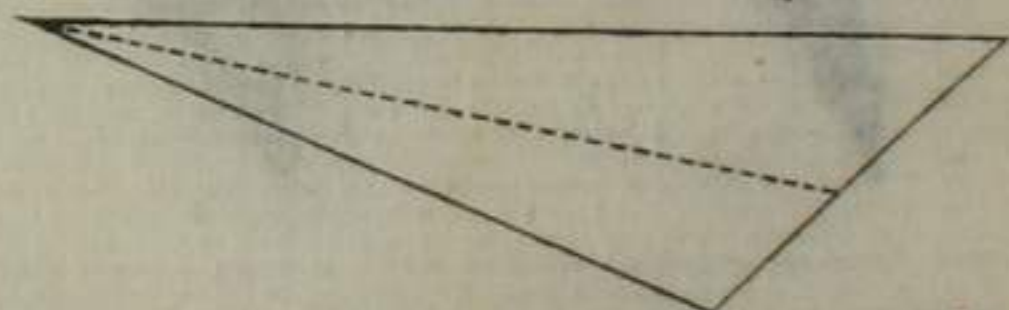
扇面 せんめん



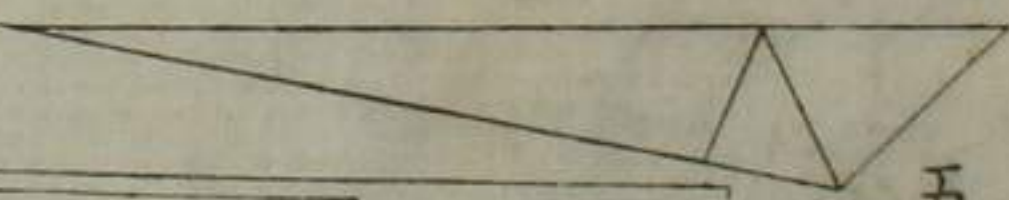
一



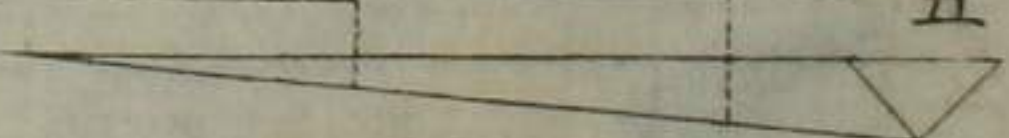
二



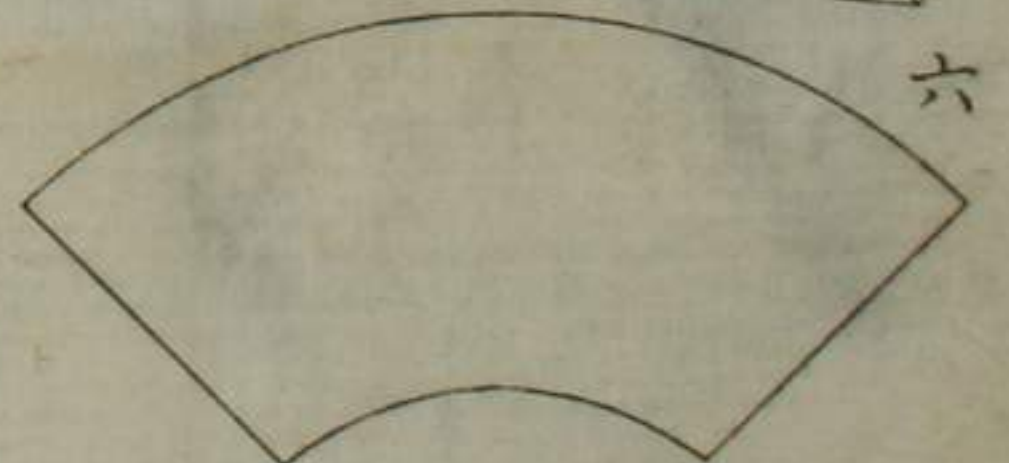
三



四

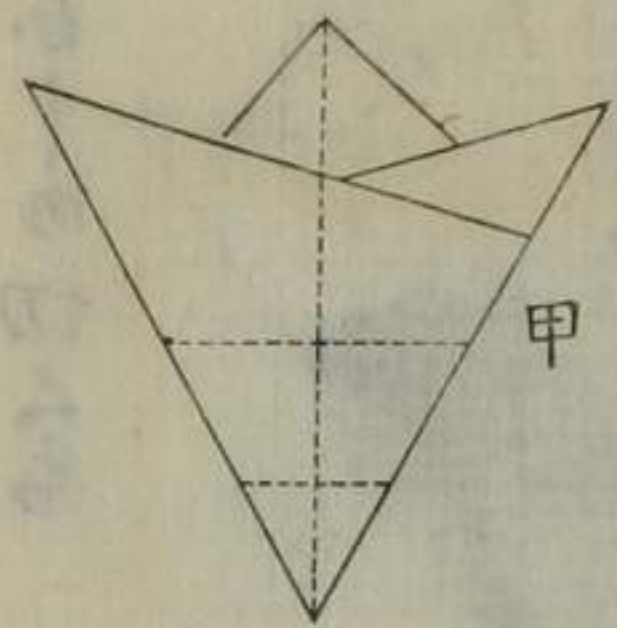


五

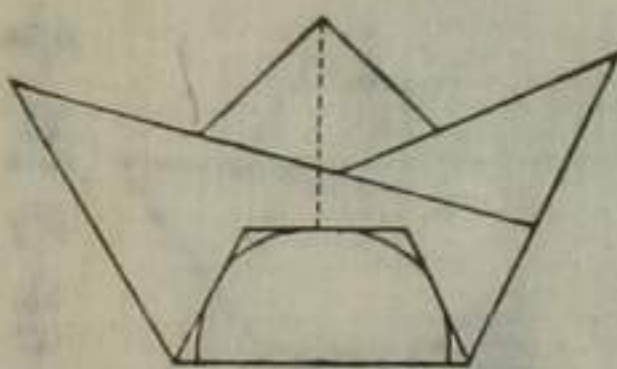


六

一缺刀の七曜 ひととせ



甲



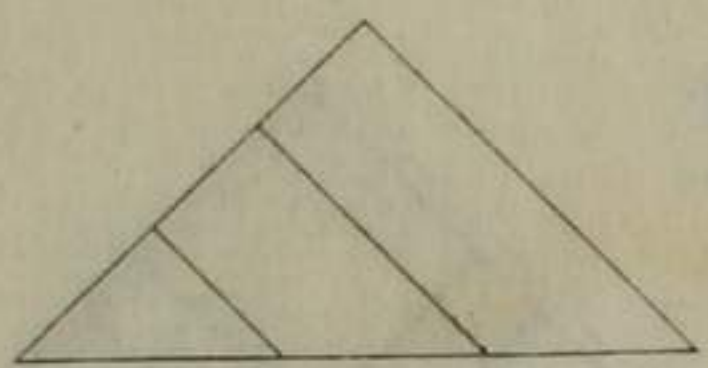
乙

此處を切るなり

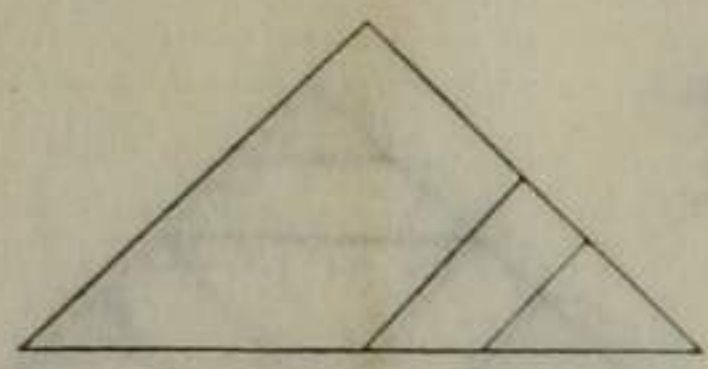
甲圖の如く三ツ折み又折目の如くおろして乙圖の丸の印の如くきまむ七曜とある

おまより以下の切形、米人著の所、幼稚園の書中より寫し出させるものあり、花とあく、紋とあく、只幼稚の思ひつきたるものを、切抜のむる手段あるべし、是亦よき工夫あり、因りて載せ、

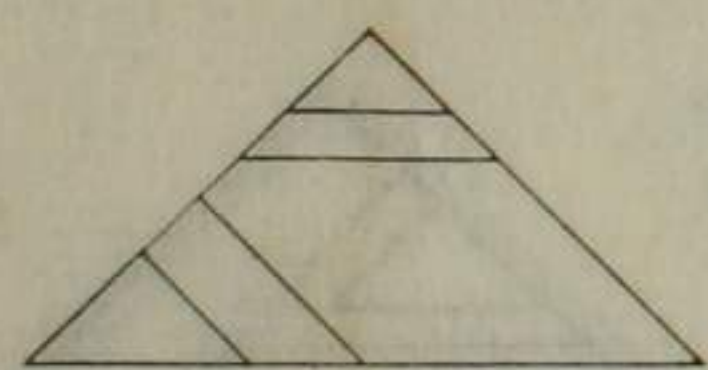
一



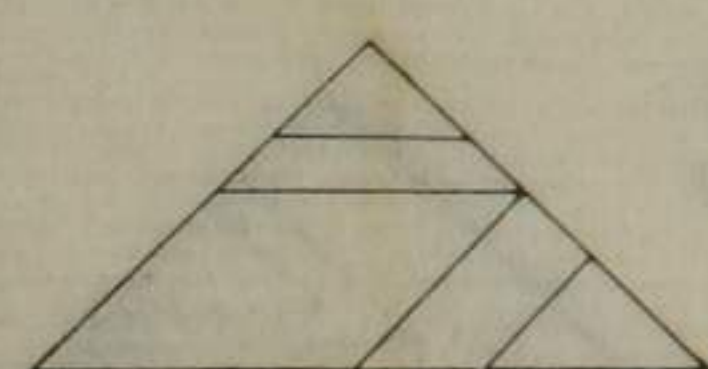
二



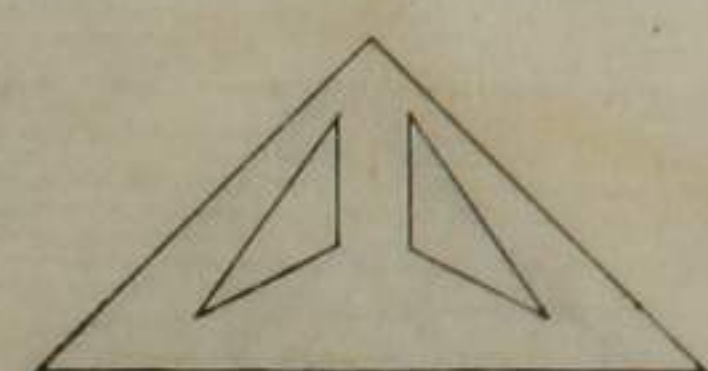
三



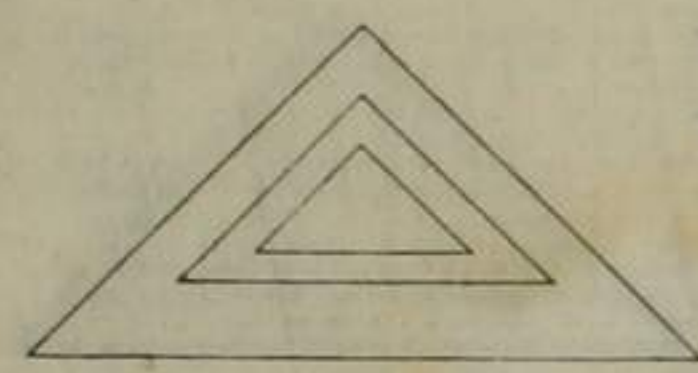
四



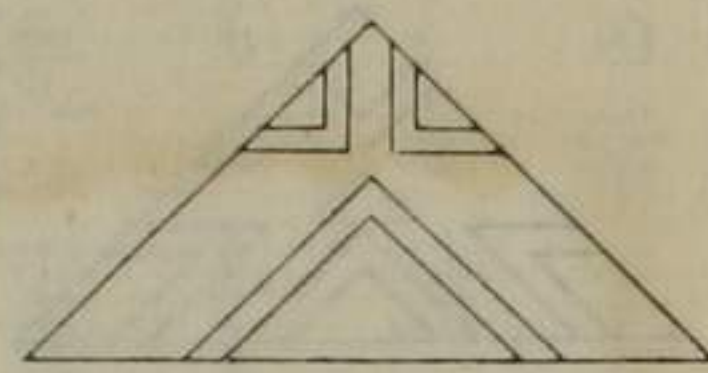
五



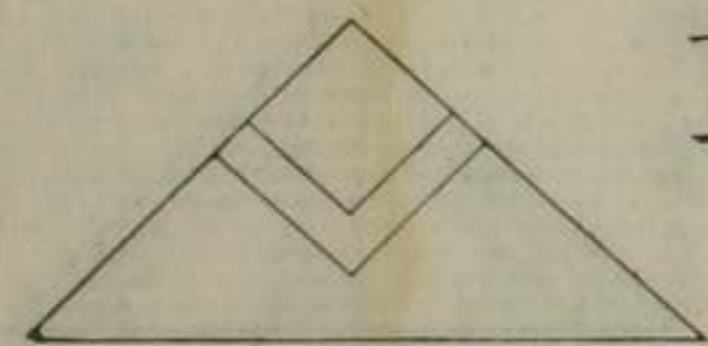




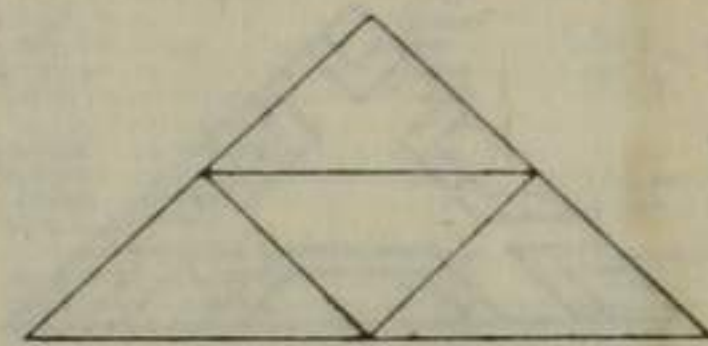
廿一



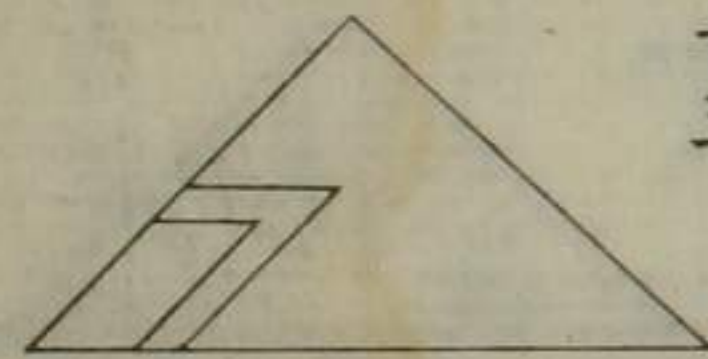
十六



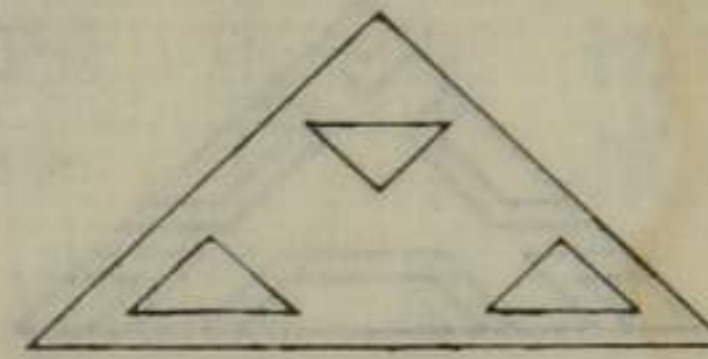
廿二



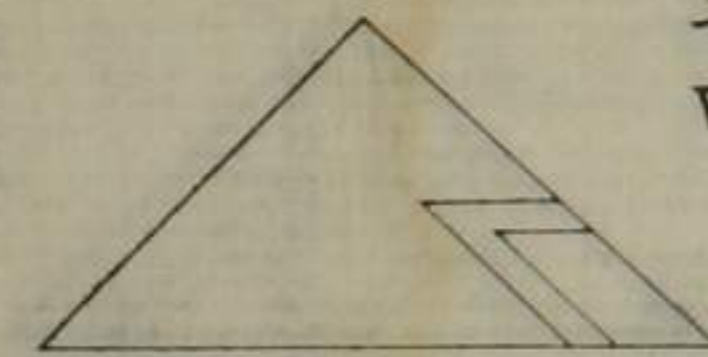
十七



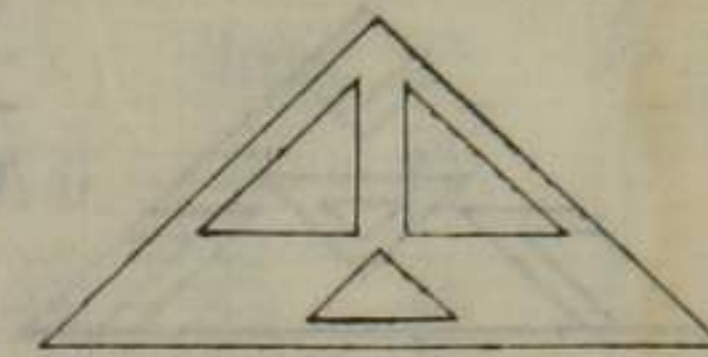
廿三



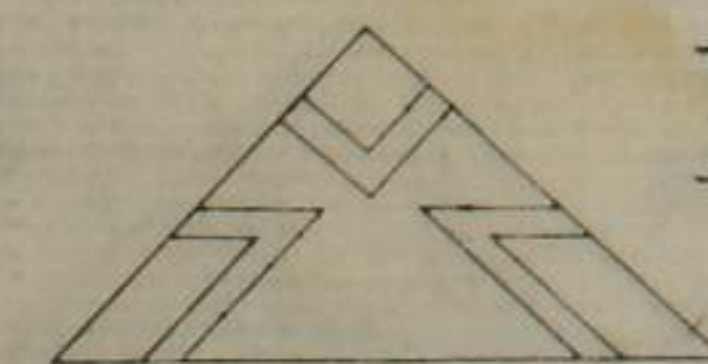
十八



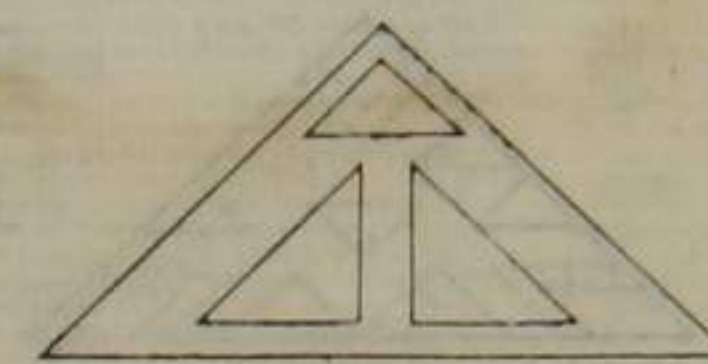
廿四



十九

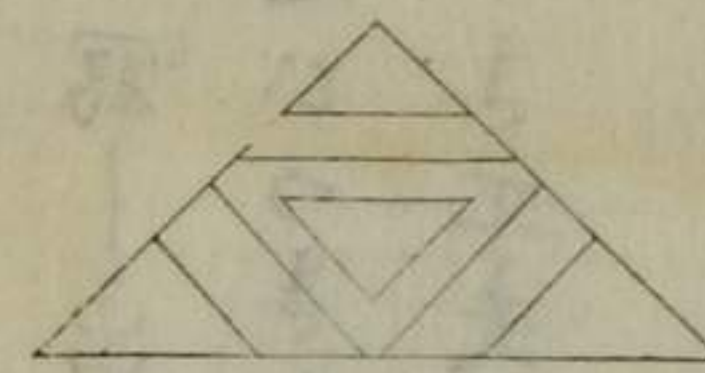


廿五

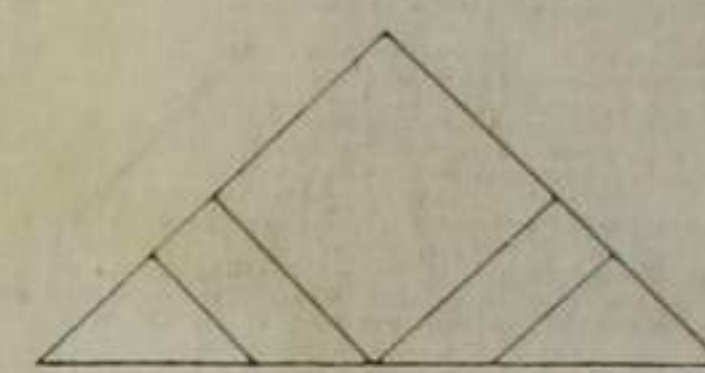


二十

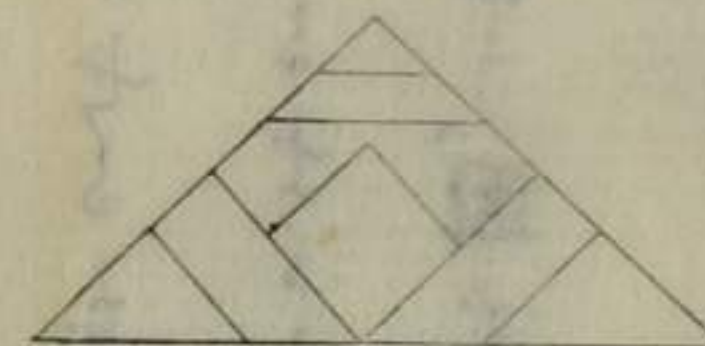
大まかに分けて下の四つは米入者へ多額の借財の書中



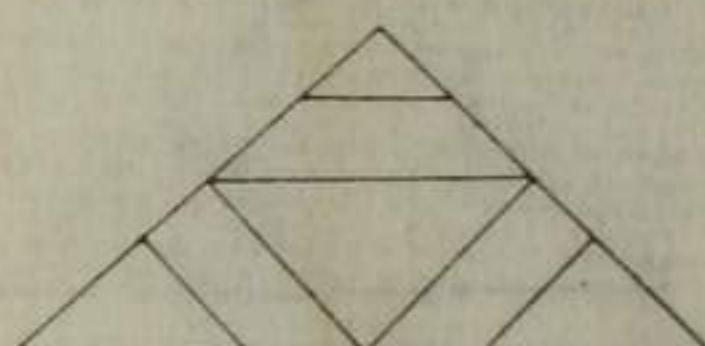
十一



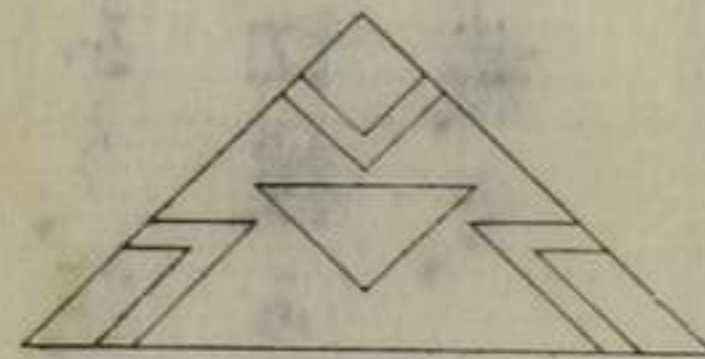
六



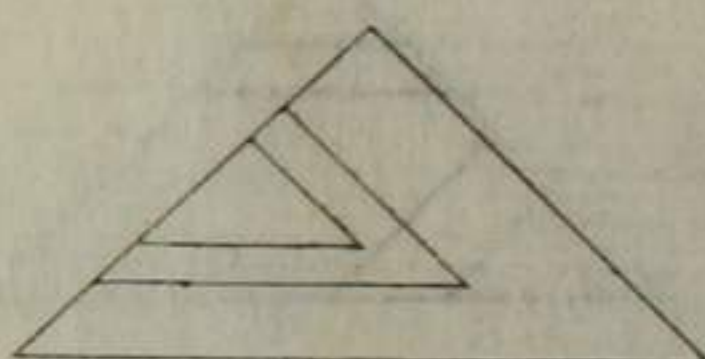
十二



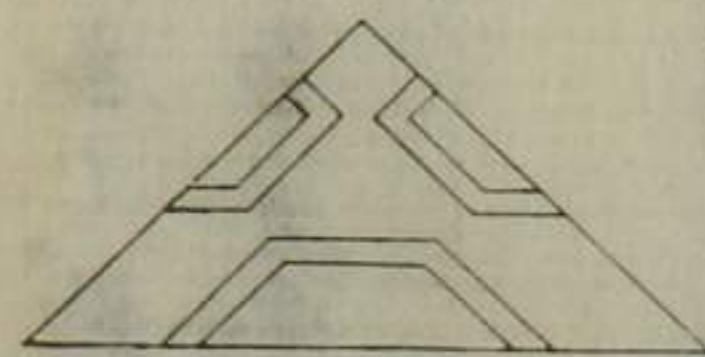
七



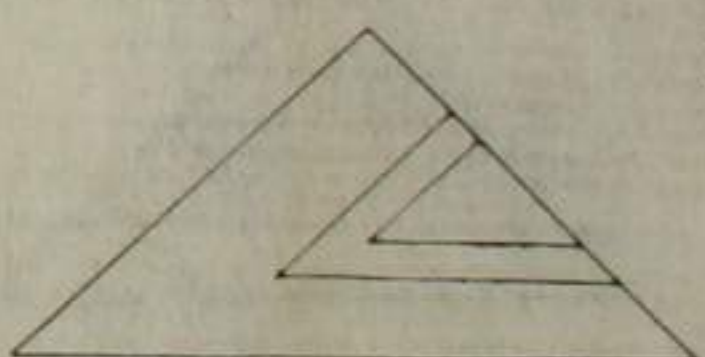
十三



八



十四



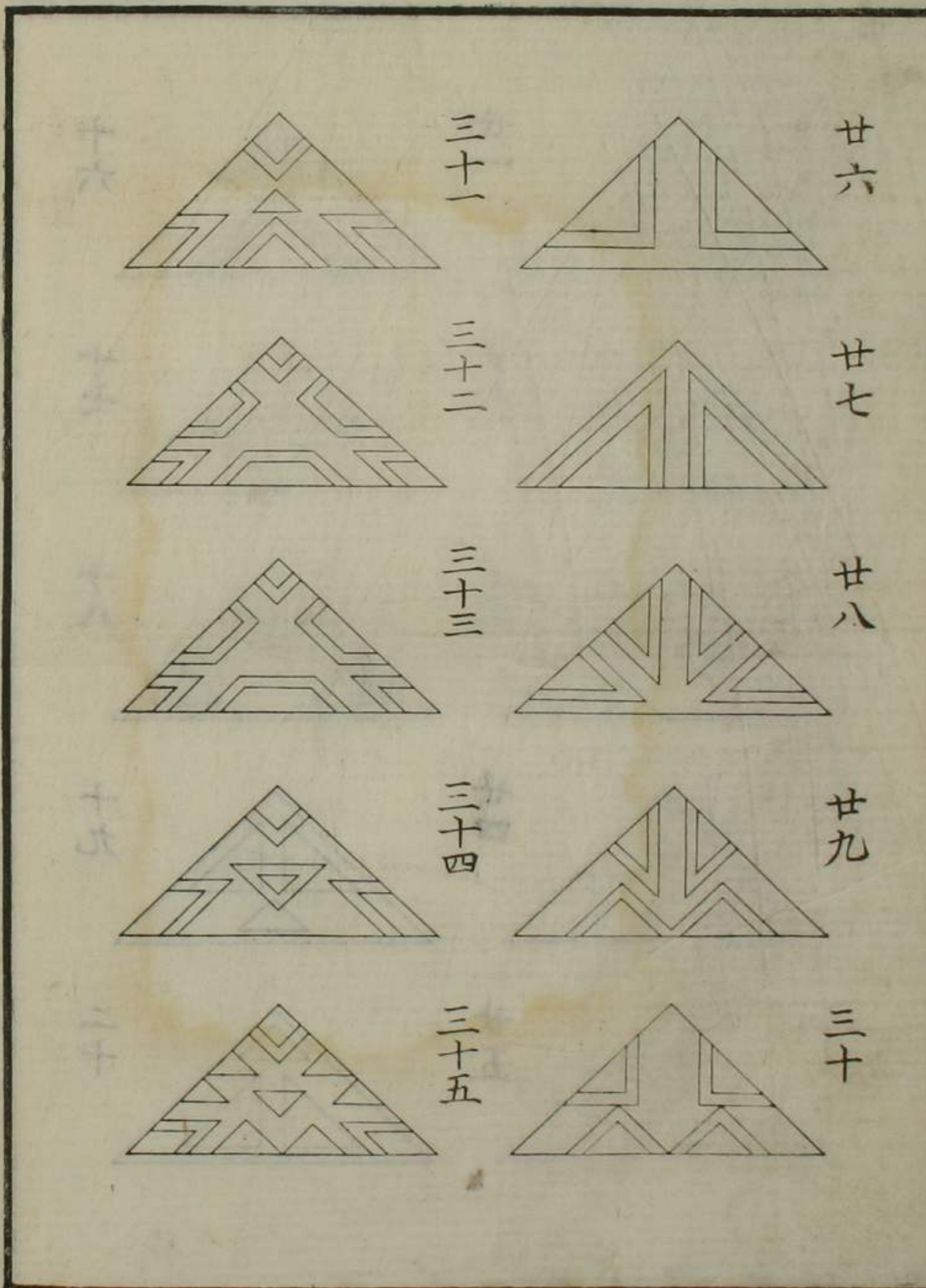
九



十五



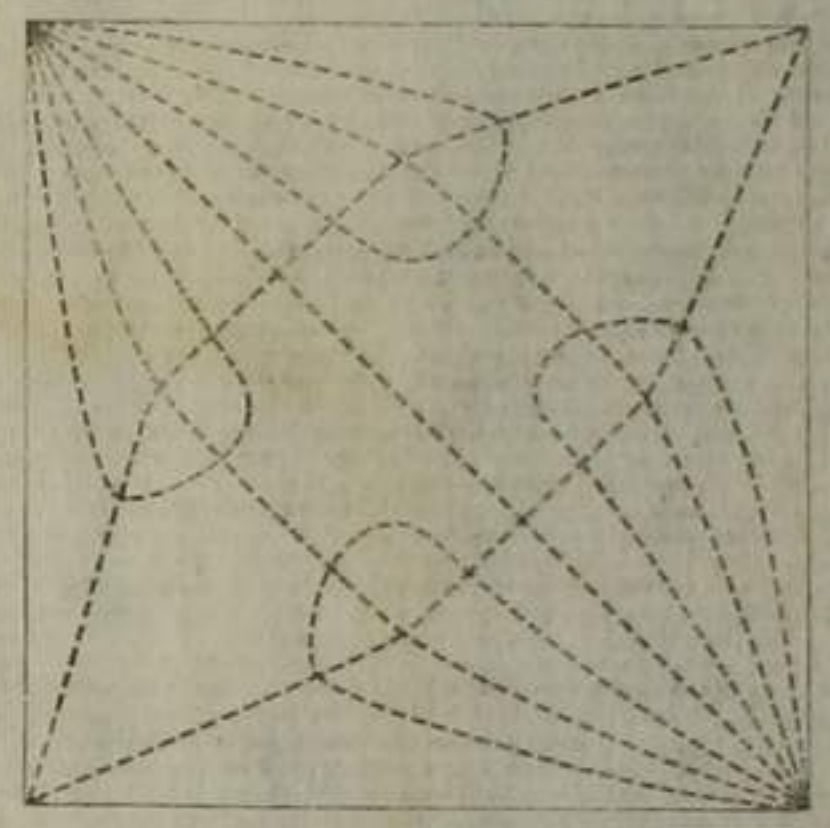
十



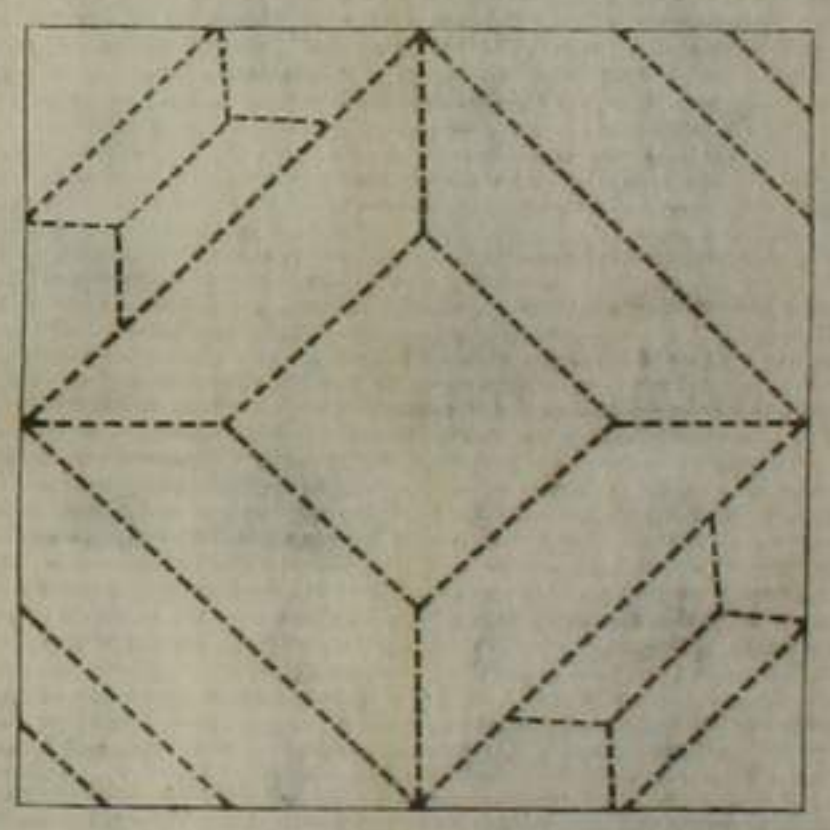
折物

此の業も亦結法、包法、切抜と云ふべく、指掌中の一術  
 ありて、諸工業の階梯たり、幼稚ハ、極めて此の業を嗜  
 むものあるは、保母注意して、詳細に教ふべし、  
 保母先ツ半紙、美濃紙の類を出し、切抜の如く四角は  
 きり、さて折りやまき天神の社、三つ、狐鶴の類より折  
 りて示し、夫より漸次は折り難きものを示して、志  
 めりて幼稚をして各自易きものより折らむべし、  
 其の折物の方法ハ、大抵左圖のおとく、猶漏まらむハ、保  
 母補ひて教ふべし、

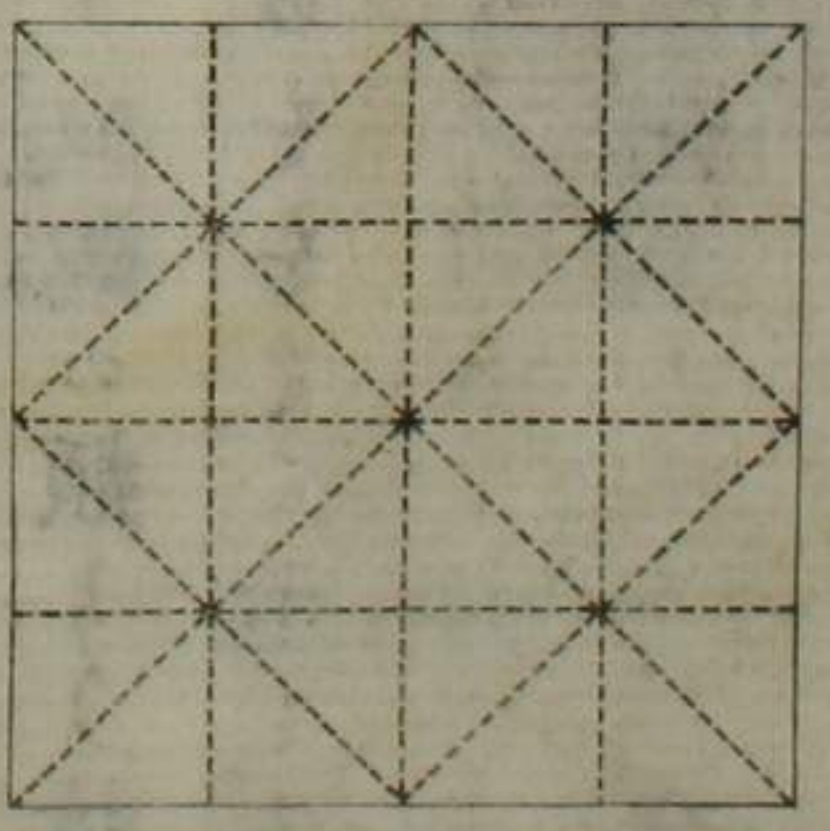
第一圖 甲



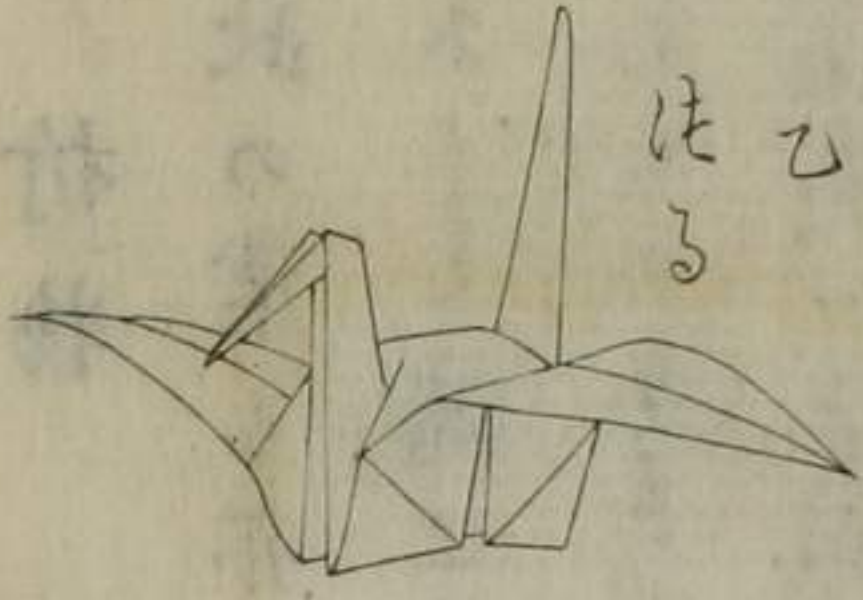
第二圖 甲



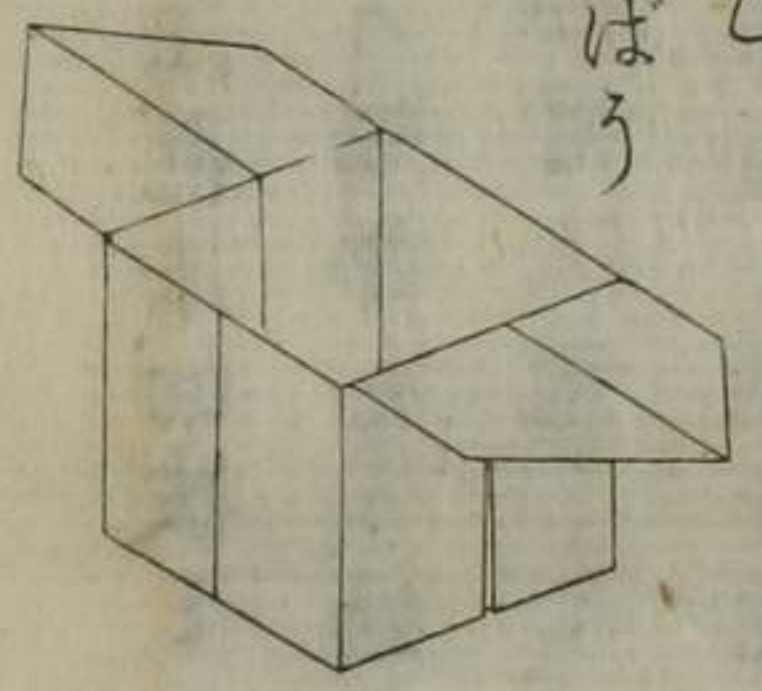
第三圖 甲



乙 ぼる

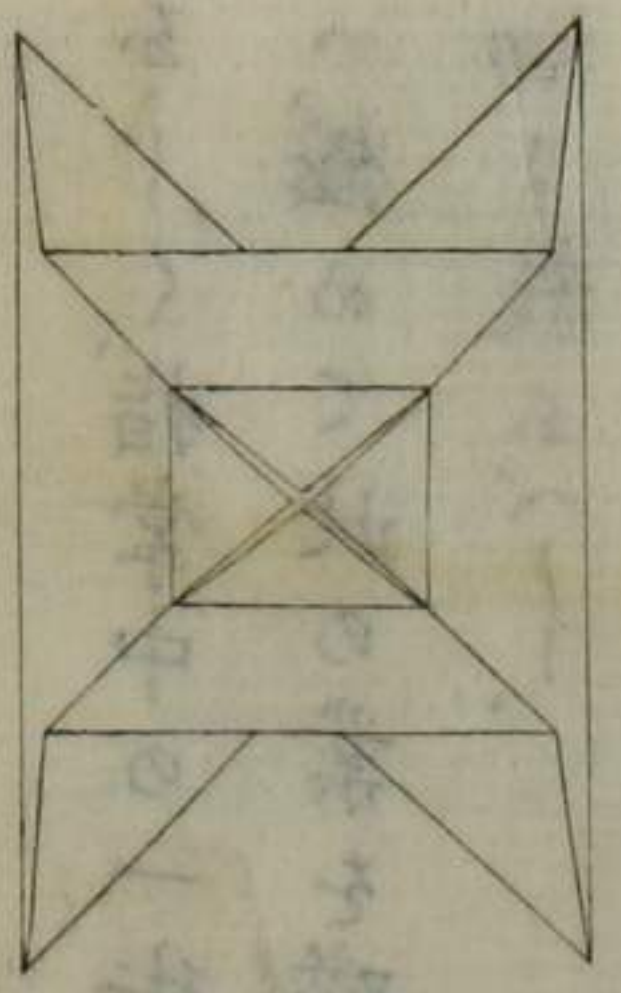


乙 三ぼう

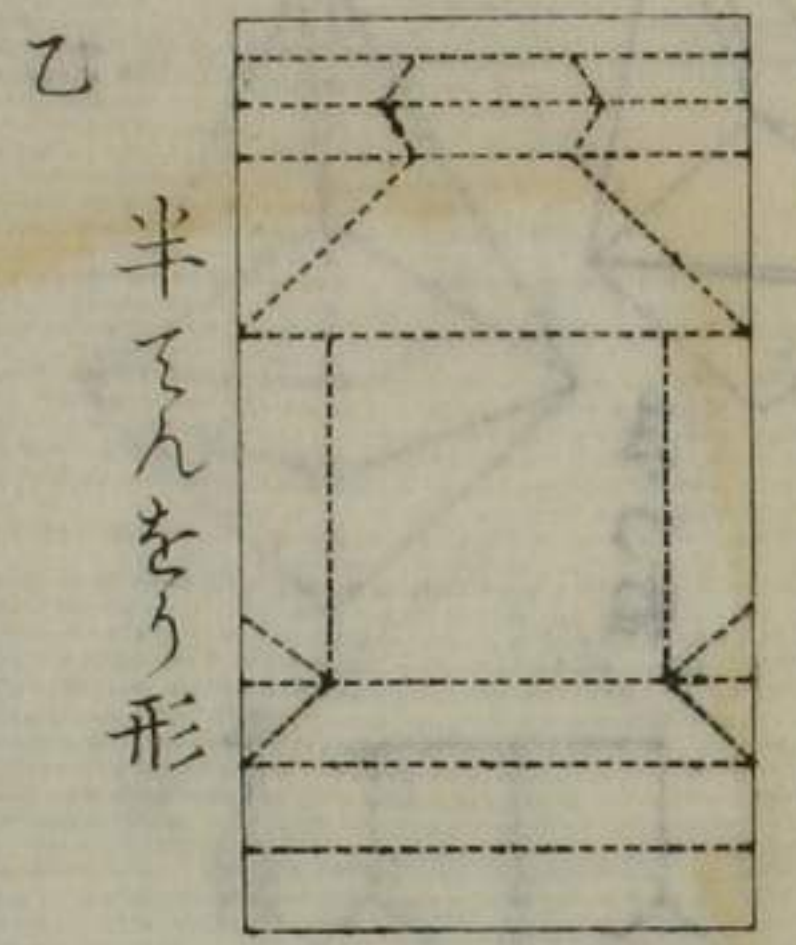


乙

天神の社



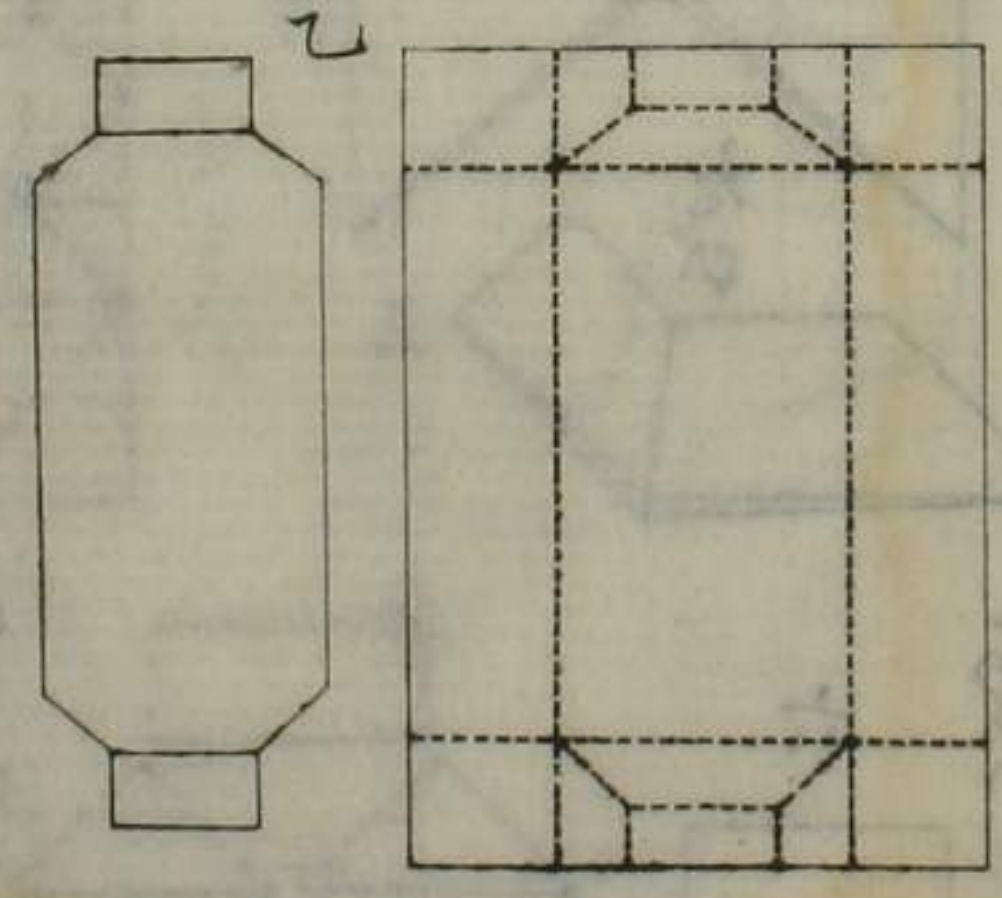
第四圖 甲



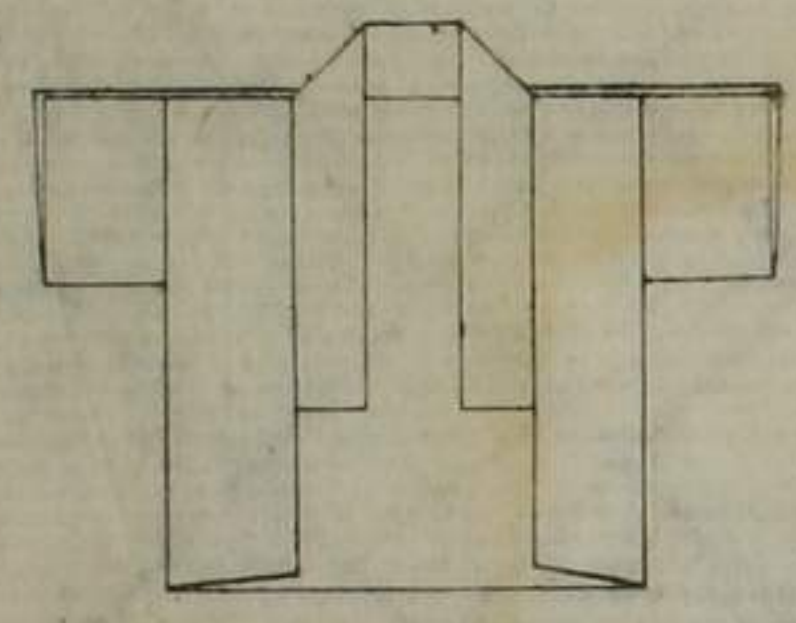
乙

半てんをう形

第五圖 甲てうちん



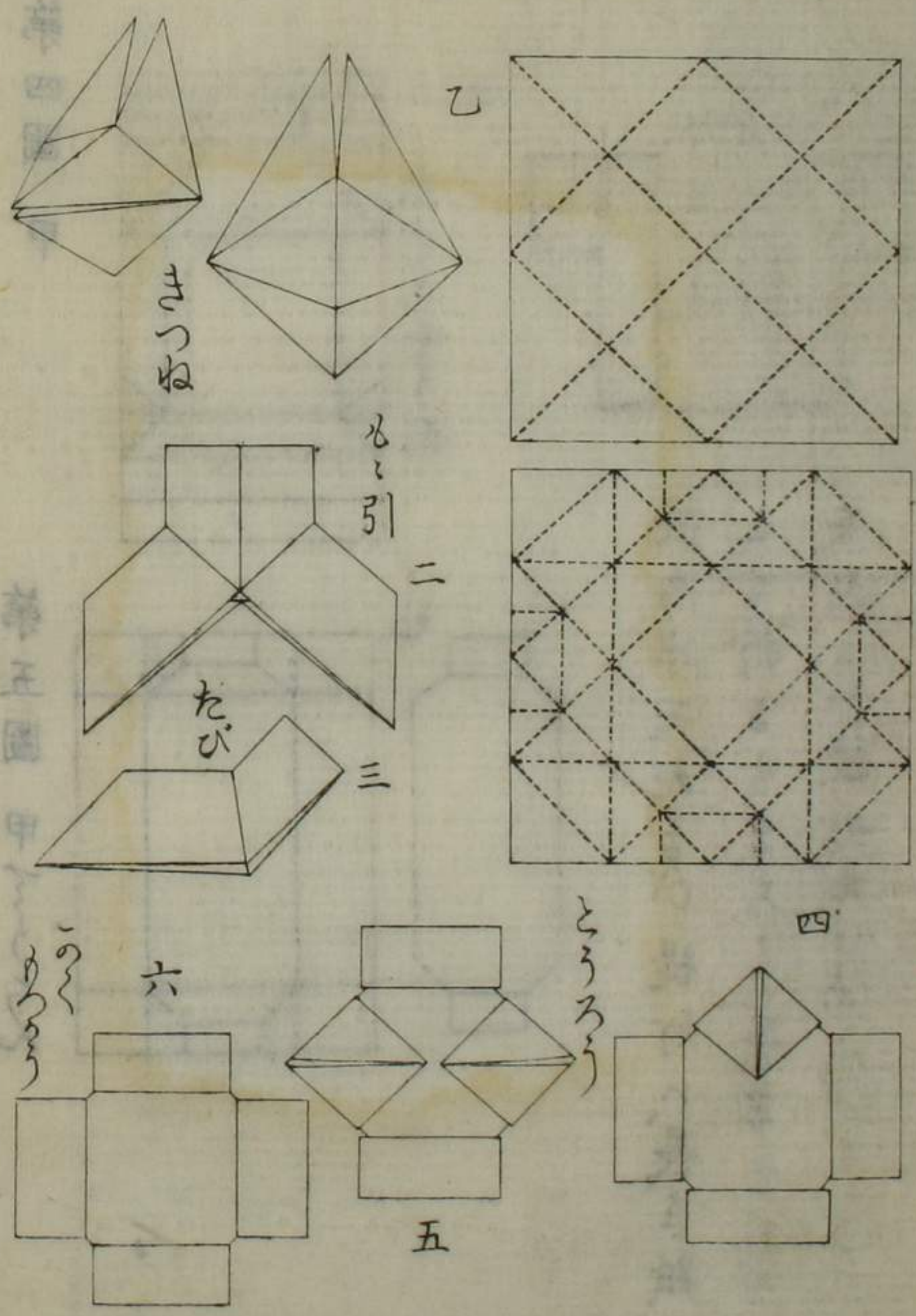
乙



此の半天ねよび提灯ハ、長き紙  
よて折るもよろし、長者よハ、半  
天ねよび提灯の寸法のびるあり、

第六圖 甲

第七圖 一

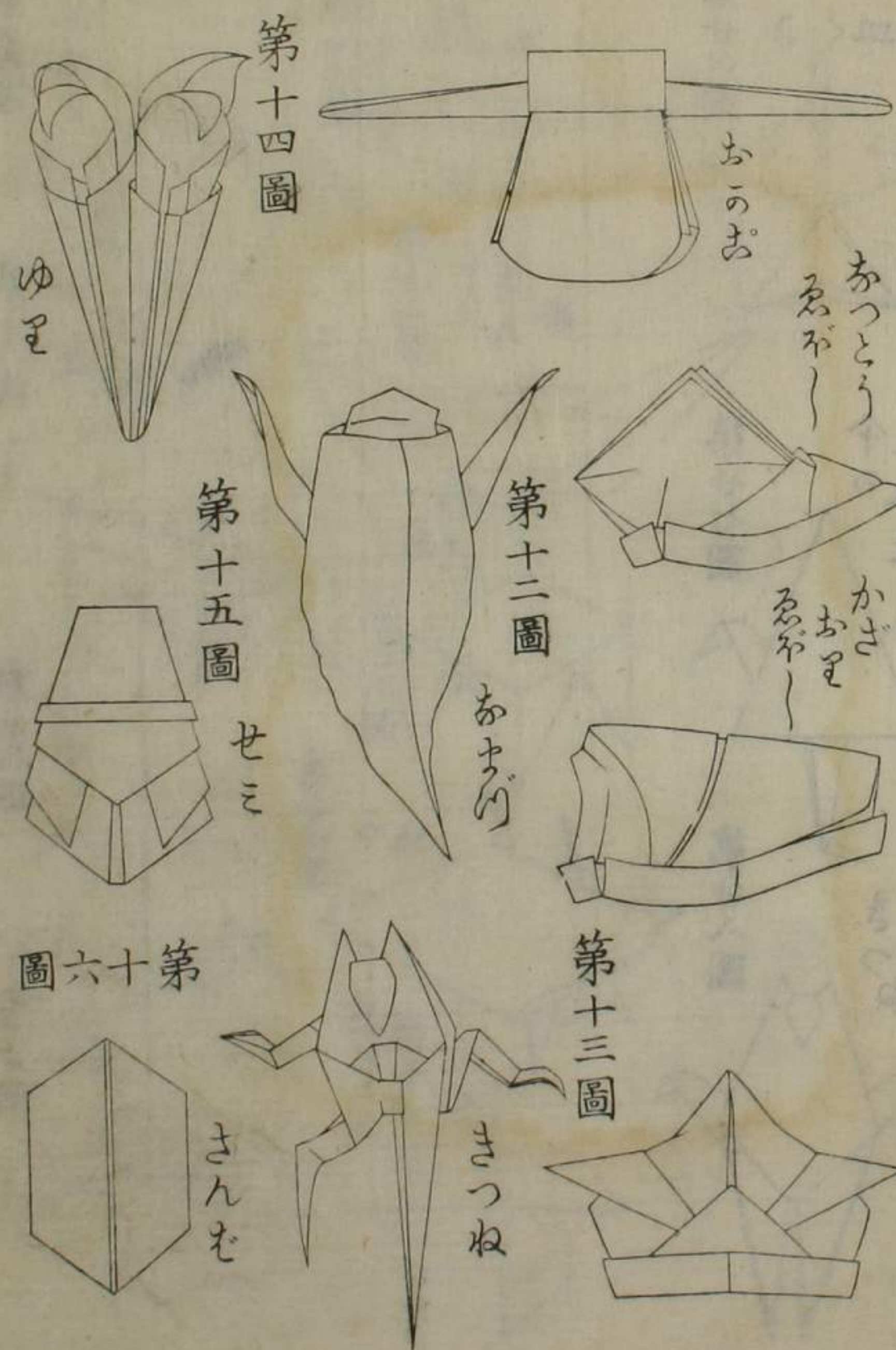


第八圖

第九圖

第十圖

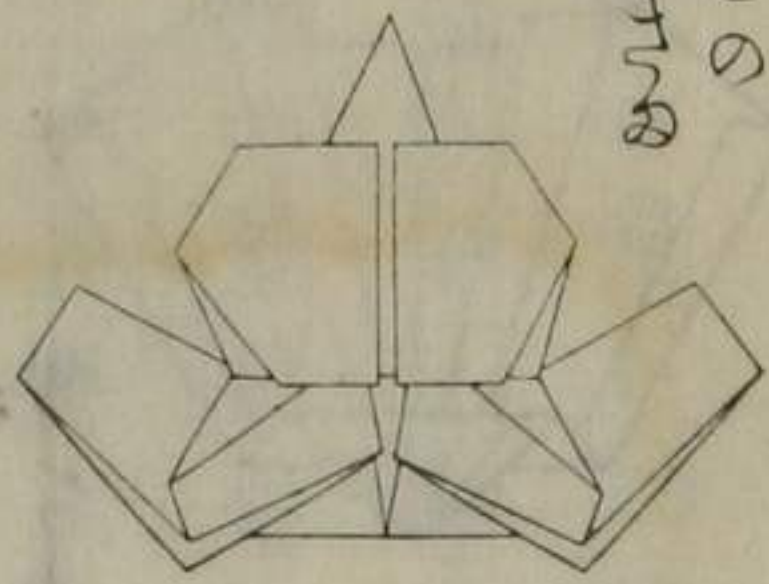
第十一圖



第六十圖

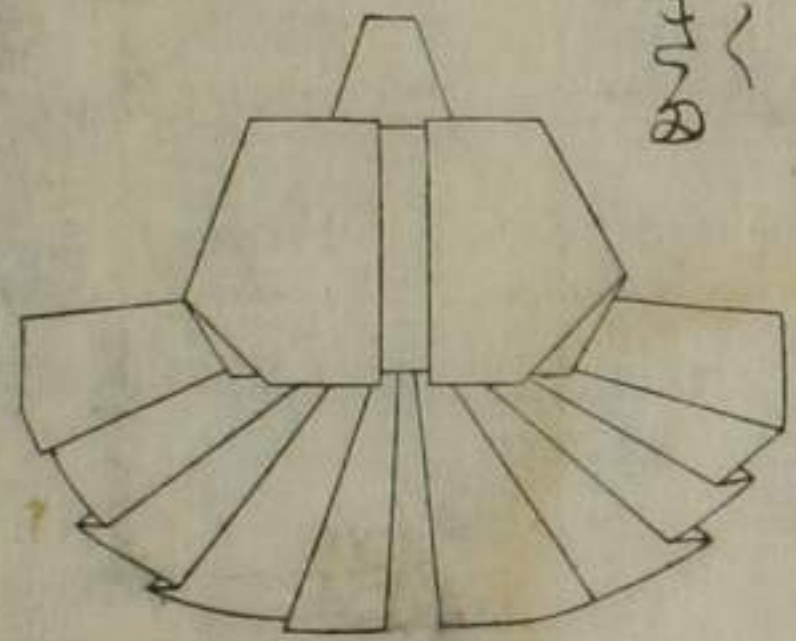
第廿九圖

この  
さめ



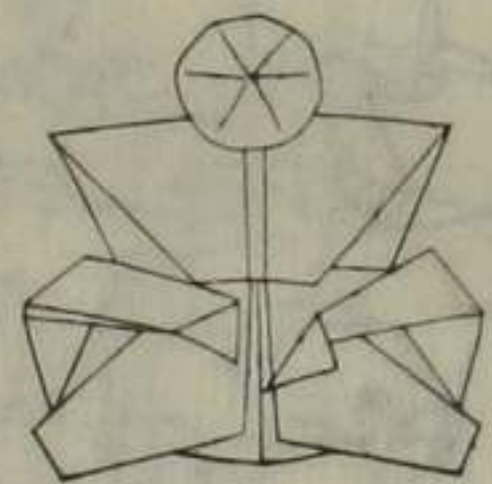
第三十圖

よく  
さめ



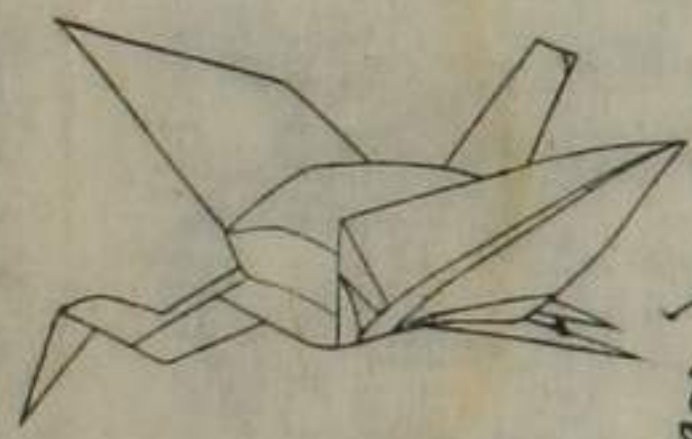
第三十一圖

あく介



第三十二圖

?



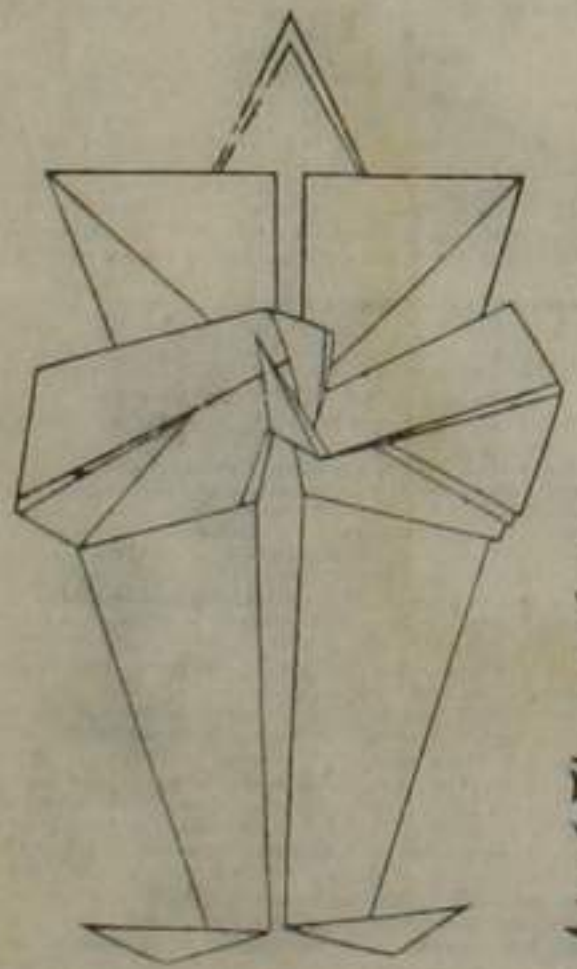
第三十三圖

このまじり



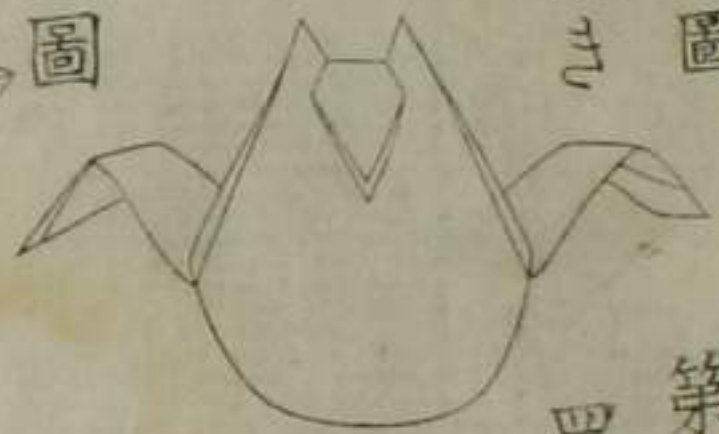
第三十四圖

よつき  
彈正



第十七圖

たぬき



第十八圖

四ッ足  
三宝



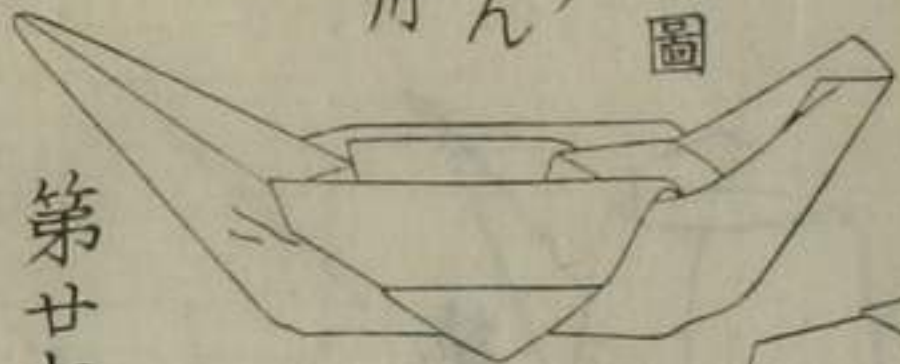
第廿一圖

小  
ねふ



第廿二圖

舟  
せん



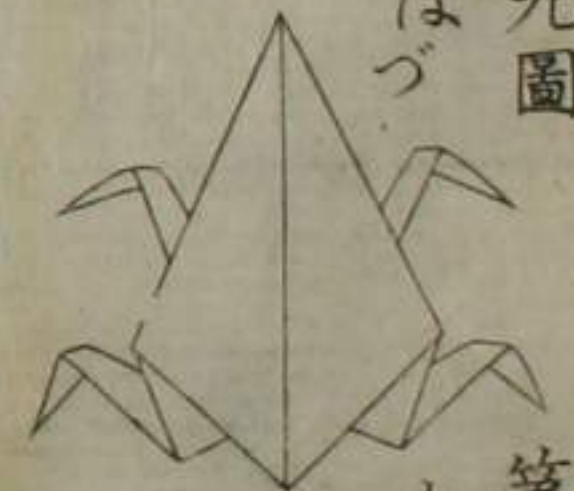
第廿三圖

たお  
ん



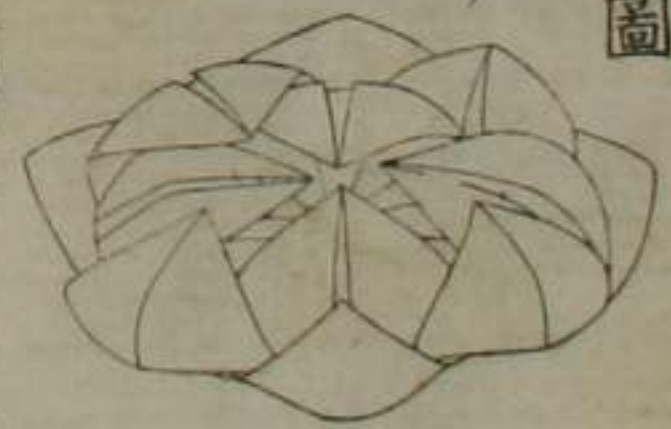
第十九圖

このはづ



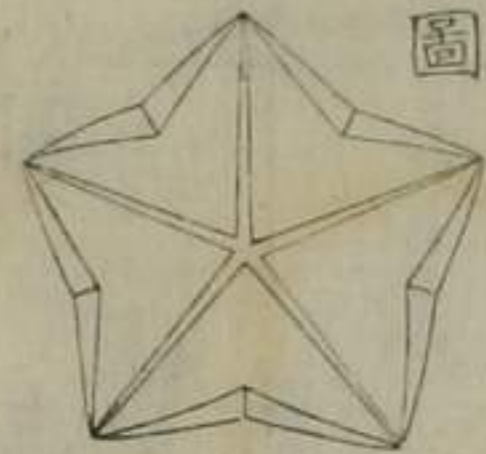
第廿圖

れげん



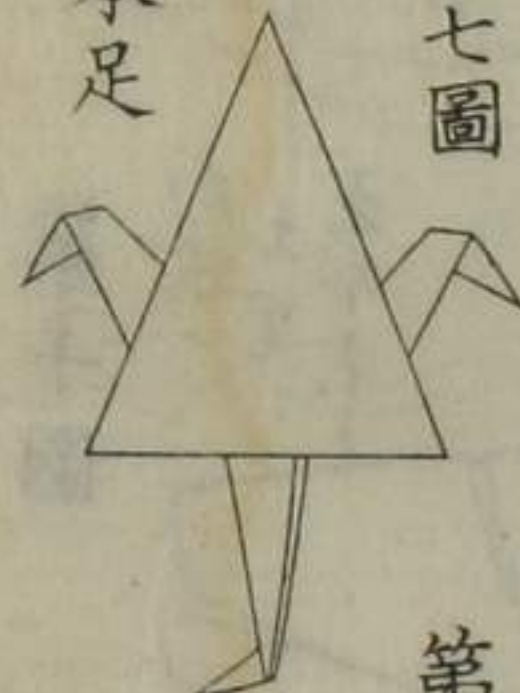
第廿六圖

皿く  
ま



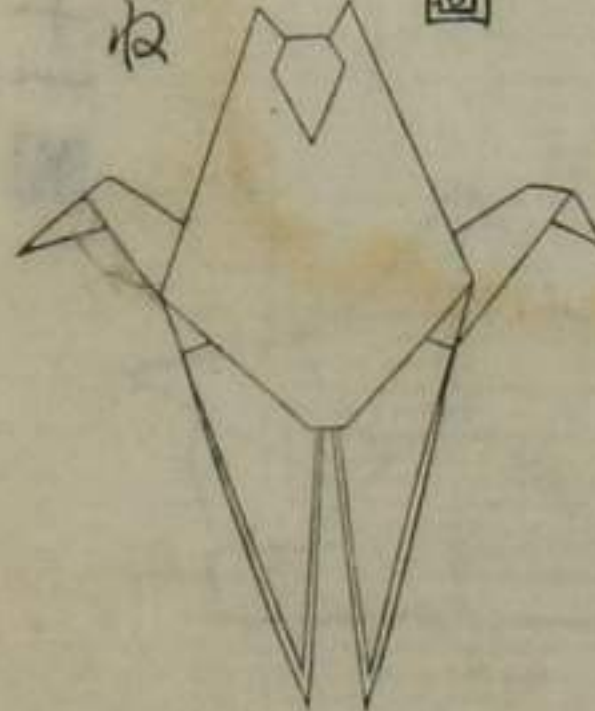
第廿七圖

今の  
一本足



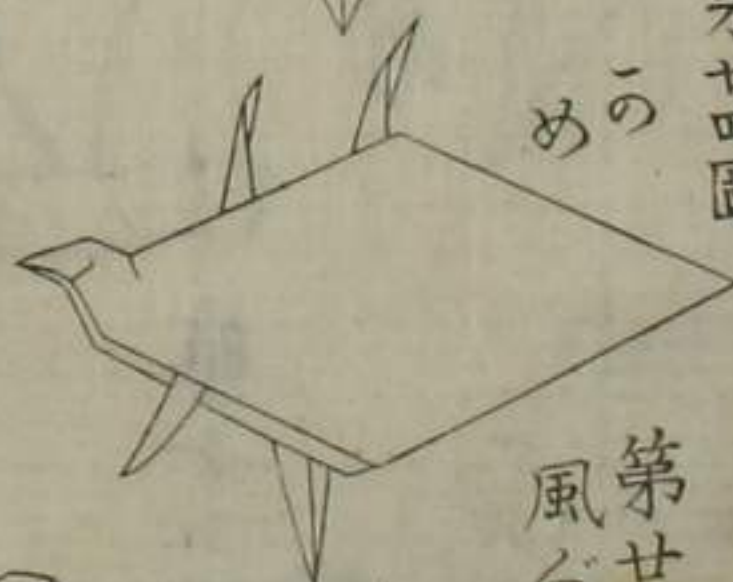
第廿八圖

まじり



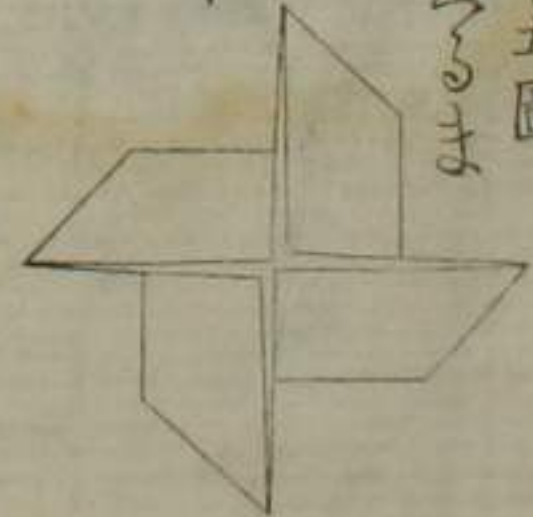
第廿四圖

この  
め

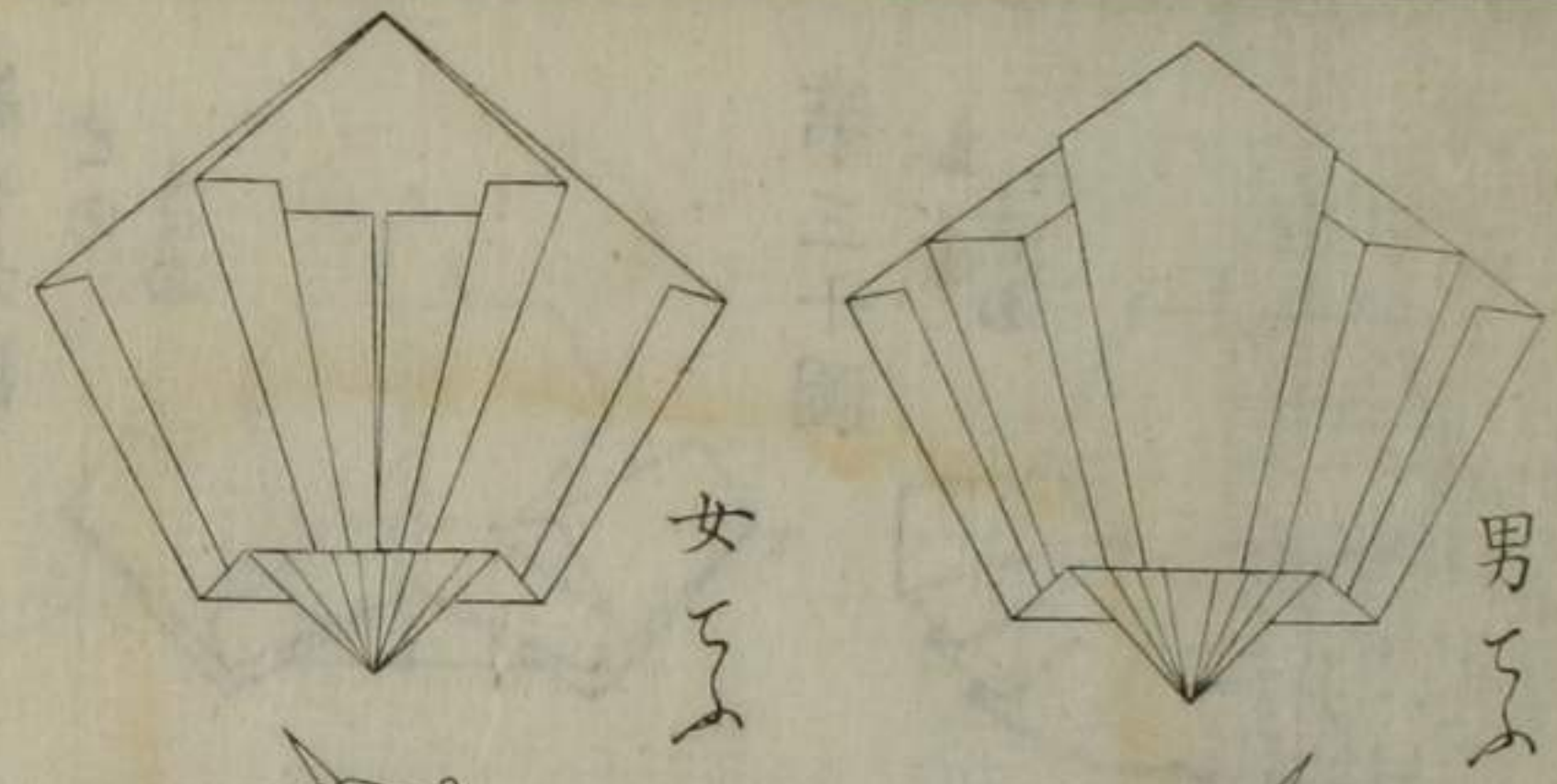


第廿五圖

風ぐるま



第三十五圖



第三十六圖 百鶴



色目

此の業ハ幼稚を以て色目を辨ぜしめ、視官の能力を  
 全うせしむるを主とし、即工匠および画工等におき  
 てハ、最肝要の學たる、抑色目を辨むるハ其の人によ  
 りて差異あること、嘗歐米學士の論むる所にして、其  
 の証、一々擧ぐるハ暇あるがごとども、赤色と青色とを同  
 色とする者、および赤色を緑色とありふ者最多りと  
 ぞ、此におきて色目の學おもしろ、我國未だ其の學あ  
 らず、古人色目を書し載する者多しと雖、薄葉色目、の  
 類、唯諸色を示すのみて、其の理を論むるものあり、

因りて色目の數亦多うとて、此の條載せる所ハ、歐米  
 學士の説又據り、色學の最卑近あるものを擧げ、又色  
 目を骨牌とあし幼稚園の一具とせり  
 保母先ッ七色の掛圖を指し、文部省刊行のものよろしあまハ黄あ  
 まあまハ赤あま、是ハ青あり、あまハ緑あり、靛あり、あま  
 ハ橙あり紫ありと再三示しねきさて、幼稚又むらひ再  
 ひ指して、こまハ何色あるやと問ひ、順次又答をかき  
 め、かくまもあまと數回ふして、幼稚既又七色を熟知せし  
 ふ至らば、あまの七色および黑白二色の外猶種々の色目  
 あるあまを解きさとほべし、

元色



次色



又あまの七色の中、黄、赤、青の三色ハ、他色を混じるあまあ  
 き純粹の色あり、故又あまを元色と名づく、其の他の緑、  
 靛、橙、紫の四色ハ、皆元色を混じりて生じり色あり、故又あ  
 まを次色と名づく、次色より生じり色、あまを三色と名  
 づく、あまはあまの七色ハ、黑白二色の兩間又あまて生

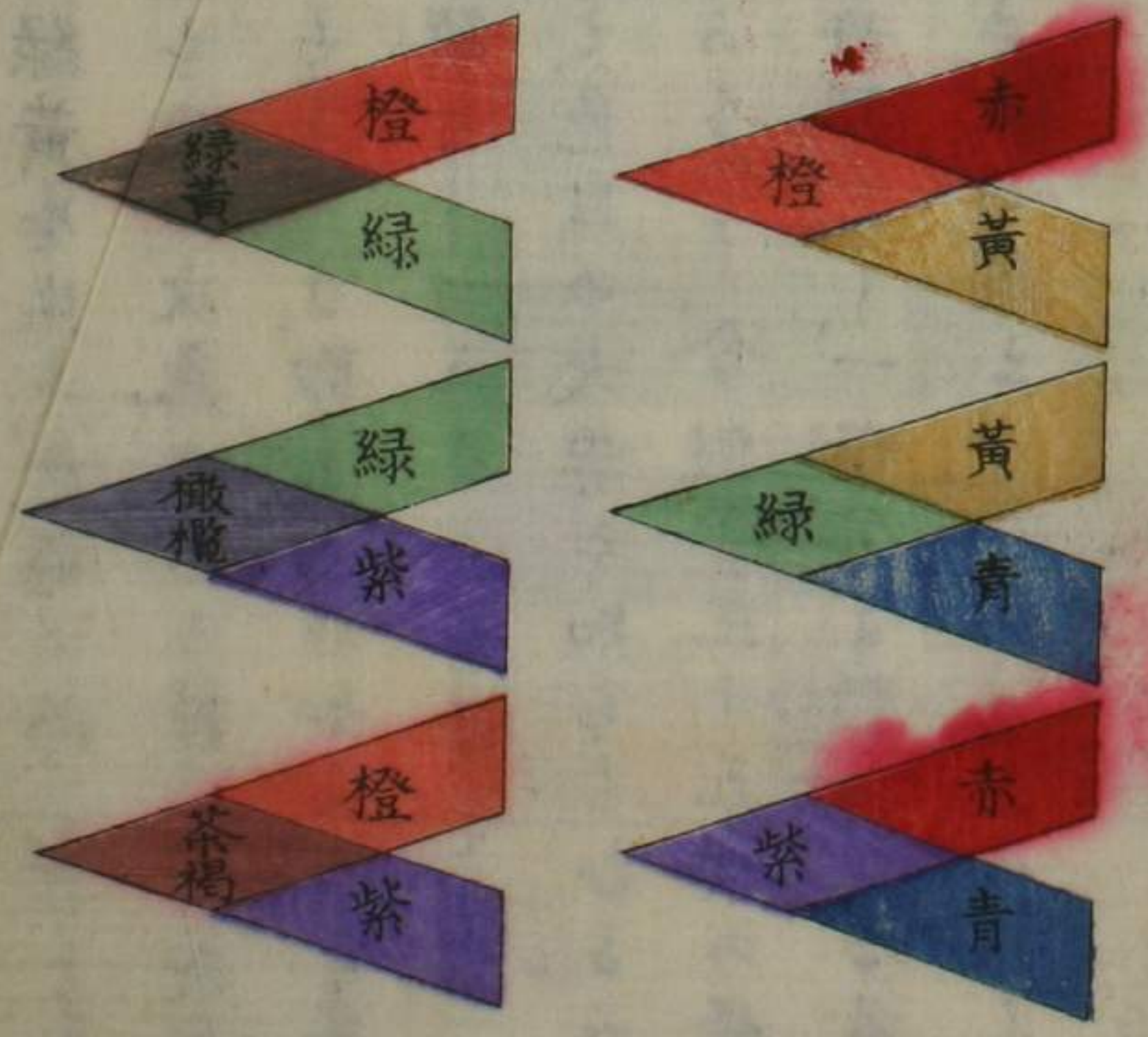
むるものふりて、あまを生ぜしむるハ光線あり、故ニ光線あけまば、色あまきあり、今試ニ日光中ニわきて、七色を示せば、と保母玻璃壺を取て、日光を分拆して七色を生ぜしめ、あまハ何の色あるやと問ひ、一々答へしめ、かの虹蜺中ニ現るる諸色ハ、即あの色あるまとを解きさとほべし、

玻璃壺より取りし七色の圖



又元色次色、三色を混合して生むる色目の大略ハ、元色の赤と黄とを混むれば、次色の橙を生じ、元色の黄と青とを混むれば、次色の緑を生じ、元色の赤と青とを混むれば、次色の紫色を生むるあり、又次色の橙と

合して生むる色目の大略ハ、元色の赤と黄とを混むれば、次色の橙を生じ、元色の黄と青とを混むれば、次色の緑を生じ、元色の赤と青とを混むれば、次色の紫色を生むるあり、又次色の橙と





緑とを混むと、三色の緑黄を生む、次色の緑と紫とを混むと、三色の橄欖色を生む、次色の橙と紫とを混むと、三色の茶褐色を生むとあり、即上圖の如く、あま等ハ幼稚をして漸次又理解せしめんことを要す。

幼稚の遊戯中より導きて、色目の大要を知らしむるハ、蓋し骨牌はあまくものあるべし、今假又三十五葉の骨牌を製す、其の製七色を母牌と、一母毎又類似せる色目四葉あり、是を子牌と、其の圖おとび用法左の如く、

骨牌の用法

幼稚五六人を團座せしめ、保母先ッ骨牌を取り、あまを

色目骨牌の圖

紅淡	朱	緋	赤	色玫瑰	赤
色卵	黄淡	色檸檬	黄	色綠香	黄
色水	青淡	縹	青	紺	青
色酥	黄火	色鮭	色柑	色葉朽	柑色
綠淡	綠豆莖	色鸚鵡	綠	色攪橄	綠
色藤薄	色藤	色花莖	紫	紫深	紫
色灰	色子丁	色櫻紫	色櫻	色栗	櫻色

卓上ニ撒布し、さて其の手記せる所の色目の名稱を呼び、或ハ順序を追ひ、或ハ順序をこぎ呼ぶべし、幼稚ハ、其の呼び聲を聞き目早くあまを取るべく、ねくるれば人又取らる、かくして

三十五葉全く取て終らば、各其の色と數とを閱し、さて優劣を決まべし、母色七葉を得る者を、第一の優等とし、各子色七葉を得る者を、第二の優等とし、母色れよび其の子色五葉を得る者を、第三の優等とせらるるあり、もあやまちて他色を取て者、其の罰として先き取て得し骨牌一葉を保母の前より出さしむ、おと其の用法の大略あり、

又一法あり、幼稚七人を團座せしめ保母骨牌をきるおと常の骨牌の如く、五葉つゝ順次より配りたまき、保母呼ひて赤と言ひ、赤の母牌を手とせらるるもの、先ッおとを

出し、卓上とわくべし、さておの者の手中猶赤の子牌あらば、高く其の名稱を呼びて、更卓上とわくべし、あざれば次座より命じて、赤の子牌を出さしむ、次座の手中もあざれば、次座より命じて、順次よりくの如くして、赤の母子牌皆出し盡したるべし、保母又呼びて黄といふ、黄の母牌を手とせらるるもの、おとを卓上より出し、前法の如く順次より子牌を出さしめ、かくして各幼稚中早く手中の母子牌を出したるもの、おとを第一の優等とせらるるあり、もし出さしむべき子牌を握りて知らむと言ひ、却て出さしむべきおとを次座より命じて、相當の罰と處まべし、

去其其の大略あり、骨牌ハ、他日製  
て發賣をべし

又幼稚をして色目の大要を知らしむるハ、問答をあた  
ふとくハあるべし、今其の例をあぐ、

色目問答

保母 問て曰く、此の書籍の表紙ハ、黄色あり、夜に至り蠟

燭よてあれを見れば、又かくの如き黄色あるや、

幼稚 答て曰く、黄色ハ見えずして、白色見ゆるあり、

幼稚 問て曰く、その如何ある道理あるや、

保母 答て曰く、光線（光線）のちるまきによて、晝ハ黄色あれ  
ども、夜ハ白色見ゆるあり、

幼稚 答て曰く、諾

保母 問て曰く、此の緑色の紙ハ、夜に至りても亦緑色ハ

見ゆるや、

幼稚 答て曰く、否、青色ハ見ゆるあり、その如何ある道理

よて然るや、

保母 答て曰く、緑色ハもと青色と黄色とを合せて生じ

たる色あり、故に夜ハ、光線のちるまきによて、黄

色ハ色を失ひ只青色のみ見ゆるあり、

幼稚 答て曰く、諾、實ハ奇あり、妙あり、

保母 問て曰く、暗室（暗室）中よたきて、此白紙を見る時ハ、如何

ある色あるや、

幼稚 答て曰く、色あり、

保母 問て曰く、かの紅色ある櫻の實を暗窖中よれきて

見る時ハ、何色に見ゆるや、

幼稚 答て曰く、色あり、

保母 問て曰く、紅色ある櫻の實、れよひ白色ある紙の暗

窖中にれきて、色なきハ、如何ある道理あるや、

幼稚 答て曰く、前の黄色の表紙、れよひ緑色の紙と同じ

く、光線のちかきよきよきと然るものあり、

保母 答て曰く、諾、

保母 問て曰く、黄色ハ如何ある色あるや、

幼稚 答て曰く、假令ハ菜の花の色又ハ黄金の色の如き

をいふ、即元色三の一あり、

保母 問て曰く、赤色ハ如何ある色あるや、

幼稚 答て曰く、元色三の一あり、假令ハ人身の血の色

の如き色をいふ、

保母 問て曰く、青色ハ如何ある色あるや、

幼稚 答て曰く、あまきまの元色三の一あり、假令ハ晴ま

る天空の如き色をいふ、

保母 問て曰く、柑色ハ如何ある色あるや、

幼稚 答て曰く、赤色と黄色とを合せし色にして、柑かきの色  
の如きをいふ、

保母 問て曰く、緑色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、青色と黄色とを合せし色ふして、松まつ葉の  
おときき色をいふ、

保母 問て曰く、紫色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、青色と赤色とを合せし色ふして、藤ふじの花  
の色の如くにして、濃よきものをいふ、

保母 問て曰く、紺色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、紫色と赤色とを合せし色ふして、濃よき青

保母 色ハ赤色を帯びたるものをいふ、

問て曰く、玫瑰色ハ、如何ある色あるや、

答て曰く、赤色と紫色との合色ふして、玫瑰ばらの花の  
色の如きをいふ、

保母 問て曰く、緋色ハ、如何ある色あるや、

幼稚 答て曰く、柑色と赤色とを合せし色あるぞ、

保母 問て曰く、香櫞かうごん緑ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、熟せざる香櫞かうごんの如き色ふして、即柑色と  
緑色とを合せしものあり、

保母 問て曰く、檸檬色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、あまじく熟せざる檸檬の色の如き色を

いふ、

保母 問て曰く、淡黄色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、金絲雀の羽毛の如き色をいふ、

保母 問て曰く、縹色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、俗な花色と称ふる色あまじくあり、

保母 問て曰く、朽葉色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、柑色の色濃きものをいふあまじく、

保母 問て曰く、鮭色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、柑色と黄色とを合せし火黄色と赤色を

帯びたる色あして鮭の肉の色の如き色をいふ、

保母 問て曰く、酥色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、牛酪の色の如き色をいふ、

保母 問て曰く、橄欖色の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、紫色と緑色とを合せし色あして橄欖の

如き色をいふ、

保母 問て曰く、鸚鵡緑の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、祖母緑球の如き色をいふ、

保母 問て曰く、豌豆緑の如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、豌豆の莢の如き色をいふ、

保母 問て曰く、堇花色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、紫色ハ青色を帯びたる色ふして、堇の花

の如き色をいふ、

保母 問て曰く、藤色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、薄き紫色ふして、藤の花の如き色あるハ

藤色といふ、

保母 問て曰く、紫椽色ハ、如何ある色ぞ、

幼稚 答て曰く、紫色と柑色とを合せし色ふして、即椽

の毛の色ハ似たる椽色ハ、赤色を帯びたる色をい

ふ、以下の推して知るべし、

談話

此の業ハ、人と交ハテ、我が意想を述ふる一科の學術

の階梯あり、凡談話ハ、節律あるを要ス、節律あるハ、

其の意味貫通せざるのこある也、或ハ首をふテ、手を

動らし、傍よりおきを見まバ、實ハ醜きものあり、此を

もて歐米の學校教科書中ハ、必會話書あり、此の條

載せる所の談話ハ、画の解説、事實の話、落し話、比喻の

話等ふして、皆古くよリ人口ハ膾炙せるものあり、と

も、幼稚ハありてハ、最肝要の教科あるべし、

保母先ッ画を示して、解説をおまべし、画ハ幼稚の最嗜

むものあり、其の解説、其の画  
圖、左の如し、

此の画ハ、神武天皇東國を征  
伐し給ふ圖也、天皇ハ、天照  
太神五世の孫あり、日向の國  
より興じ、舟師をもて東國を  
征伐せらま、倭の檀原ニ都  
給ふ、今を距る古と實ニ二千  
五百四十余年あり、

始記



此の画ハ、神功皇后三韓を征  
伐し給ふ圖あり、皇后ハ、仲哀  
天皇の皇后あり、天皇崩御の  
後、大臣武内宿禰と謀り、三韓  
を征伐し給ふ、古より三韓  
貢を入る、三韓ハ、新羅、高麗、百  
濟の出とみし、即今の朝鮮  
國あり、





帝位を覲ふ、称徳天皇清麿を  
して宇佐八幡の神教を請ひ  
しむ、清麿歸り奏して曰く、我  
國開闢以來、君臣の分定ま  
未だ臣をもて君とせし者と  
ありし、天日嗣へ、必皇緒を立  
て、早く無道の人を除くべしと、  
道鏡怒りて清麿を大隅に流  
し、光仁天皇の朝、召し還させ、  
卒し正三位を贈らる忠烈



の龜鑑あり、

此の画ハ、楠正成、櫻井驛に  
きて一子正行に遺言せし圖  
あり、正成ハ、元弘建武の乱に、  
勤王の大義を唱へ、寡兵をも  
て、千早城に籠り、百万の大敵  
を防ぎ、其の他畿内所々の戦  
に、克とせしゆふあり、然  
まども、時至らば、一子正行に  
遺言して、湊川に戦死せし、我國



忠臣の明鑑あり、

此の画ハ華盛頓英兵と戦ふ圖  
あり、華盛頓ハ米國別部の人  
みして、其の祖父の本貫ハ英  
吉利あり、米人英政の苛酷  
苦む、頓將帥とあり、英兵と  
戦ふと八年、遂ニ英人を追  
ひ、獨立して合衆國を建つ、實  
ニ我々天明二年西曆一千七  
百八十一年あり、



此の画ハ第一世拿破翁の肖像  
あり、拿破翁ハ佛蘭西の夙  
將あり、國王路易の弒せらる  
るに乘り大權を握り、王位  
即き、終ニ宇内を混一せんと  
し、歐洲諸國を侵畧し、諸國  
を畏るゝと、虎の如く、後  
魯都墨斯科の一戦ニ敗北して、  
盡く侵地を失ふ、其の雄  
才大畧古今の歴史上未だ見  
ざる所あり、其の帝位ニ即  
き、實ニ我々享和三年より西  
曆一千八百零三年あり、

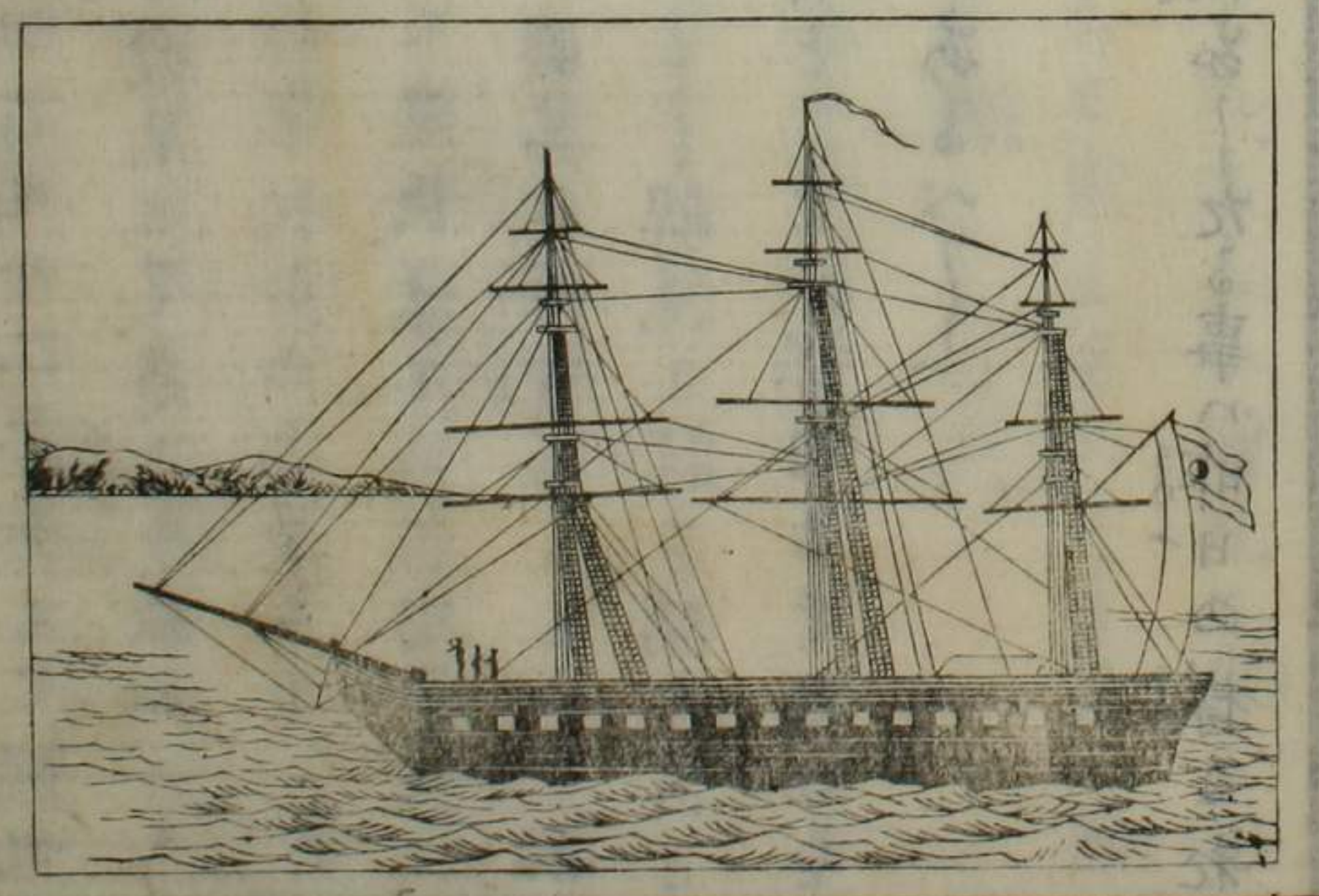


此の画ハ彼得羅の肖像あり  
彼得羅ハ魯國中興の賢主あり  
幼時其の嫉權を貪り政を  
專よせ彼得羅禍を避る僧と  
ある後國人ヲ推さき位又即  
き禮を卑く賢を招き國政日  
々新かり嘗姓名を變じ和蘭  
に至り操舟の術を學ひ歸り  
て舟師をもて瑞典と戦ひ是  
を建つ魯國近時の強大あるハ



ハ、實ニ彼得羅より始まる  
勝ち遂ニ新都彼得羅堡

あり、  
此の画ハ閣龍亞米利加を發  
見せし所の圖あり閣龍ハ意  
太利の人あり航海の術ニ精  
しく歐洲の西ニ國土あるを  
とを知り去を探知せん  
と國王ヲ説くニ聽あきむ又  
英吉利王ヲ説くニ同く用  
みられ去りて西班牙ニ行  
き王ヲ請ふ王去きを許さ因



さて我の明應二年西曆一千四百九十二年をもて開帆  
し、三十余日よして、一大邦を發見せし、是より歐洲の人  
陸續其の土に至る、即今の北亞米利加之土、是あり、  
此の他、牧擧に暇あり、忠臣、孝子、英雄、學士、良工  
等の肖像、たよび行爲等の画圖、其の確實あるものを撰  
び、解説せんことを要す、幼稚も、解説し、就き問ふと  
あり、仔細よ、おきを解き、時よ、保母よ、問ひを  
お出し、答をおさしむるおとあるべし。

春の日 ねと〜話

吁、日の餘程あつくありぬ、朝あしたる事、昨日の様、な

不ゆるあり、おのしや、晝あらん、おと小僧見て來と  
といふ、小僧、ハイといひ、立ちて窓よそのぞき見て歸  
り、おとあつくありぬ、や、おと圓〜といふ、

小僧學問せぬ故、おと愚あるおとを言ひ出で、おと  
お、おのしき、おのまりといふべし。

龜 同上

龜を賣り歩く者あり、或人見て、萬年も生るものあれば、  
徳ある買ひのりあり、おと一匹買ふべし、されど、屹と萬  
年をうけあふといへば、ハイ、是が萬年の請合あり、屹  
と、おと猶念をねして買ひ、歸りておとを泉水に入まね

きくは翌日たきて見まが、龜の死は失せさる、ヤまくま  
龜賣のあ、いゝは掛直いへばとて萬年の一と晩の餘り  
みくくと龜賣の來るを俟ちて、コリヤ龜賣萬年の請合  
の一夜は死んだの何といたるものぞといへば、龜賣さ  
このぬ顔みて、コリヤ申す夕の萬年め、

商人の請合の方便といふものみて、よろづも敢て  
憎むは足らぬ、それを屹と請合のするの買人のわろの  
あるあり、

盗人 同上

盗人あり竊は或家は去のび入る、物ぬきまんとするを、

亭主見つけておき盗人までといふ、盗人れどろきて走  
り行く、亭主までくといひつゝ、三尺棒をのゝえ、走  
行くを追ひ駈ちて、盗人のたぢり、木賊圃へ駈ち入  
るみぞ、亭主つゞきて駈ち入る、其處此處たづぬきども  
見えぬおまゝ、

人の物を盗むの固よりあゝき業あり、惡業をおま者  
の、自其の身を害ふもおまらき道理あり、おの盗心の  
らよをく、終は木賊の爲めはおまら、おろされら  
らん、

篋頭店 同上

篋頭店の招牌、さんきり五分刈、其の外御好次第と  
あき出してあり、或人來りて御好次第とあまは、我が好  
む所を頼まれといへり、亭主きりて、畏れぬといふ、さ  
れば我が髪を一莖れきりかき給へといふ、亭主あ  
ききぬと、否とも言ひぬ、少く思案の体あり、や  
ゐて剃刀を砥石よりけ、手にて刃を合せ、さて宜く御客  
様一莖れきり、おしめ下されといふ、或人赤面して去  
りぬ、

世よいふ無理をいふおも程あるものといふ、是あり亭  
主無理の上の無理をいひおけて、或人を辱めむ、さ

まは、無理の、言ひぬものぞいふ、

### 素娥の衣裳

素娥嘗て母君よりむらひ、妾の身体にあへる寸法の衣裳  
を製して給へといふ、母君さらばとて、三日の夕方よ  
其の寸法を取、八日又仕立あがり、著せ申して  
こゝに、素娥の身体肥えて衣裳適はせ、さらばとて又寸  
法を取、仕立らせ、十五日又ありて、著せ申してこゝに、  
又肥えて身体又適はせ、さればとて又寸法を取、仕立  
らせ、廿一日又あきを著せ申せ、此の度の素娥の身  
体瘦せて衣裳又適はせ、今の母君もあきを給ひて、投

や里給ひくことぞ、

世の變遷、素娥の肥瘦は同く油斷をべらるるに、又世の流行を追ひ、常は寸法は合はせんとせよば合ふ時あり、大概ふくむてねくべし、

不孝者

不孝ある子ありしに偶二十四孝のおとをまじり、孝行の徳神明は通するをうらやみ、其の母の病床は近づき聲を和らぎ、さしていひけなく、母上よ、箒を嗜み給ふに、母の曰く、おの雪中に、箒はあるまじ、然らば鯉魚は如何母の曰く、寒天氷堅くしておとを得るに、益難あるべし、さ

まは箒の鯉魚、いづきありともものぞこ給へ、又何ありとも望み給へと、強ひおまじ、母は打ちまじりて常は變遷し、優き我が子の辞をあとりひ、されば、饘少く喰べ多しといふ、不孝もの怫然として怒り、色を顯はし、もの知らぬ老媪め、其の様あるもの、廿四孝中は、おまじあまきぞといひあり、

孝は、人の常行あり、名利の爲めなせるものなあり、此の不孝もの、益し何れ褒美なても得んとての、お入り入るべし、をさしきかきとあり、

藥草 同上

一客あり、郊外に出でて、蛇の蟾蜍を呑むを見る、其の蛇の腹膨脹して斗樽の如く、悶え苦くして草叢の中をのぞきあぐる、忽ち一草をもとめておきを咬む、腹よりの細くありて、其の所よりせぬ、客此の草を消食の良薬あらんとれり、ひ數莖を採りて歸るさに、或知己の家に至り、牡丹餅を食ひ、強ひるに才のせ、腹さくるまで喰べたり、程をきて腹痛も出、氣息も絶えんをあり、又ありぬ、客忽懷をさぐり、その草を取り、おきを嘗めたる、目くらさて睡るの如く、一身癱へ痿きて死す、失せしとぞ、

いまだ試みざる薬、決して嘗むべからず、世よおの薬、彼の呑みて大に功能あり、あどいひ、或の家傳、或の神佛の傳法、あど称ふる薬を、とむる者あり、其の人の親切のやど、深きほど、容易よおきを呑むべからず、唯醫者よ就き、聞き合せて用ゐるべし、

ト居 同上

或人市街の雑沓をいとひ、新に居宅を郊外に設けんと、友人あり、曰く、野外の曠濶にして景色に極めて美ありべし、されど盗人の用心こそ肝要あり、只嚴重とせしむるに志く、あしと、既にして居宅落成せり、因りて友人至



見見るに盡く四壁をふさぎ、僅一一枚の戸をたてたる  
のみにして、殆穴居の如くおまき、如何おまき、かく四壁  
を塞き給ふや、野外曠濶の景、其の詮おまきとあらむや  
といふ、其人答へて曰く、曩の御意見の如く嚴重から  
さき、危くと存し、此の一枚の戸口もあけまじとねり  
ひらりと、

かゝる人の曠濶ある郊外、四壁を塞きて、住居せん  
よりの、寧市街雑沓の地、おまき、心やまあるへ、

納涼 同上

主人晩飯を喫く、炎熱、堪へむ、涼床、おまき、打ちおけ、小

僧をして扇おむむ、小僧空腹をあらへ、力をまひめて主  
人を扇く、久くして止めむ主人賞して曰く、頗涼、汗  
の何處への消えて行きたり、小僧の曰く、其の汗、こあ  
奴の一身、おまき、

おまき、亦人の子おまき、ねりひやるべし、

志摩の龜島 同上

志摩の、小國おまき、其の海面、龜島といへる島あり、周廻  
僅一里、島中の一村、皆漁夫、おまき、あまをてたる住  
家あり、一童子嘗其の父、伴ひ、鳥羽の町、至り、生  
きて始めて繁華の地を見、おまき、驚き、目まよひ、父、問

ひて、此のまき日本といへば、父叱して曰く、人まきるば  
笑はん、日本の更まきよ三倍せりと、

鳴民父子の固陋笑ふべし、地理學をあたへば、おどろ此  
の如きおとあらん、日本の六十餘州江戸の八百八街  
されば、江戸の大ありといへる一話と同日の話あり

小鳥

一小鳥あり座舗に飛び來り、左右を顧みつゝ、一瓶子の  
水を飲まんとせきども、嘴短くして飲むおと能はざ、因  
りて首を傾ち、嘴をもて瓶子をつつき、打ち壊らんさお  
おどろの瓶子の、固より堅し、小鳥の力弱し、いので打ち

壊るべき、小鳥益飲まんおとを欲し、百方術を盡し、終は  
一奇策を考へ出でたり、小鳥飛びさきて庭前の小石を  
啄み來り、おとを瓶中に投むるおと數回おどろの、瓶中  
の水ハ漸次に上騰して、溢るゝに至き、此はねきて縦  
に飲みて去る、

小鳥種々の術を盡して、終は水を飲むおとを得たり、  
凡人とくして其の志せ所の事ハ、工夫を盡せを成らざ  
といふおとハ、あるまじきぞ、

燕雀

或家の檐下に燕巢あり、乳燕來りて子を生子、秋風の吹

く頃去りて暖地は往き、陽春風暖ある日、又來りて舊巢  
を訪ふ、中は一雀あり安然として我の居とく、更は動く  
色あり、乳燕諭して曰く、雀君よ、我の居あり、我の嘗  
て營こゝ所あり、去りて他は往のまよと雀  
奴きいて叱して曰く、我既は在り、汝去り立ち去るべけ  
まよと、乳燕猶辞を和らぎ、再三説諭せしめると、雀奴乳燕の  
柔和ある氣質より入り、更はうけ引く氣色ありて  
るべ、乳燕の黙然として去る、さて去の乳燕途中みて群  
燕は遇ひ詳は雀奴の舉動を語る、群燕皆憤激して曰  
く、直は雀奴を誅せべし、我等柔弱ある如くと雖、豈は怨

を報むること能はざるの理ありんやと、因りて共は謀  
を定め、群燕各遠近より粘土を啄み來り、その舊巢の戸  
口を塗る、雀奴出づる處と能はざりて巢中はあてて死せ、

捕雀

或村の里正、經濟の去とて明あり、一日刈稻は群雀の集  
ふを見て、大は感して曰く、群雀の啄む所の稻は、蓋し少  
々はあらざ、一石は一升と概算して、五十石は五斗、百石  
は一石、此の村は千石の高あり、千石あれば十石、十石の  
價は、數十圓にあたるあり、雀の餌食又大あらざや、も  
群雀を捕り盡さば、年々數十圓の益あるあり、今日まで

おとに心づのさるゝ、くやくき事共あり、いざ群雀を捕ふべくと村民を呼びあつめ、或の網或の粘種々の器械まで捕へく、日からまして皆捕を盡したるけま、先づおまみて明年より年々十石、即數十圓の益を得るると誇り顔は語をあひ多り、かくて明年に至り、早晩の稲苗皆植をつけ、さて刈りあげてこまに収穫甚少なく、其の減少十石二十石あるは、いふかる故あらんと、村民打寄りて評議するに、一老農まこと出でて曰く、群雀年々十石の稲を啄むと雖、又能く稲を害する悪虫を食ふあり、本年の収穫の少きは、實は害虫の多きによきり、

されば群雀の、収穫を害するものなあるは、却て収穫を助くるものありと皆其の言は服し、おまより他は行き、雀を捕へ再び村中を放ちくとぞ、  
里正の經濟笑ふべく、凡何事によらむ、一得あるは、一失あるものあり、深く考ふべく、

獅子

獅子老いて死せんとも、群獸相祝して曰く、獅子今死せんとま、おまより獸類の中、安寧あるべく、實は彼は害せらるるもの、擧げて算ふるに暇あるは、群獸皆曰く復讐の期、おの時あるべくと、共は走りて獅子の病床に至る、

野狐先ッ獅子を睥睨して冷笑せり、次きに豺狼もこ  
出でく獅子の面を唾き、次き牛あり、其の角をもて  
獅子の瘦身を突き、次き野猪も亦其の牙をもて突く、  
群獸のゆるぐまゝにて復讐をあら、其の怨をもちら  
せ、最後又一驢馬あり、蹄をもておきを蹴るおと再三あ  
り、傍又一老馬あり、依然として爲せ所なきお如く、驢馬  
問ひて曰く、你何ぞ一蹴せざるや、你は獅子をねきて舊  
怨なきや、老馬答へて曰く、舊怨なきに、あゝむ、然もど  
も其の衰弱を乗、讐を復せり、豈に拙劣あらむやと、  
允弱を凌ぐは、拙劣あり、老馬の一言、實に警戒とせり

鵜と鳥

又足るあり、食ふも、暮すも、あま、京師も、世々自  
鳥鵜はいへる、如何に鷗殿御身の果報あるお水、水  
上は身を浮めて息ひあら、何の苦もあく、腹の下ある  
魚をやまくと取きて食ふ、我等は、終日飛びある  
まては食ふ事少く、多ましく乾く魚、又、菓の實あ  
ど見つても、皆主ありて守り、嚴く、おれは、胸をひや  
て容易に取るおと難く、此の故に常に食足らむとて苦  
く、疲きて羽をやめんとて、木にとまれ、又脚の勞  
あり、御身を學びて水に入て魚を取らんとせれば、忽

又水を喰ふ、あか羨ましの鶉殿や、飽きこち給ふ食を、少  
く此方へも施し給へる、吝惜御心のあといふ鶉答へ  
ていふ、鳥殿くさあ思ひ給ひぞ、夫きよ見給へ、水  
又浮びて何の苦もかく食を得ることく思ひ給ふべけ  
れど、水の中みて足ををさらのもる事、少くも隙なく、其  
の苦勞ひとゝたあらむ、其の上魚も生ある物かれ、中  
く心易く取て得難く、上より見給ふと、水中の働きと  
い、大なる相違あまと思ひ給へ、大海廣きれども終日魚  
よあつて食あまと思ひ給へ、或は風波のそげき時  
に、終日巖穴は食あくて暮を折もあま、免角うき世の自

由は豊ある事、あまきものあり、あましく御身は施し與  
ふべき餘計の食、あらむ構へて御身ひととせとたれ、ひ  
給ふあ、いづくも同じ秋の夕暮まで候もの、をといひ  
い、鳥もあうといひて、飛ひ去りぬ、

此の一話、古き童女の昔物語あまども、頗味あま、鳴  
呼人の世のありさま、あまは準へて知るべし、

### 性急の損

昔時二人の男、同じ船に乗せて行き、ある一人、性つ  
き急あり、日和あつく舟のねをき、苦しき晝夜あま、ろ  
を悩ましく形、あま考たま、一人、性たどやあま、舟の遅

まを苦くまぞ、能く食く安くいねて、顔色うるはしく、其の所は著まきしるべ、二人一時は陸まのなる、此の間船おそくとて心を苦くめし人何の益あるや、只三つあら苦くめるのミ、おま心短あま人の戒とまべし、天下のまと我力あしがまきまとい、只天ままのせねくべし、心を苦くむるの、おろのあま、

此の一話の、貝原翁のものせしきし文の中にあまるあま、よま戒といふべし、

兎と亀 同上

兎の、獸類中の最能く走るものあり、一日亀は遇ひ、共は競走をおま、亀は甲あもし、兎は足あろし、故は兎は走りて走るかま、先まに行き、牛を顧みて笑ひ曰く、亀や速く来るべし、何を遅まや、你の此の村外は出つる頃、我の國境を越ゆべし、亀は、一言の應あく、唯一心は歩行して方向をあやまらむ、兎又顧みて何を遅まや、你的國境は近づく頃、我跡よま走り行くも遅あらむ、されば我の暫く睡眠して行くべしと、草を枕し打ち卧しぬ、さて亀は、休まほしと歩々國境に至る頃、兎目をさまし、大は驚

き一躍風の如く、國境に至り見まは、亀の、既ニ國境を越え從容とて曰く、我此ニ在リ、競走ハ、我勝テ里と兎大ニ恥ちて去る。

猿 事實

信濃國伊奈郡入野谷村の獵師冬の日獵ニ出てたる所、大木の上ニ大なる猿の居るを獵銃ニて打ち取リ、其の夜、家に歸リ、明日皮を剥き取らんハ、冷え凍りて不便ならんと、爐の上ニおけねきたるに、深更ニ至リて子猿等多く來りて、掛布おきし親猿の腋ニ取まつき、このるく、爐ニて手を炙リ、其の疵をあやめたりと、村

人の話ある所、いとあはせかり、共ニ是の如く、  
獸類と雖、親をわりふと此の如く、人として孝行の心なきものハ、あやぬ筈あり、

老農

一老農あり、其の死するに臨ミ、三人の子に遺言して曰く、今汝等ニ譲るべきものあり、只田圃の中ニ、若干の金圓を埋めねきたり、汝等三人おきを掘りて共ニ分つべしとて、終ニ相果する葬禮の式をいして後三子ハ、田圃の中其處此處を尋ねても確ニおきといふあてあけられ、片隅より掘りかへし、遂ニ荒き果てたる田圃まで



も残るかく掘るすれども、一片の貨幣だも得るおとあ  
く、三子の、あまき果てたり、さて暫くしてその掘るへ  
したる田圃より、收穫を得るおと常々倍せり、此もたき  
て三子始めて感して曰く、父の遺言は田圃の中は金圓  
を埋めたまきとのおの事あるべくと、三子の益耕耘を  
つとめ、終は家富に榮えくとぞ、

此の一話の、古く歐米の人口は膾炙する所あれとも、  
頗味あり、實はや勞力おそ貸財の本あるべけき、

農夫の馬

一農夫あり、一日我の兒と共に或市場におもむき、

物品を買はんとして、飼ひねる驢馬を牽き出たり、往  
くおと一里許ありて、一友人は遇ふ、友人の曰く、你何そ  
愚かるや、驢馬はもと重荷を負はむる爲め、飼ふも  
のあらむや、されば你等相共は騎りて往くべく、何を足  
を勞せるおとのあるべきぞ、農夫おきを聞き、大に理あ  
りとし、父子共は騎りて往く暫くして又一友人は遇ふ、  
友人の曰く、你何ぞ不仁あるや、父子共は一小驢に騎り  
て往く小驢の力能く重きを負ふと雖、益二人を乗せる  
は、堪へざるべく、農夫おきを聞き、又大に理ありとし、我  
兒をして驢馬より下らしめ、往くおと數十歩ありて、又

一友人は遇ふ、友人の曰く、我の兒をくして歩ましめ、你獨  
驢馬を騎る、何ぞ愛情の薄きやと、農夫去を聞き、又大  
は理ありとく、驢背を下り、我の兒をくして代を騎らしめ、  
往く事數十歩おいて、又一友人は遇ふ、友人曰く、健康か  
る一兒おいて、驢背を騎り、足弱ある父翁をくして歩まし  
むるは、不孝か、你何を下して父翁を騎せざるやと、農  
夫勃然として嘆息して曰く、嗚呼我人の言は従ひ、屢諸  
の舉動をおせとも、終は衆人の意は適ふと能はざると、  
此はれきて驢馬の四足を結束し、長き棒を貫ぬき、兒と  
共お昇きて、市場に至り、市人笑はざるものあり、

凡百事皆人の意は適はんことを欲せむ、其事決して  
あらざるあり、此の一話の、この舎を道傍につくる、三  
年おらざるといへる支那の昔話と同意あり、

若雨日

昔時一童子あり、名を若雨日といふ、一日其の父、斧を與  
へて遊ばしむ、若雨日喜ぶと限をなく、直は携へて庭  
園に至り、樹間を徘徊し、樹を伐り、斧を試む、一櫻樹あり、  
花開きて爛熳なり、去をを見て忽ち其の幹を伐り、去り  
て又他樹を伐らんとす、此の櫻樹は、嘗父の殊は愛せり  
所あり頃刻して父亦庭園に來り、櫻樹の仆るを見て

大に駭き、若雨日を呼び怒りて曰く、櫻樹を伐りしむるは  
你あるかと、若雨日の知らざると言ひぬ、又他兒の行爲と  
も言ひぬ、只慘然として涙をうるべ、父の顔を打ち見や  
す、此の樹を伐りしむる、即兒ありと、勇敢の色を顯はして  
其の實を告ぐ、父深くおきを感じ、其の罪を赦せしとぞ、若  
雨日の何人ぞ、米國革命軍の雄將、若雨日華盛頓あり、  
世の童子怒りをねそと、過ちをかくく、實を告げざる  
者、往々おきあり、實は拙劣の所行あらむや、

蟹

蟹、あまたの子をもちけるが、其の子おのきの癖又似て

横をくまをるを見て、其の母おきをあをまきて曰く、汝  
等何とてよおさまに歩むといひ、おさまは、子供等も慎ま  
てうや給はる、我等ひとりあさりのこもあはむ、我等  
兄弟をかく、此の如く、おららば先母上あおませ給へ、  
そきを學ばんといふよ、さらばとて、母先またちてある  
くさまを見て、其の子供等、おかく、笑ひたりとあり、  
此の一話、伊蘇保物語に載せたるを引き、あり、れ  
よそ子にをくふるは、親の道といひおら、教ふる道  
をあらむして、強ひてをくへんとする時、又この蟹  
の母のおとくあるべし、

幼稚園初歩

幼稚園初歩 卷二 終 其の母とあそぶ



明治十七年十月四日版權免許  
明治十八年八月出版

著者 静岡縣士族 飯島半十郎

埼玉縣武藏國比企郡  
松山町九十八番地寄留

東京府平民

出版人 福田仙藏

神田區通新石町廿一番地



